

昭和60年度

唐古・鍵遺跡

第22・24・25次発掘調査概報

1986

田原本町教育委員会

昭和60年度 唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報

正誤表

頁	行	誤	正
22	14	折り返えし	折り返し
	19	めぐらす8は	めぐらす。8は
24	11	貼布	貼付
26	30	} 烈点	} 列点
	33		
29	31		
34	4		
35	7		
38	9		
49	26	大担	大胆
51	14	暖傾斜	緩傾斜
60	11	砂質工層	砂質土層
奥付		埋蔵文化蔵文化財調査4	埋蔵文化財調査概要4



第22次調査出土独鈷石



第22次調査出土絵画土器

序

四方、山々に囲まれた奈良盆地はその自然環境の良さから、数千年にわたる数多くの遺跡が育まれてきました。田原本町はこの盆地の中央部にあって農耕文化の栄えたところであります。唐古・鍵遺跡は日本でも屈指の弥生時代の農耕集落跡であります。

唐古・鍵遺跡の調査も継続して9年目、また、昭和11年の唐古地の発掘から既に半世紀をむかえることとなりました。発掘も第25次まで進展し、遺跡の範囲をほぼ確定するところまでできました。また、出土遺物は豊富で多岐にわたり、調査ごと注目されることが多く、重要遺跡として再認識せざるを得ない状況となってきました。

さて、本書では昭和60年度におこなった唐古・鍵遺跡の第22・24・25次調査の成果をまとめることができました。本書に示した調査成果が、幾分なりと利用・活用していただければ幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点があるかと思えます。御批判、御教示を賜われれば幸甚です。

今後も唐古・鍵遺跡については調査を実施していく予定であり、また、史跡指定にむけ準備を進めているところであります。どうか、関係各位の御協力と御指導をお願いする次第であります。

田原本町教育委員会教育長 岩 井 光 男

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が昭和60年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵所在の唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は橿原考古学研究所の指導を得、現地調査は田原本町教育委員会がおこなった。
3. 調査に際しては土地所有者をはじめ、唐古・鍵在住の方々に御理解と御協力を賜った。記して感謝します。

また、調査補助ならびに整理、概報作製にあたっては、塚田良道(同志社大学大学院)、桑原久男、紀和邦明、吉井秀夫(京都大学)、加田隆志、前川浩一、中山和之、廣瀬克彦、豆谷和之、久山高史、田村昌弘(奈良大学)、石橋美和(京都女子大学)、吉川和(京都芸術短期大学)、福井孝志(花園大学)、梅原一恵、河野典子、北川英子、片岡保子の諸氏に協力して戴いた。

4. 調査及び概報作製にあたっては下記の方々より御教示を賜った。記して感謝します。
同志社大学 森浩一、橿原考古学研究所 石野博信、寺沢薫、土橋理子、松本洋明の諸氏。また、第22次調査出土の条痕文土器等については山口大学 中村友博先生より多大な御教授を賜った。
5. 本概報の執筆・編集は藤田三郎がおこなった。

本文目次

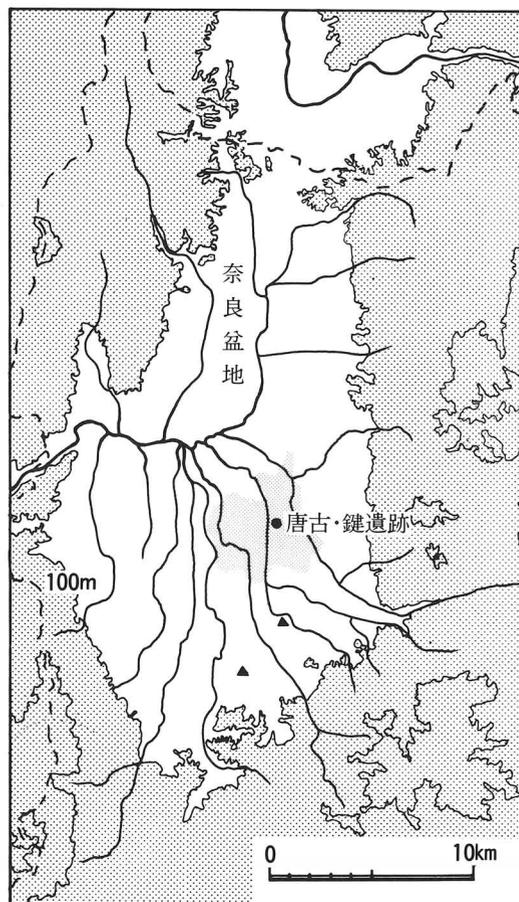
はじめに	1
I. 第22次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	3
2. 遺構	
(1). 層序	3
(2). 弥生時代前期の遺構	6
S K-201・S K-210, S K-202・S K-203・S K-206, S K-205, S D-1201, S B-201	
(3). 弥生時代中期の遺構	8
S K-1201, S K-1101, S K-103, S K-102, S K-105, S K-101,	
(3). 中世の遺構	13
中世大溝, S D-54, S D-50・51・52・53, S K-51,	
3. 出土遺物	
(1). 土器	16
S K-201出土土器, S K-1201出土土器, S K-1101出土土器, S K-102出土土器, S K-105出土土器, S K-101出土土器, 絵画土器, 搬入土器, 中世土器	
(2). 石器	45
打製石器, 磨製石器	
(3). 木製品	46
(4). 祭祀遺物	47
(5). 獣骨・自然遺物	47
4. まとめ	
(1). 遺構	48
(2). 遺物	49
II. 第24次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	51
2. 遺構	
(1). 層序	51
(2). 弥生時代中期の遺構	51
柱穴群, S D-201, S D-203, 北方砂層	
(3). 弥生時代後期・古墳時代の遺構	54
S D-107, S K-103	
3. 出土遺物	55

4. まとめ	57
Ⅲ. 第25次発掘調査の概要	
1. 調査の全容	58
2. 遺構と遺物	
(1). 層序	58
(2). 遺構と遺物	58
S D-102・S D-104・S D-105, S D-201	
3. まとめ	60

はじめに

唐古・鍵遺跡の継続調査も9年目をむかえ、史跡指定へと動きだそうとしている。今年度の調査はこのような動向に相應するように遺跡の北東側の範囲確認調査を二件おこなうことができた。しかしながら、緊急発掘も国道24号線沿線にて二件、唐古池の老朽ため池補修工事に伴う調査一件をおこない、相変わらず、遺跡地への開発事業は後をたたない。

本書に掲載した分はこの内の三件分である。第22次調査は第8次調査で範囲確認をおこなった所であるが、宅地造成に伴い緊急調査をし、弥生時代及び中世の多くの遺構を検出し、多大な成果をあげることができた。また、第24・25次調査は遺跡の北東部にあたり、発掘調査としては初めて遺跡の東半部分の解明にのりだすこととなった。第24次調査ではムラ内部から環濠にかけての部分、第25次調査では弥生時代前期の環濠らしき遺構を検出し、範囲確認調査として充分成果をあげることができた。また、出土遺物においても第22次調査で多くの愛知県からの搬入土器が検出され、当時の交易範囲の一つがおさえられたことは重要であった。これらの他に多量の土器・石器等があり、今後の整理が期待されるところである。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置

第1表 昭和60年度唐古・鍵遺跡発掘調査一覧表(国庫補助対象分)

調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
第22次	鍵308番地	宅地造成	雑地	小川正信 岡田勝芳	1985. 9. 3~11.28	約 250㎡
第24次	唐古141番地	範囲確認	水田	飯田正勝	1986. 2.13~ 3.31	約 130㎡
第25次	唐古198-2番地	範囲確認	畑	森田嘉博	1986. 3. 6~ 3.31	約 30㎡



●●●●● 遺跡(集落)推定範囲
 ■■■■■ 既調査地 (第1~20次)
 ■■■■■ 昭和60年度調査地
 (第21~25次)(本書掲載分・第22・24・25次)

第2図 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

I. 第22次発掘調査の概要

1. 調査の全容

本調査地は遺跡の西部にあたり、周辺においては第8、11、14、20次調査がおこなわれ、遺構密度の高い地区として判明している。当地は既に範囲確認調査（第8次調査）としてその一部を調査し、弥生時代前期から中世に至る諸遺構を検出した。その後、本地が宅地造成されることになり、この為、調査範囲外を対象とし、発掘調査をおこなった。

調査は東西10m（北辺）～14m（南辺）、南北18mの台形にちかい第1トレンチと5m×6mの第2トレンチを設けた。第Ⅰ層から第Ⅲ層までの水田耕土層や床土層などを機械力によって除去し、その後、人力による遺構検出作業を開始した。遺構はトレンチの全面で検出した。調査の結果、中世の大溝を各トレンチの半分で検出し、その他の部分で弥生時代前期から中期の遺構を多数検出した。弥生時代前期の土坑の分布域や弥生中期の井戸の変遷、中世館跡の構造を解明する上で重要な調査となった。



写真1 第22次調査現地説明会風景

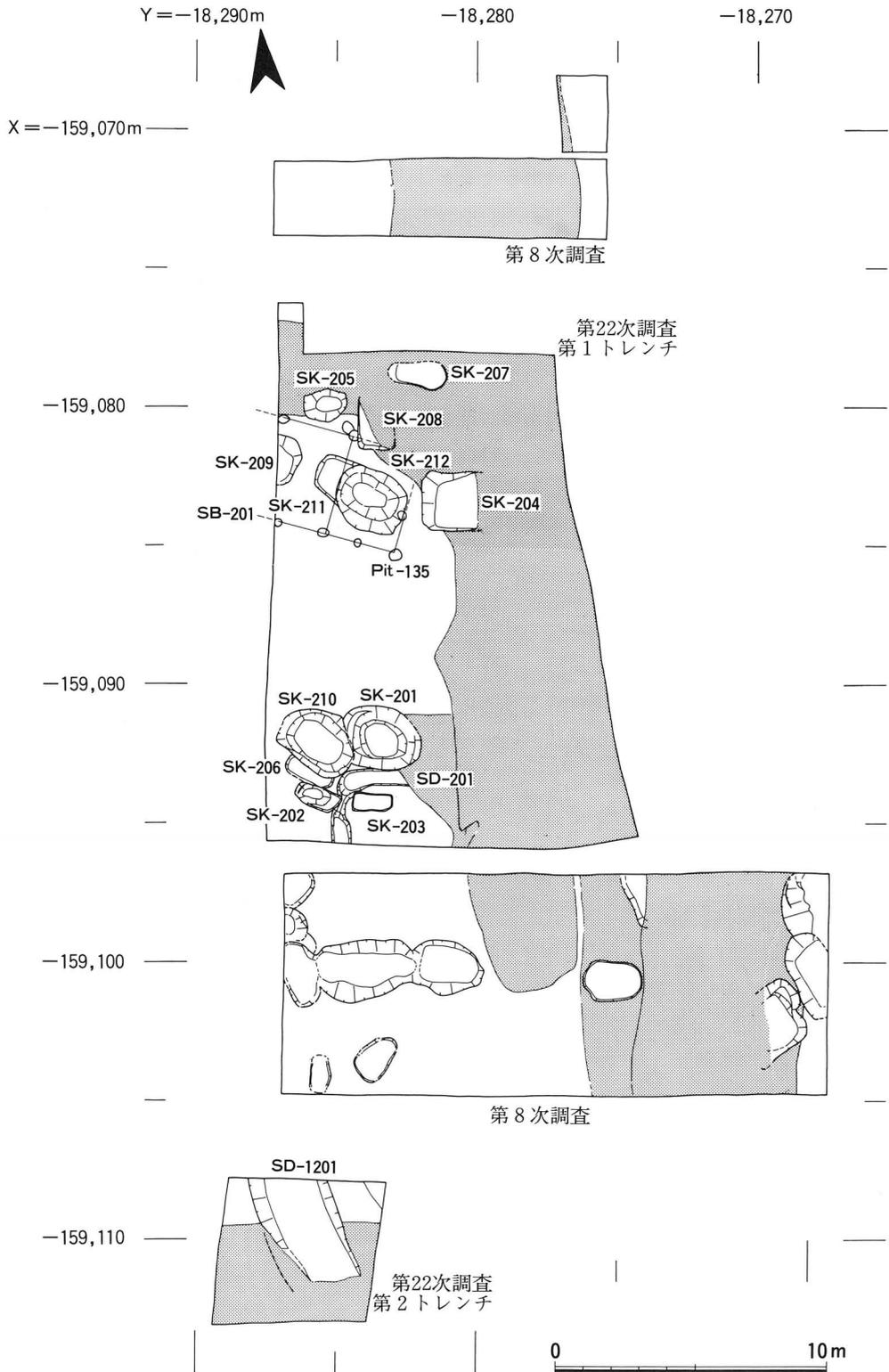
2. 遺構

(1). 層序

第22次調査地は遺跡の西部にあたるが、この周辺は一つの微高地の想定地でもある。この為、弥生前期のベース層まではわずか0.8mしかなく、その上面を覆う土層も単純な構成をしている。基本的な層序は、第Ⅰ層・水田耕土層、第Ⅱ層・水田床土層、第Ⅲ層・黄褐色砂質土層、第Ⅳ層・

第2表 第22次調査主要土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	床面形態	坑底土層	規 模 (m)			坑底標高	施設物	時 期	主要遺物	備 考
					長 軸	短 軸	深 さ					
SK-51	楕円形	二段の逆台形	平坦	黒粘	2.1	1.1	0.8	45.6	杭2本	中世	独鈷石 条痕文土器	橋脚か
SK-52	不整形円形	逆台形	皿状	粗砂	約4.0	—	0.5	46.5	なし	中世		
SK-53	円形	逆台形	—	—	径3.4 以上	—	1以上	—	なし	中世		
SK-101	楕円形	二段の逆台形	平坦	黒粘	2.65	1.9	1.0	46.0	なし	弥・Ⅳ	ミニチュア 土器 杓子	井戸
SK-102	円形	半円形	皿状	青灰色 粗砂	径1.1	—	0.7	46.1	なし	弥・Ⅲ	炭化米 木材	井戸
SK-103	円形	二段の逆台形	平坦	粗砂	推定径 3.5	—	1.5	45.4	なし	弥・Ⅲ	完形鉢 四脚容器	井戸
SK-104	長方形	逆台形	平坦	粗砂	0.7	0.15	0.4	46.75	なし	弥・Ⅱ		SK-203 を切る
SK-105	楕円形	円筒形	平坦	灰白色 粗砂	0.9	0.65	1.65	45.25	なし	弥・Ⅲ	水差他完形 品3点 土器群	
SK-106	円形?	逆台形	平坦	青灰色 微砂	1.1 以上	—	0.5 以上	46.3	なし	弥・中期		中世大溝 に切られる
SK-107	方形	逆台形	平坦	黄褐色 粘質土	0.8 以上	—	0.12	46.8	なし	弥?		中世大溝 に切られる
SK-201	楕円形	皿状	皿状	淡灰黒色 粘土	2.75	2.3	0.65	46.25	なし	弥Ⅰ・Ⅱ	板材 土器群	SK-210 を切る
SK-202	長方形	逆台形	皿状	粗砂層	1.6	0.75	0.35	46.3	なし	弥・Ⅰ		
SK-203	長方形	逆台形	平坦	粗砂層	1.4	0.65	0.3	46.65	なし	弥Ⅰ・Ⅱ		
SK-204	方形	逆台形	平坦	青灰色 シルト	2.2	2以上	0.6 以上	46.2	なし	弥・Ⅰ?		中世大溝 に切られる
SK-205	楕円形	逆台形	平坦	黒粘	1.5	—	0.9	46.05	なし	弥・Ⅰ	平鍬未成品 柱根	中世大溝 に切られる
SK-208	長方形	逆台形	平坦	青灰色 シルト	1.8 以上	1.3	0.9	46.1	なし	弥・Ⅰ		中世大溝 に切られる
SK-209	方形?	逆台形	やや 皿状	青灰色 砂質土	推定 1.8	—	1.4	45.5	なし	弥・Ⅰ	卜骨	
SK-210	長楕円形	逆台形	平坦	黒粘	2.9	2.2	1.1	45.9	なし	弥・Ⅰ		
SK-211	方形?	逆台形	平坦	粗砂層	1.6	—	0.75	46.2	なし	弥・Ⅰ		
SK-212	楕円形	逆台形	平坦	粗砂層	推定 2.8	2.2	0.75	46.0	なし	弥・Ⅰ		SK-211 を切る
SK-1101	円形	二段の逆台形	平坦	灰色 微砂	径3.0	—	1.4	45.6	なし	弥・Ⅱ	完形壺 平鍬	井戸
SK-1201	不整形楕円形	逆台形	平坦	黒粘	1.2	0.9	推定 0.8	46.0	なし	弥・Ⅱ	完形壺	中世大溝に 切られる SK-1201 を切る



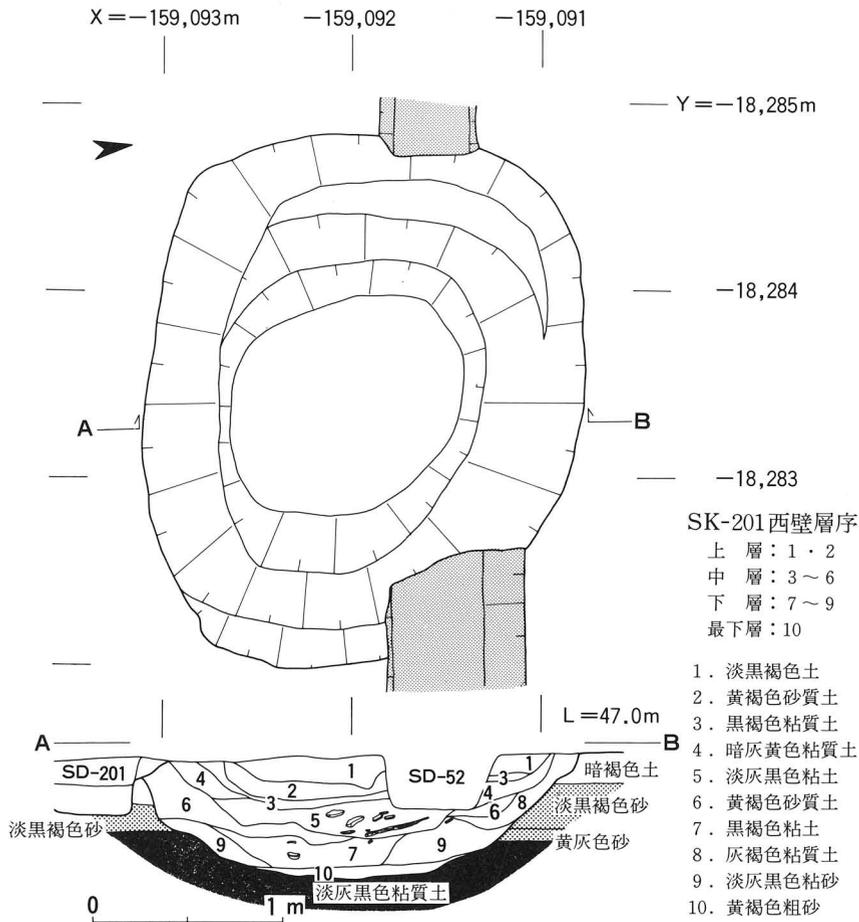
第3図 第8・22次調査 弥生時代前期遺構平面図

黄褐色粘質土あるいは黄褐色砂質土層、第V層・青灰色シルト層～微砂層、第VI層・灰黒色粘土層となる。第I～III層までは遺物をあまり多く含まない。第IV層の上面で中世素掘溝、第IV層の上面のやや下位より弥生前期の土坑から中世の大溝まで諸遺構を検出した。したがって、第V層以下の層では全く遺物を含まず、弥生時代以前に形成されたものであろう。

第IV層において、各時期の遺構を検出したことは本地が微高地であり、中世期における館形成時の削平が原因であると考えられる。また、中世の各遺構では削平時に二次堆積したと思われる弥生土器・石器類が多量に混入していた。

(2). 弥生時代前期の遺構

弥生前期の遺構は第1・2トレンチの全面で検出した。土坑は弥生前期末のものが多数を占めており、中には第I様式と第II様式の土器が混在する土坑もある。土坑は小土坑と大土坑の二種、溝は小溝1条、大溝1条を検出している。遺構は中世遺構に削平され、良好な状態のものは少ない。



第4図 SK-201遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)

S K-201・S K-210

S K-201・S K-210は第1トレンチ南西部で検出した大形土坑である。S K-201はS K-210を切って作られている。S K-201は長径2.75m、短径2.3mを測る楕円形の土坑である。深さは0.65mと浅く、土坑の断面形態は皿状を呈している。土坑の堆積は自然堆積層で、ベースの粗砂層と堆水時に形成された粘土層によって構成されている。土坑の堆積を四大別すれば、上層：淡黒褐色土層、黄褐色砂質土層、中層：淡灰黒色粘土層、下層：淡灰黒色粘砂層、最下層：黄褐色粗砂層である。遺物は中層・下層より多量に出土した。土器・木器・石器などで、土器は完形品を含んでいない。木器は板材などである。土器は第Ⅰ様式と第Ⅱ様式の土器を混在しているが、出土状況からはこれらを分かつような状況は呈しておらず、一括廃棄されたものであろう。

S K-210はS K-201の西側で検出した土坑で、その一部をS K-201に削られている。長径2.9m、短径2.2mを測り、長楕円形を呈する平面プランをもっている。深さは1.1mで、土坑の断面形態は逆台形を呈する。土坑の埋土は四分層で単純な構成をしている。第1層は暗黄褐色砂質土で、土坑の埋土と思われる。第2・3層は灰黒色粘砂で、この土層は黒色粘土と青灰色粘土のブロック、土坑肩部のベース砂層の流れ込み層で構成されている。第4層は灰白色粗砂層で、土坑掘削直後の流れ込み層である。遺物は全体に少ないが、第2層で第Ⅰ様式の土器を検出した。土坑の形態や埋土の状況から木器貯蔵用の土坑と思われる。

S K-202・S K-203・S K-206

S K-202・S K-203・S K-206は第1トレンチ南西部で検出した小土坑である。これらはともに主軸を東南東から西北西方向にとるもので、規模もほぼ同じものである。平面プランは長方形で、長軸1.4～1.6m、短軸0.6～0.8m程のものである。S K-202とS K-206はほぼ並行し、S K-203はこれらと0.5m東へ離れている。これらの土坑では、どれも炭灰層の埋土を有していた。遺物は炭灰層より土器小片や獣骨を検出したが、その量は少ない。土器は第Ⅰ・Ⅱ様式混在である。土坑の性格は不明である。

S K-205

第1トレンチ北西部で検出した楕円形の土坑である。土坑の北半分を中世大溝によって失なわれている為、その規模は定かでないが、長軸1.5m、深さ0.9mを測る。土坑の埋土は三分層される。第1層は暗黄褐色土で固い。第2層は灰褐色粘質土、第3層は灰黒色粘土である。第1層は土坑埋土で、第1・2層は遺物は少ない。第3層では木器を主体とする遺物を検出した。土坑のほぼ中央で平鋏の未成品を水平の状態を検出し、その平鋏の上に柱根と思われる丸太材が直立していた。その周辺には板材が平鋏にむかうように並んでいた。この他の遺物としては土器小片がある。本土坑は木製品貯蔵用の土坑と思われるが、土坑埋没途中において、柱穴としての土坑に転用されたと思われる。平鋏の未成品は礎板とし使用されたと考えられる。時期は第Ⅰ様式である。

S D-1201

本溝は第2トレンチで検出した溝で、南南東—北北西方向に軸をとるものである。溝は中世大溝やS K-1201、S K-1101によって削平され、ほとんど原形を留めていない。溝幅推定3m、深さ0.8mを測る。溝の堆積は大きく四分層され、上層：黄褐色土、中層：茶褐色粘質土、下層：灰黒色粘土と暗青灰色シルトのブロック混在層、最下層：灰黒色粘土である。各層は20cm前後の厚さで形成されている。遺物は下層と最下層で検出した。下層では大壺の破片、木製高杯、イノシシの肩甲骨などが出土した。最下層ではイノシシの下顎に穿孔を施したものを検出した。時期は第Ⅰ様式である。

本溝は第20次調査で検出したS D-201と走行方向が同じで、時期も同時期であることから、この二つは同様の性格を有するものであろう。この二つの溝は集団あるいは遺構を区画するものであろう。

S B-201

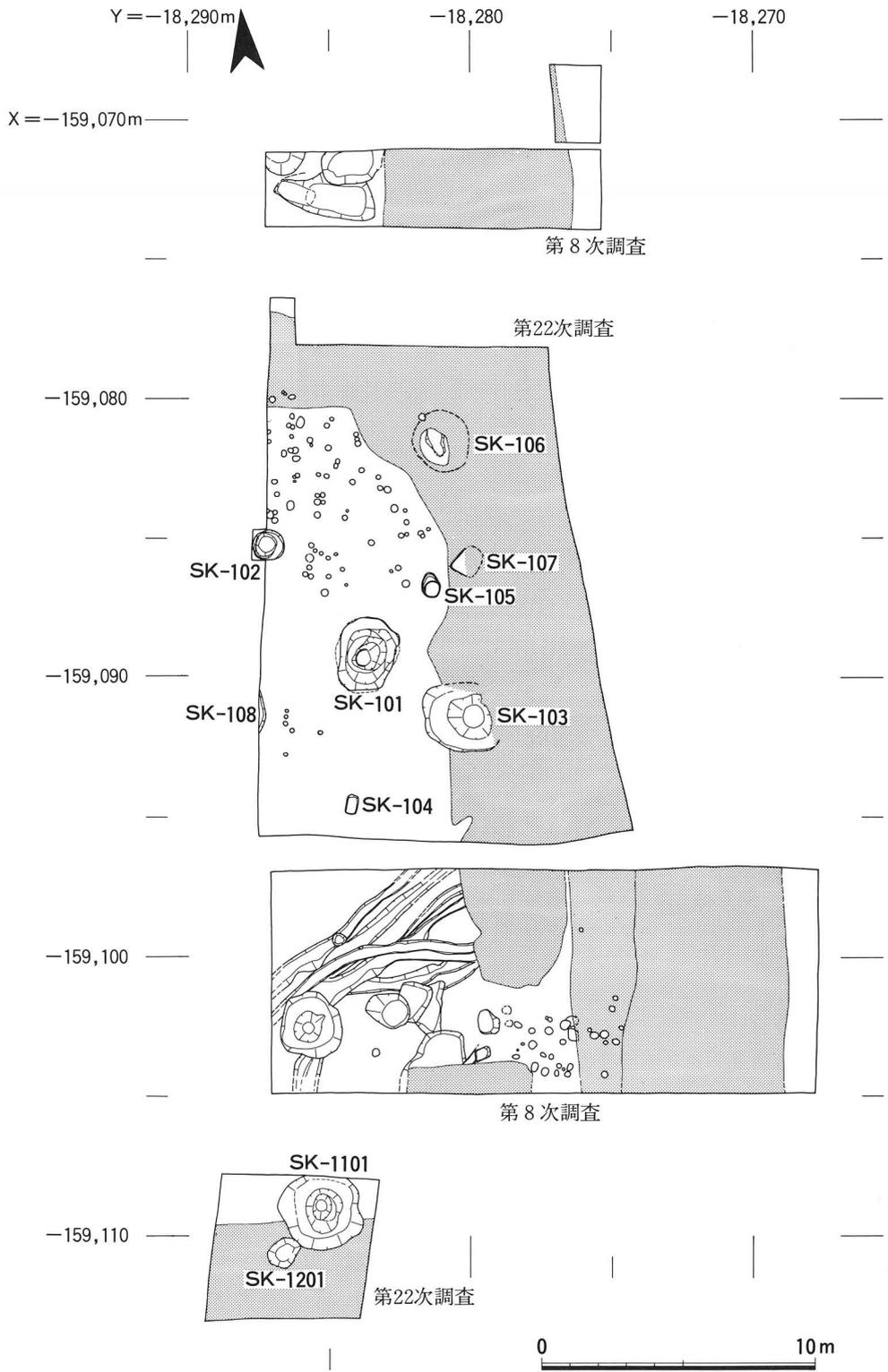
第1トレンチの北西部で検出した建物である。この付近では多数の柱穴を検出しており、建物群の把握は困難である。柱穴はその規模から20cm以下のものと20cm以上の2群に大きく分かれる。20cm以下の柱穴については建物の把握ができない。20cm以上の柱穴を中心にみると1つの建物が想定できる。東南東—西北西に主軸をもつ東西棟で、6つの柱穴を確認した。梁行3間、桁行4間と思われるが、柱間にばらつきがあり、確定できない。柱間は1.4～1.6m前後である。柱穴の1つであるPit-135は長径50cm、短径35cm、深さ46.5cmを測る。柱穴の底には径3cm程の棒が二本平行に設置されていた。礎板として使われたのであろう。本柱穴の埋没時には半完形の壺が投棄されていた。

(3). 弥生時代中期の遺構

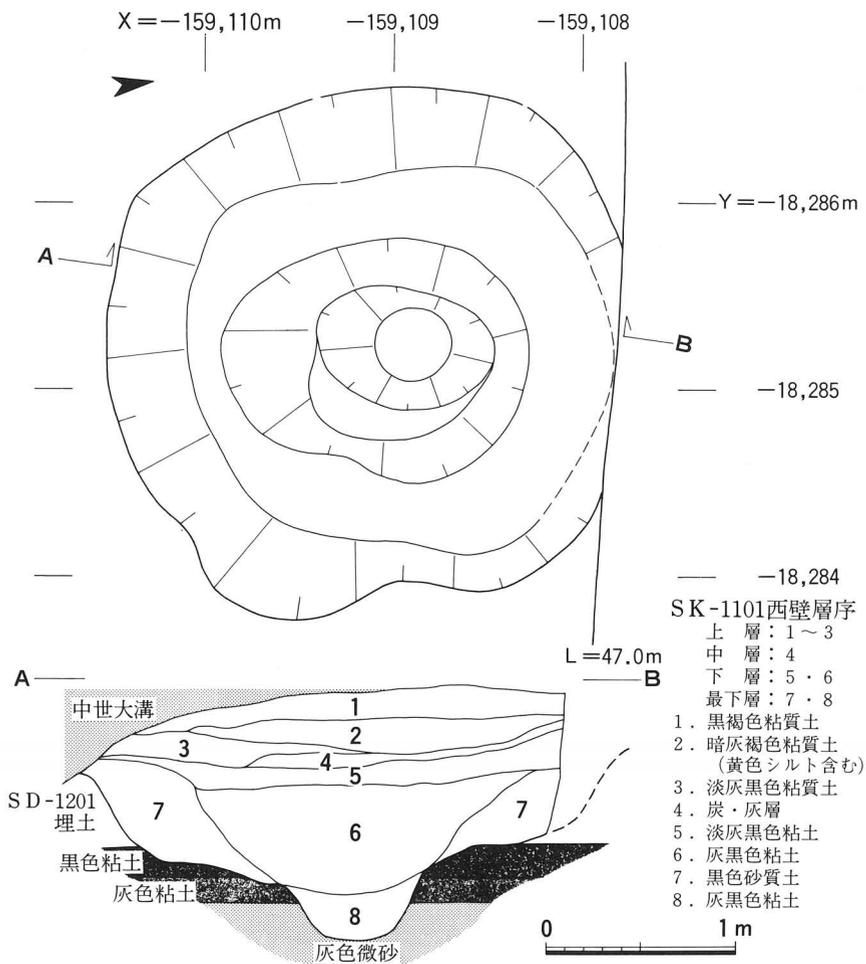
弥生中期の遺構は第Ⅱ様式から第Ⅳ様式までの各遺構が存在する。遺構の大半は土坑で、第Ⅰトレンチの中央部と第2トレンチで検出した。弥生前期の遺構数より少ない。これらの土坑も中世遺構によって削られ、遺構の残存状況は悪い。

S K-1201

本土坑は第2トレンチで検出した小土坑で、その上面を中世大溝によって失っている。土坑は長径1.2m、短径0.9mの不整楕円形を呈している。深さは現在0.45cmを測るが、本来の検出すべき遺構面からは0.8mあり、約半分が失われていることになる。土坑はS D-1201の一部を切るように掘削されている。土坑の埋土は第1層：黒褐色粘土(植物腐植土層)、第2・3層は灰黒色粘土で第3層は砂質をおびる。遺物は口縁部を一部欠いたほぼ完存している広口長頸壺を第1・2層にまたがって検出した。他の遺物は土器小片のみであった。小片の土器は第Ⅰ様式のものが多い。第Ⅰ・Ⅱ様式混在の土坑の一つである。



第5図 第8・22次調査 弥生時代中・後期遺構平面図



第6図 SK-1101遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)

SK-1101

SK-1101も第2トレンチで検出した大形土坑である。径3m、深さ1.4mを測り、円形を呈する土坑である。土坑はその中位にテラスを有し、断面では二段の逆台形を呈している。土坑の埋土は四大別できる。上層は粘質土、中層は約10cmの炭灰層、下層は土坑中央に厚く堆積した粘土層、最下層は土坑周囲に形成された流れ込み層で黒色砂質土である。中層の炭灰層以降の堆積は意識的な埋土であろう。遺物は各層より多量の出土をみた。良好な出土状況を呈したものに下層・最下層の遺物群がある。広口長頸壺や鉢の完形品、板材、原材、平鋏などで、土坑に投棄したような状況を呈していた。土坑は第Ⅱ様式の所産と思われる。その性格は土坑の形態から井戸の可能性が高い。

SK-103

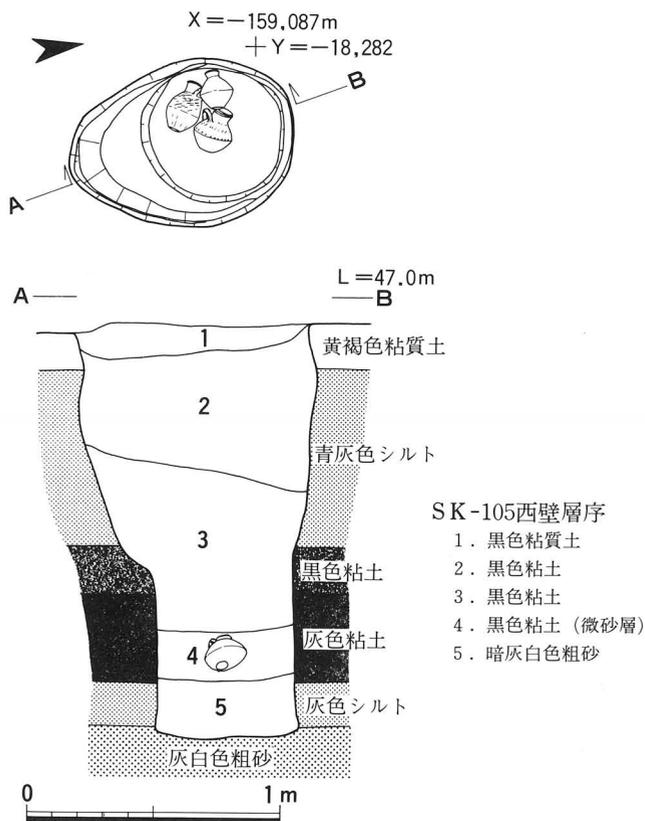
本土坑は第1トレンチのほぼ中央で検出した土坑で、その大半はSD-54によって失われている。推定径 3.5m、深さ 1.5mを測る円形土坑である。土坑は中位にテラスを有し、その断面形態は二段の逆台形を呈する。土坑の埋土は粘土層によって形成され、土坑の中位より完形の鉢1点を、また、その上部においては木製四脚容器やざる、板材、棒など木製品を多く検出した。土器類は少ない。時期は第Ⅲ様式である。本土坑はその形態から井戸と考えられる。

SK-102

SK-102は第1トレンチ西端で検出した円形の土坑である。土坑が調査範囲外に広がっていたため、トレンチの拡張をおこないその全容を明らかにした。土坑の規模は径 1.1m、深さ 0.7mを測り、その断面形態はやや深い皿状を呈している。本土坑は砂層上に掘削されているため、その堆積の下位は砂質土で形成されている。土坑中位より上の堆積は黒色粘質土で埋積しており、原材や大形土器片を多く含んでいた。また、炭化米などの植物遺体も検出している。時期は第Ⅲ様式でSK-105とあまり時期差がないと思われる。土坑の性格は砂層上に掘削されていることから井戸の可能性が高い。

SK-105

SK-105はSK-103の北西2mで検出した土坑である。土坑の上面での平面プランは長径0.9m、短径0.65mを測る楕円形であるが、土坑の中位ぐらゐから下ではほぼ円形を呈するようになる。土坑は深さ1.65mを測り、その平面規模に比して深いものである。その断面形態は円筒形を呈する。土坑はベース層である灰白色粗砂層まで達し、湧水が激しい。土坑の埋土は最下層の暗灰白色粗砂層（ベース流入土層）を除くと、黒色粘土で形成されている。第1層は淡黒褐色粘質土、第2～4層までは黒色粘土層である。この黒色粘土は1.3mにも及んでいる。遺物は各層に含まれていたが、



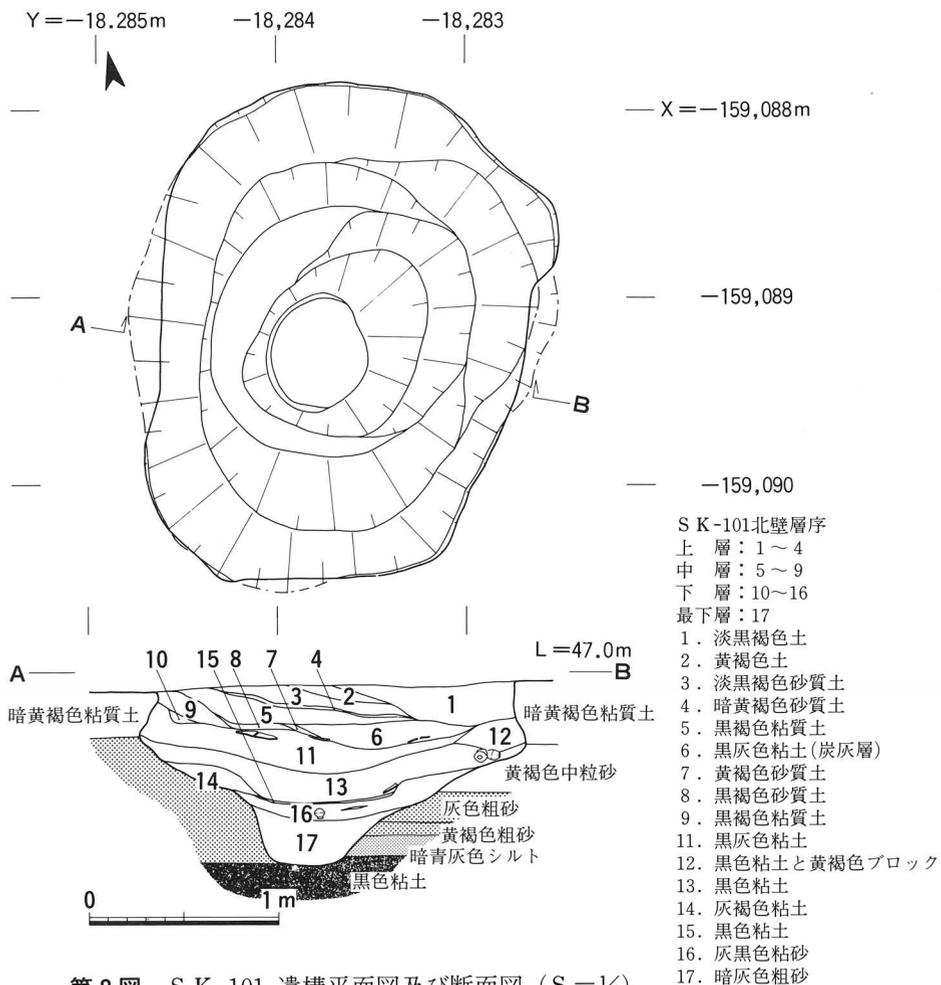
- SK-105西壁層序
1. 黒色粘質土
 2. 黒色粘土
 3. 黒色粘土
 4. 黒色粘土（微砂層）
 5. 暗灰白色粗砂

第7図 SK-105遺構平面及び断面図 (S = 1/30)

特に第2層では多量の土器群、第4層では水差形土器など完形土器3点が出土した。また、2層と3層の境では石庖丁1点、それよりやや下で小壺と砥石を検出した。第2層の土器群は埋土より土器の方が量的に多く、土器層である。完形品はなく、大形破片で半完形品が多い。第4層は完形の壺3点の他に小動物骨、炭化米、紐片などが出土した。本土坑の時期は第Ⅲ様式で、その性格はその形状から井戸と考えられる。

SK-101

SK-101は第1トレンチのほぼ中央で検出した土坑で、弥生時代の土坑の中で最も残存状況が良好なものである。本土坑の規模は長径2.65m、短径1.9mの楕円形を呈している。深さは約1mを測り、その断面形態はロート状を呈する。土坑は自然河道と思われる砂層上につくられているため、最下層は流入した粗砂層によって埋積している。土坑の埋積は四大別でき、上層：淡黒褐色土や黄褐色土などで形成されている。中層は黒褐色粘質土や黒灰色粘土層、下層は黒色粘土



第8図 SK-101 遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)

と灰黒色粘砂、最下層は暗灰色粗砂の構成順序を有している。土坑は堆水と土砂の流入によって埋没していったと考えられる。遺物は下層よりミニチュア土器4点と木製杓子1点を検出した。また、中層では半完形土器、上層では多量の土器小片を検出した。これらの中には中世大溝などから出土した大形絵画土器と同一個体の一片が含まれていた。このようなことから本土坑においてもその上面は中世期に削平を受け、土器が散在したものと思われる。時期は第IV様式で、SK-102やSK-105より新しい。本土坑の性格はその形状・立地から井戸であろう。

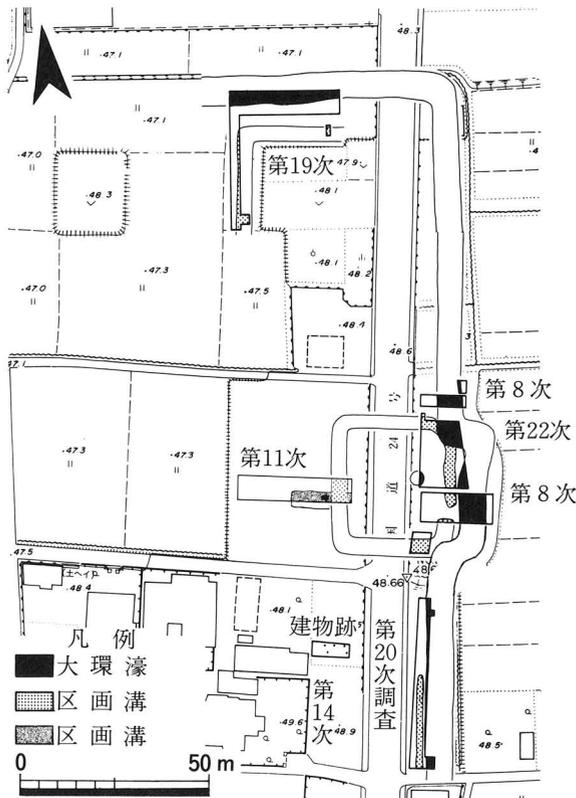
(4). 中世の遺構

中世の遺構としては鎌倉時代から室町時代の遺構で、小溝と大溝、土坑などがある。第1・第2トレンチの全面において検出した。これらの遺構は第8次調査や第11次調査で検出した遺構と一連のもので、中世館跡の一部である。これら中世遺構は大規模なものであり、弥生時代の遺構を大きく削平している。

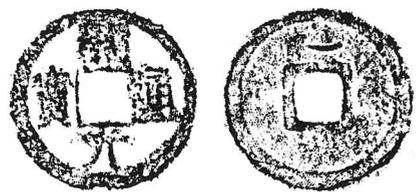
中世大溝

中世大溝は第1トレンチと第2トレンチで検出した。第1トレンチで検出した大溝はL字状に

曲折するもので、第8次調査で検出した中世大溝と繋がるものである。大溝は西側の肩から溝中央にかけて検出したため、東側の肩は未検出である。溝幅推定6m、深さ1.4mを測る。この南北溝に対し、第1トレンチの北端では東西溝も検出した。この東西溝と南北溝の関係は両溝の溝が同時存在か、あるいは東西溝の方が古いと思われる。土層からの観察では明確な切り合いはなく、南北溝が最終段階まで残ったことを物語っている。南北溝の堆積は大きく四分層され、上層：淡黄褐色土、中層：暗灰色粘質土、下層：淡黄色粗砂、最



第9図 中世遺構関係図 (S=1/200)



第10図 錢貨拓影 (S=1/2)

下層：暗灰色粘土である。遺物は中世のものは少なく、9割以上が弥生土器である。下層からは『開通元寶』の錢貨が出土している。第2トレンチで検出した中世大溝は東西溝で、第1トレンチで検出した東西溝に対応すると思われる。この東西溝は北肩から溝中央部まで検出した。溝の推定幅8m程であるが、上面肩から2mまでは浅いテラスを有している。深さ1.4mを測る。この東西溝に挟まれた方形区画の南北幅は約30m、第11次調査で検出された大溝Ⅰと本調査での南北溝に囲まれた東西幅は約32mとなり、一辺30m程の区画が想定できる。

SD-54

SD-54は第1トレンチの南東部で検出した南北溝である。溝幅約4m、深さ0.7mを測る。中世大溝の溝底より0.6m SD-54の方が高い。本溝は第8次調査においてSE-01として検出したものにつながり、南端において収束する。時期は中世大溝よりやや古くなると思われる。

SD-50・51・52・53

SD-50・51・52・53は第1トレンチで検出した小溝である。SD-50・51・53は南北溝、SD-52は東西溝である。溝幅は0.4~0.8m、深さ0.1~0.4mを測る。これらの溝は中世大溝によって区画された内部をさらに区画する小溝であろう。時期的には中世大溝とかわらないであろう。溝の断面形態はU字形で、その埋土は黒褐色粘質土等で埋積されている。

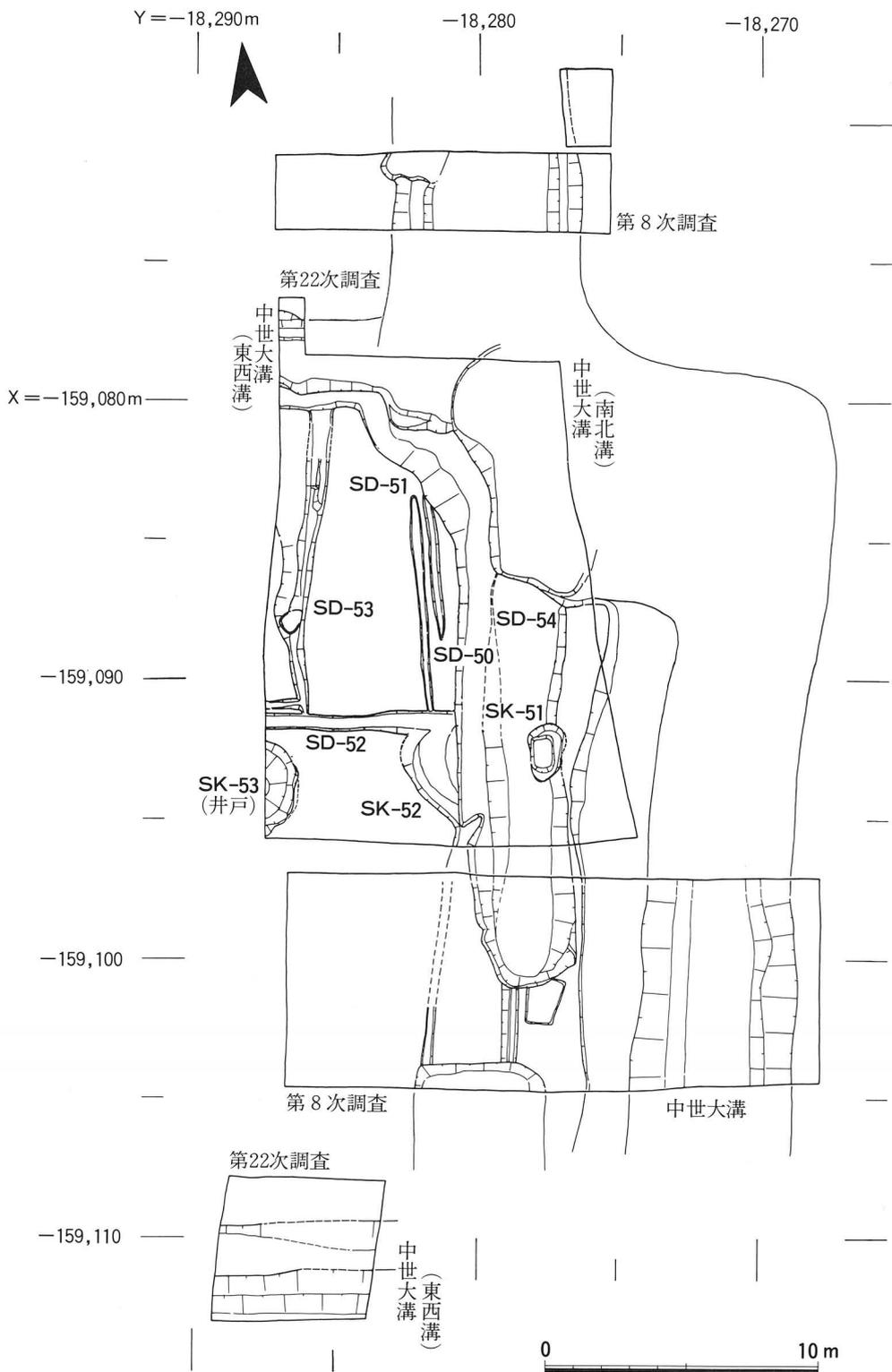
SK-51

SK-51は第1トレンチ南東部で検出した土坑で、中世大溝テラス部分に掘削されたものである。長径2.1m、短径1.1m、深さ0.8mを測る楕円形の土坑である。土坑は二段掘りになっており、下段部は長方形を呈する。土坑の埋土は砂層・砂質土層によって構成されており、土坑の中央部においては径10cmの柱材が0.5mの間隔をおいて並んで立っていた。遺物は弥生土器・石器等を多量に含んでおり、意識的に埋土中に混在させたのであろう。これらの土器に混じって瓦器・土師皿片が含まれていた。これらの状況から、中世大溝に伴う橋脚の可能性が高い。本遺構とは関係ないが、出土した遺物の中には独鈷石と条痕文土器が多量に含まれていた。土坑周辺の遺構が破壊された時の遺物であろう。

3. 出土遺物

出土遺物は土器・石器・木製品・祭祀遺物・獣骨・植物遺体と多岐にわたる。遺物の総量はコンテナ200箱を越え、これらの中では最も土器が多い。

土器は弥生土器が中心で、中世土器は少ない。弥生土器は土坑等の諸遺構から出土しているが、中世削平時の攪乱を受けているものも多く、保存状況は良くない。このようなことは石器についても同様である。木製品や獣骨、植物遺体は他の地区に比べ、粘土内の保存状況がきわめて悪く残存しているものは少ない。



第11図 第8・22次調査 中世遺構平面図

(1). 土器

今回出土した土器は弥生前期から中期の土器と中世の土師器・瓦質土器・陶磁器などがある。また、形象埴輪も数点確認している。これらの中で良好な出土状況を示したものに弥生時代の各遺構から出土した土器群がある。ここでは土器編年上、重要な位置を占める資料を中心に報告する。

SK-201出土土器（第12～15図）

SK-201の上・中・下層より比較的まとまった状態で土器が出土した。完形品は含まれていないが大きな破片が多い。中層・下層が多く、両層間の土器の接合もみられた(15)。また、上層と中層で接合するもの(1・16)もみられた。上層から出土した土器は2・8・9・24、中層の土器は3・5・6・17～20、22・23・26・29・30で、他は全て下層出土である。これらの土器群は接合関係や出土状況から短期間の廃棄資料であろう。

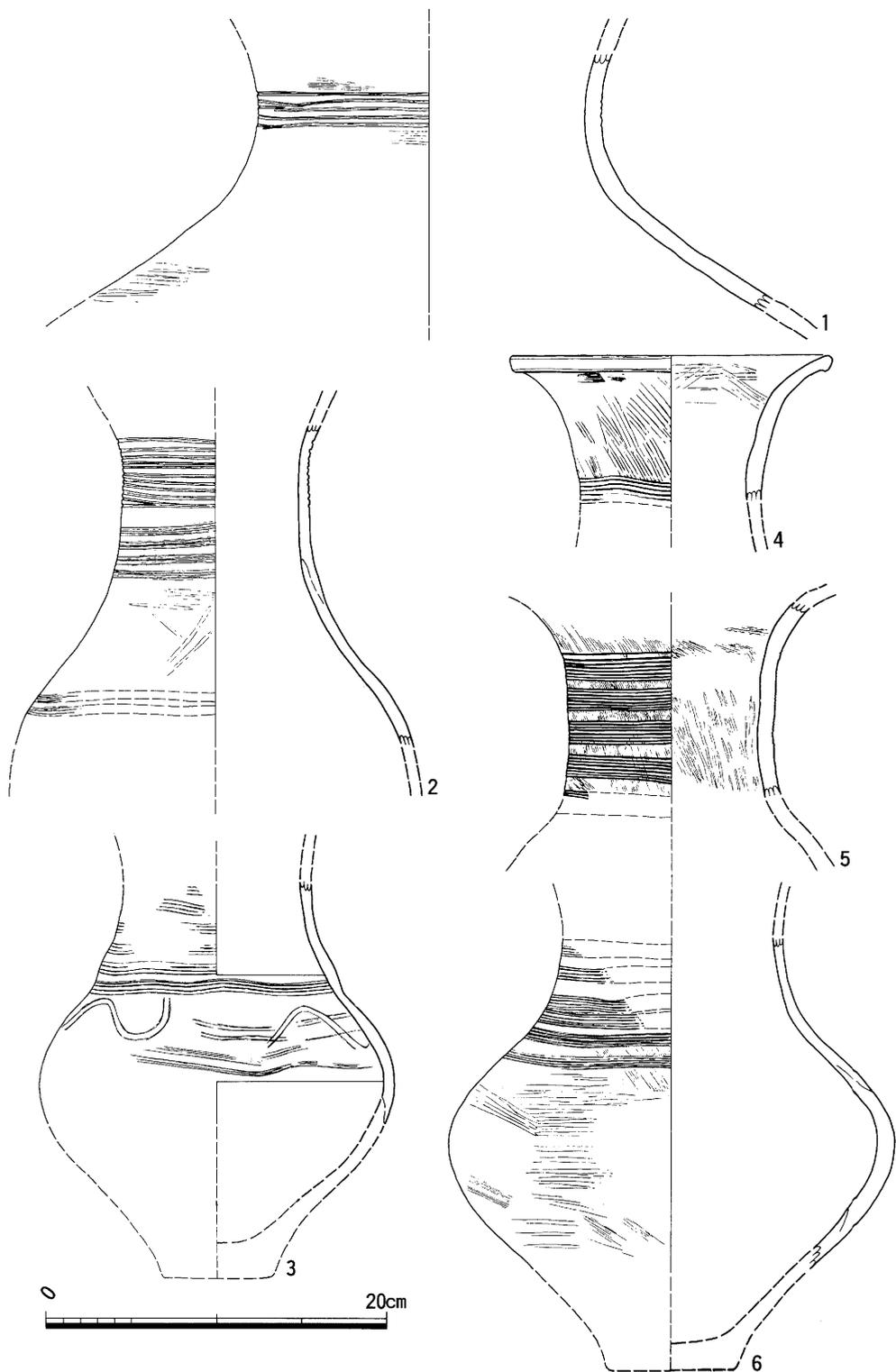
土器群のセットは壺・甕・鉢・高杯等で壺や甕が多い。壺は長頸化し、ヘラ描沈線あるいは櫛描文の文様を有する。また、貼り付け突帯は小さく多条化している。甕は無文のものが大半であるが、ハケ調整をもって仕上げる大和型甕も含まれている。鉢は大形鉢が存在している。小形鉢は櫛描直線文を有するものが多い。このような土器群は文様からいえば、ヘラ描と櫛描の二種が存在し、第Ⅰ様式と第Ⅱ様式の混在のように見える。しかし、各器種の形態などから第Ⅰ様式から第Ⅱ様式への移行期の一型式としてとらえることができると考えられる。

壺 1は大形壺、2～6、17～24は広口長頸壺である。1は肩部が張るタイプで頸部に5条のヘラ描沈線をめぐらす。2・3は頸部から胴部にかけてゆるやかに広がり、胴部が張らない壺である。2は頸部上半にヘラ描直線文11条、頸部下半に4条一帯（原体幅 5.5mm）の櫛描直線文を施す。胴部にも二帯の櫛描文を施すが、櫛描文の描き方は全体に稚拙である。3は頸部から胴部にかけて櫛描文を施すが、胴部の櫛描文は頸部のものと原体をかえて施文している。直線文と直線文の間には稚拙な波状文が描かれている。4・5・6は同じ形態のもので、各々の頸部には整った櫛描直線文が施されている。

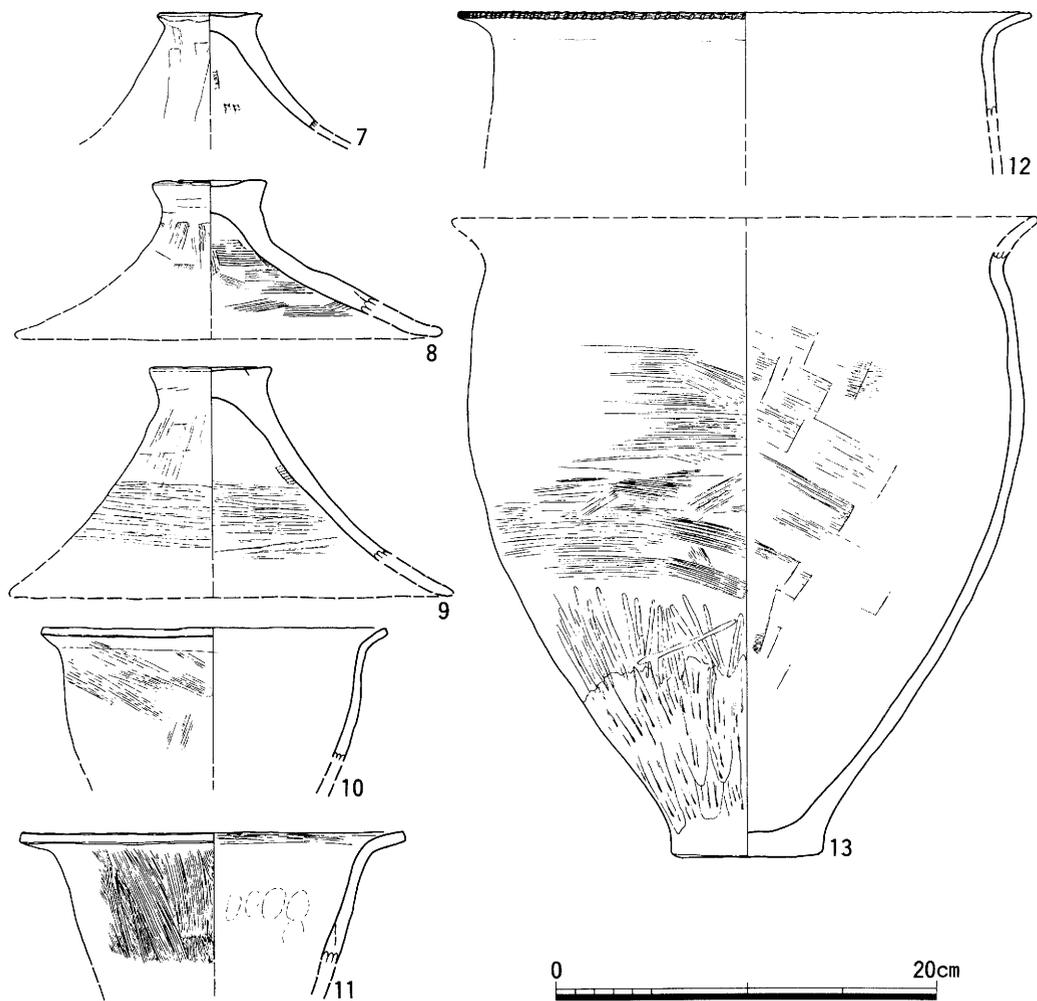
17～21は広口長頸壺の口縁部で、口縁端部の文様である。17～20はヘラ、21は櫛による文様を描いている。19は口縁内面に櫛による双頭渦文風の文様を描いている。22～24は壺の胴部で、22は頸部下にやや間隔のあいたヘラ描直線文を施している。23・24は小さな貼り付け突帯を設け、突帯上にヘラによる刻目をめぐらしている。

甕蓋・甕 7～9は甕蓋、10～13、28～30は甕である。7・8はハケ後ナデ調整をおこなっている。9の内・外面にはミガキがみられる。

10・11は小形、12・13は中形の甕である。10・11は口縁部と体部の境が不明瞭で、外面には斜位あるいは縦位のハケがみられる。10の体部中央は煮沸による二次焼成で赤褐色に変色し、器面は荒れている。12は内・外面ともに丁寧なナデをおこなっている。13は体部上半を横位のナデ、下半を粗いケズリ調整を施している。文様はもたない。28は中形の甕で、体部上端に8条のヘラ



第12图 S K-201出土土器 1 (S=1/4)

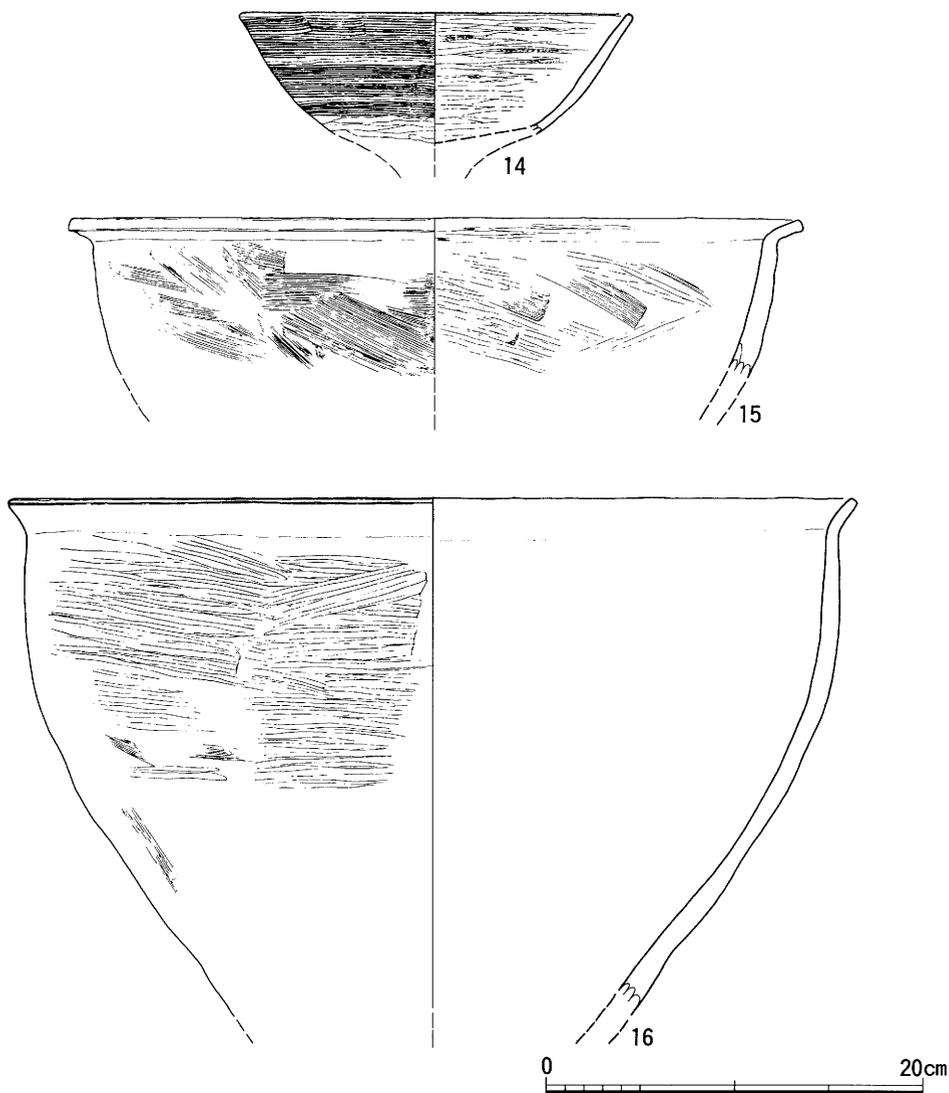


第13図 SK-201 出土土器 2 (S=1/4)

描直線文を施す。29・30は中形の甕の口縁部である。口縁端部は下方へ折り返えし、端面はハケによる刻目を施す。外面は縦位の、内面は横位の深く粗いハケ調整をおこなう。

高杯 14は高杯の杯部である。浅い碗形を呈し、外面には楡描直線文を施す。楡描は整っているが、継ぎ足しによるものである。文様間にはミガキが挿入されている。内面はハケの後、ミガキを施しており、全体に丁寧な仕上げをおこなっている土器である。

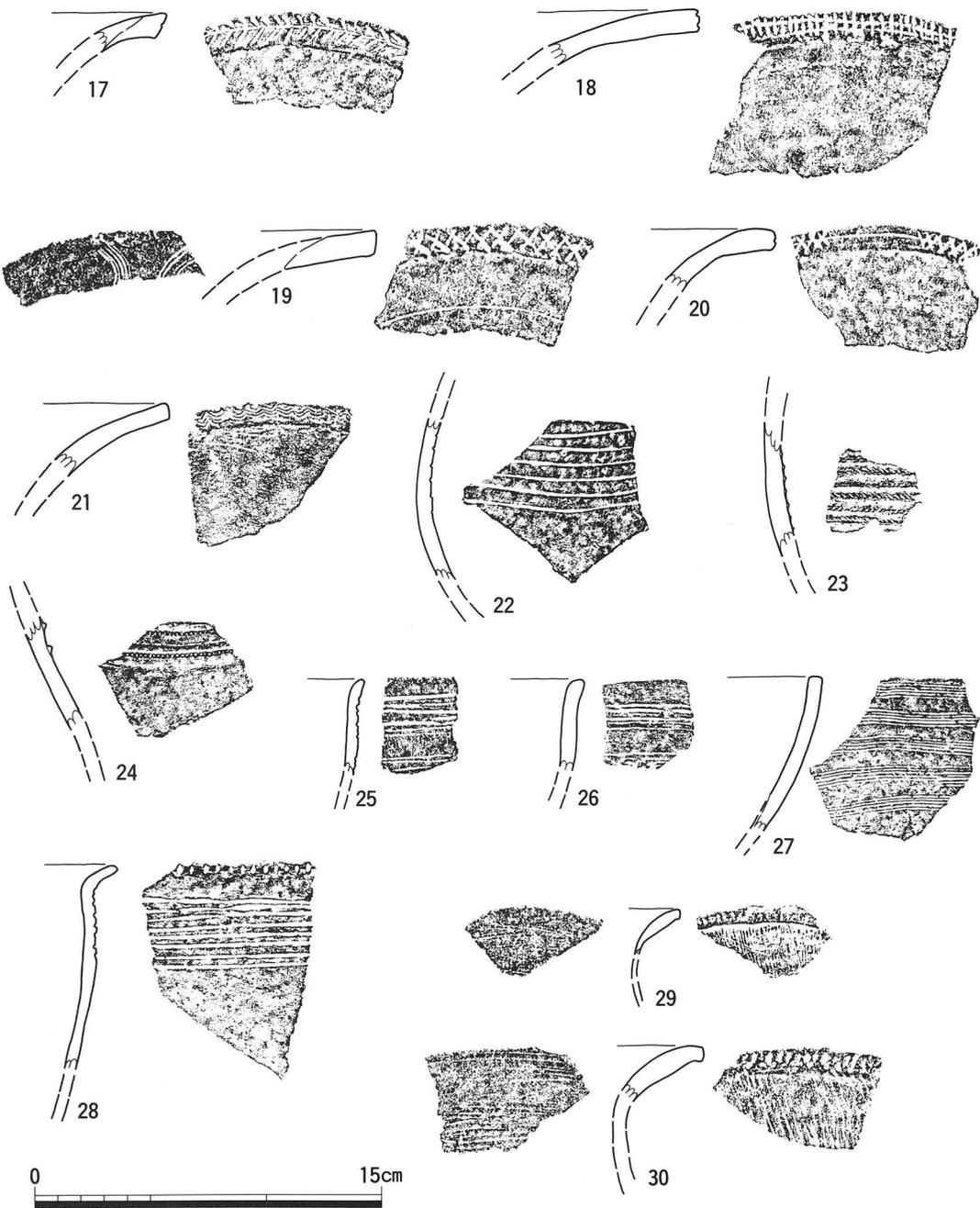
鉢 15・16は大形の鉢、25～27は小形の鉢である。15はやや碗形を呈し、内外面ともハケ調整をおこなっている。16は内面にナデ、外面にミガキ調整を施している。25～27は碗形を呈するものである。25はヘラによる直線文であるが、楡状に似せている。26・27は楡描直線文をめぐるしている。27は外面に煤の付着がみられる。これらの内面はミガキ調整がおこなわれている。



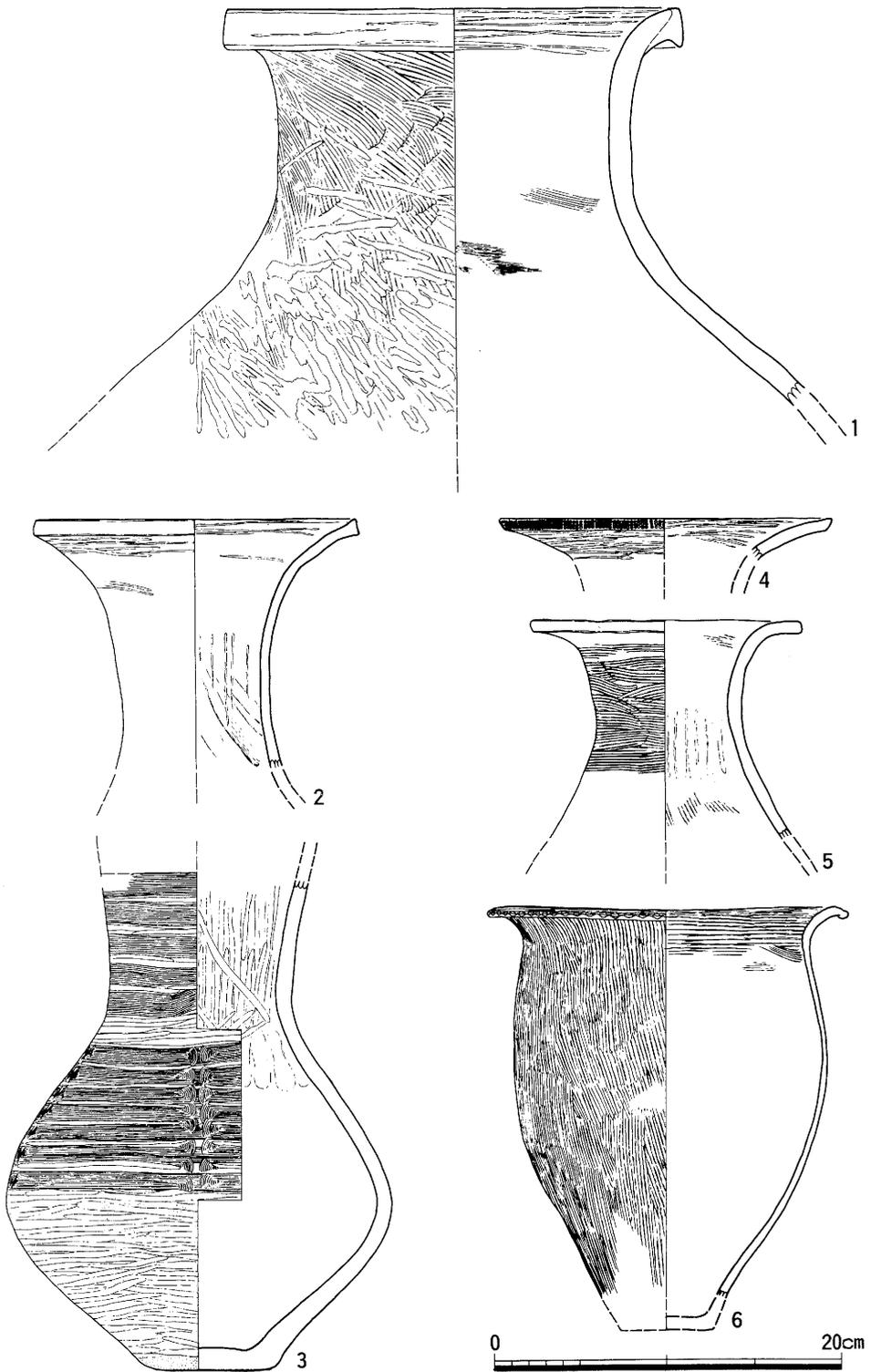
第14図 S K-201 出土土器 3 (S = $\frac{1}{4}$)

S K-1201出土土器 (図版15-1)

図版15-1はS K-1201より単独で出土した完形の壺である。口縁部の一部は意識的に打ち欠かれたのか、欠失している。器高33.7cm、体部径22.6cmを測る。体部はやや下膨れのする形で、口縁部にかけてゆるやかに外反する。口縁部はわずかに厚くなり、面を有する。外面、口縁部内面には太いミガキが施されている。頸部には5帯の櫛描直線文で文様帯を構成している。色調は暗褐色を呈し、焼成や胎土は前期の土器にちかい。



第15圖 S K-201 出土土器拓影 (S = 1/3)



第16图 S K-1101 出土土器 1 (S=1/4)

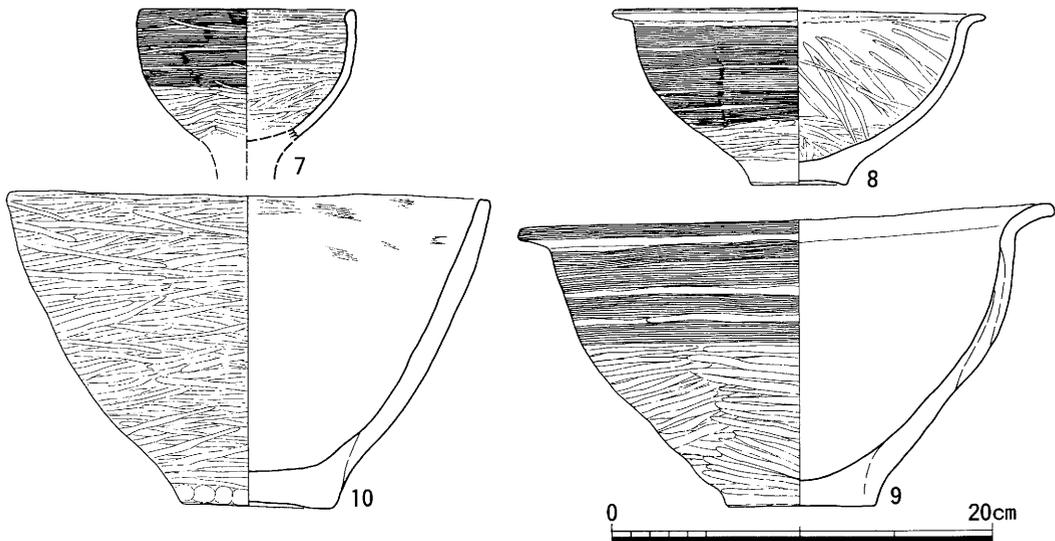
S K -1101出土土器 (第16・17図)

土坑の中層から最下層にかけて完形品を含む良好な土器群を検出した。中層と下層上位の土器には接合するもの(1・6)がある。5は上層出土の土器で、それ以外の土器は下層出土である。本土坑の下層を中心とする土器群は櫛描直線文を主体とするもので典型的な第Ⅱ様式土器として位置づけられよう。

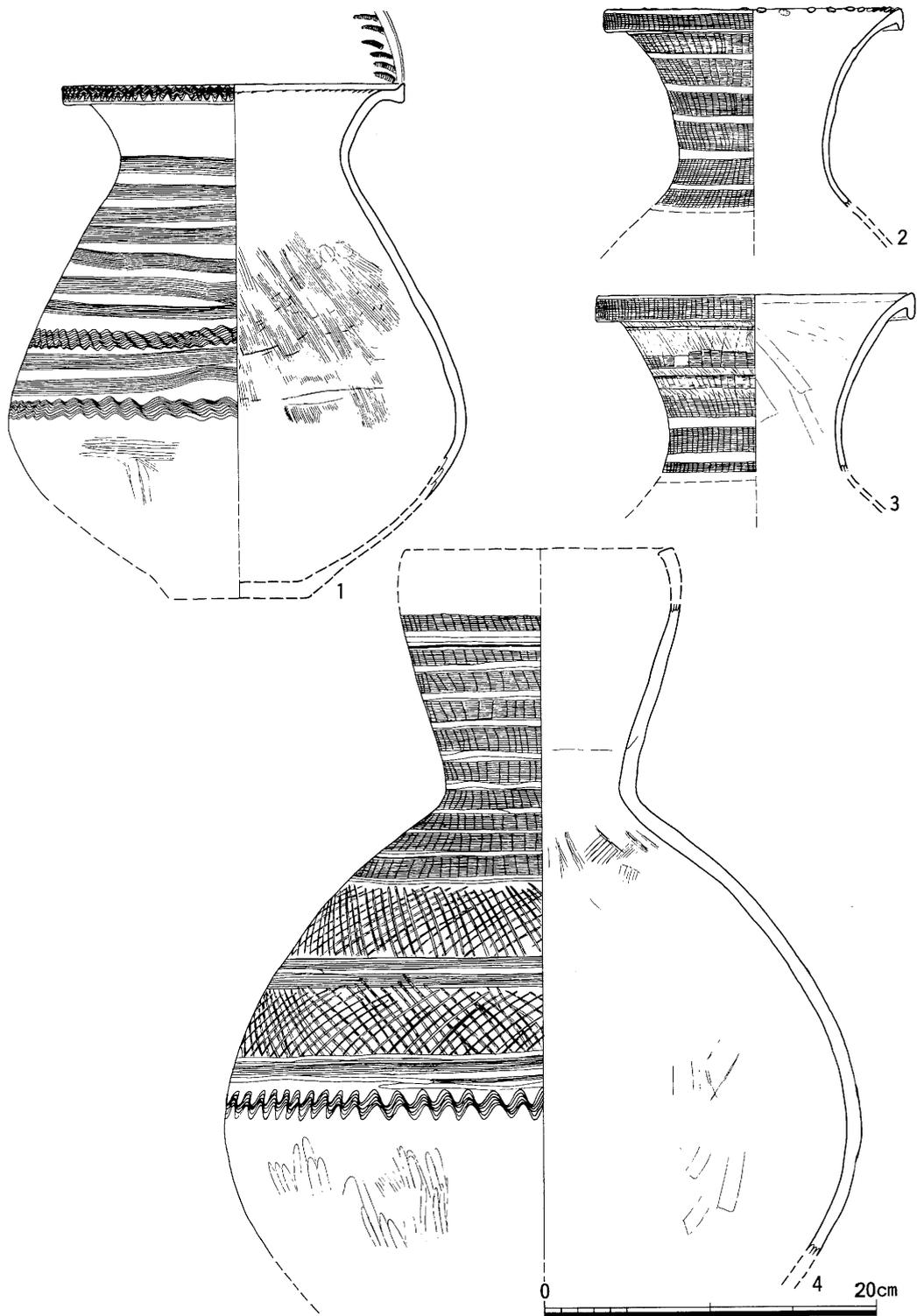
壺 1は大形の広口壺、2～5は広口長頸壺である。1は頸部が短く、小さく外反する口縁部の壺である。口縁部は下方へ肥厚する。外面は粗いハケを施した後、太いミガキをおこなう。口縁部内面にはわずかにミガキを施す。外傾接合による成形と思われる。2は無文の壺で一部にミガキがみられるほか丁寧なナデ調整をおこなっている。3は口縁部を欠くがほぼ完形の壺である。頸部・体部は精緻な櫛描直線文を施している。体部の直線文は四方に扇形文を配し、流水文に似せている。文様間にはミガキを挿入している。4は口縁部の破片であるが、口縁端面に櫛原体と思われるもので烈点をめぐらしている。5は朝日式の壺である。頸部には櫛描直線文をめぐらすのが、三回の継ぎ足しで一周するもので稚拙な描き方である。

甕 口縁部の発達した甕である。体部と口縁部の境は不明瞭で、口縁端部は下方へ折り返えしている。体部外面は縦位の、口縁部内面は横位の粗いハケを施している。口縁端部はハケによる刻目をめぐらしている。体部内面は丁寧なナデを施している。

高杯・鉢 7は高杯杯部である。半球形の杯部を有し、外面には櫛描直線文を4帯めぐらしている。精緻な直線文で、文様間にはミガキを挿入している。8～10は鉢である。8・9は碗形の体部に外反する口縁部をもつ、小・中形品である。外面には7と同様に文様をめぐらす8はほぼ完形品である。10は無文で、外面には太いミガキが施されている。内面は摩滅しているため、調整はわからない。



第17図 S K-1101 出土土器 2 (S=1/4)

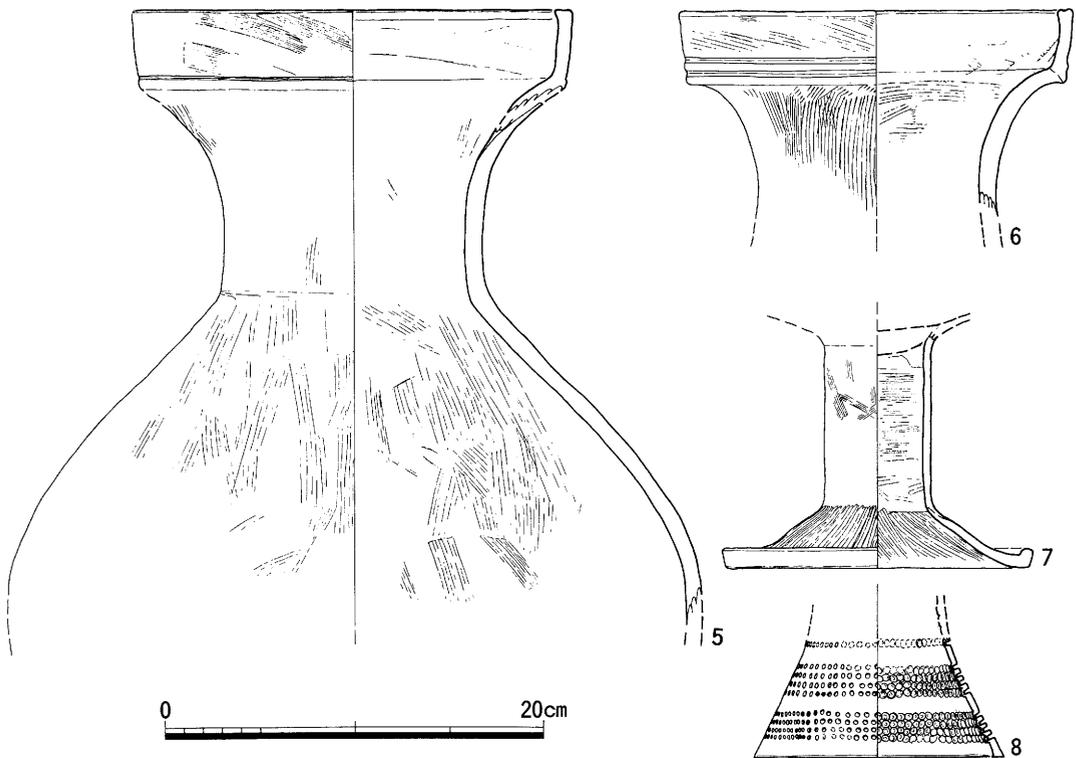


第18图 S K-102出土土器1 (S=1/4)

S K-102出土土器 (第18~20図)

S K-102は径 1.1m の小土坑である。本土坑の上層より大形破片を多く検出したが、完形になる土器はない。点数が少ないため、器種組成を詳細に知ることはできない。壺では櫛描簾状文を多用した細頸壺、広口壺が目立つが、短頸壺には凹線文がめぐらされている。台付鉢の脚台部には小円孔を多数穿つなど各々に特徴がみられる。後述するS K-105の前段階に位置づけられよう。

壺 1~3は広口壺である。1はやや下膨れのする体部に短く外反する口頸部がつく。口縁部は上方へ突出し、口縁部内面の上端には扇形文、口縁端部には波状文をめぐらしている。体部は上から直線文7帯、波状文1帯、直線文2帯、波状文1帯の文様で構成されている。内面には櫛描文施文時についたと思われる爪の圧痕が残っている。2・3は同形態の壺で、体部からゆるやかに外反する口頸部を有するものである。口縁部は下方へ垂下する。2の口縁部上端には円形浮文を貼布している。器壁は2・3ともに薄く、文様はすべて簾状文で構成されている。4は大形細頸壺である。球形の体部に内湾する口頸部がつく。文様は頸部から体部上半に簾状文、体部の直線文間にはヘラ描斜格子文が描かれ、最下端には波状文を配す。文様間にはミガキが挿入され



第19図 S K-102 出土土器 2 (S=1/4)

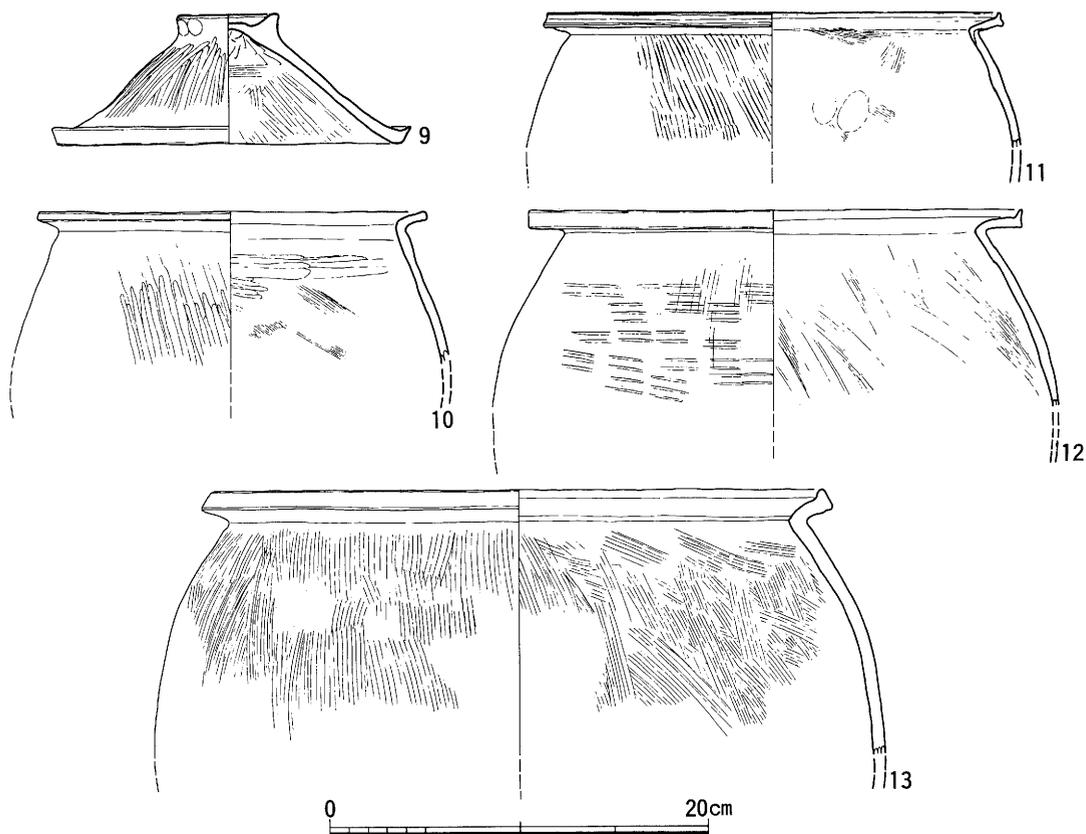
ている。5・6は短頸壺である。口縁部は受部を有するもので、口縁端部は内方へ突出する。受部の屈曲部には5では1条の、6では2条の凹線をめぐらす。

高杯・鉢 7は高杯の脚部である。柱状の脚を呈するもので、薄くつくられている。裾部にはミガキがみられる。柱状部の内面には棒状のものに巻きつけていたのか横位の擦痕が残っている。

8は台付鉢の脚台部である。ハの字状のひろく台部で、縦4列を一带とする小円孔が3帯で構成されるものである。小円孔は貫通していない。

甕蓋・甕 9は甕蓋である。つまみ部は指頭圧により突出する。裾端部は外方へ鋭く突出する。外面にはミガキが施されている。

10~13は甕である。10は口縁部の屈曲がやや弱く、端部も肥厚しない。外面にはミガキが施されている。11~13は口縁部の屈曲が明瞭で、強いヨコナデ手法によって端部は上方へ鋭く突出する。12の外面にはタタキが施されているが、ハケによって消されている。



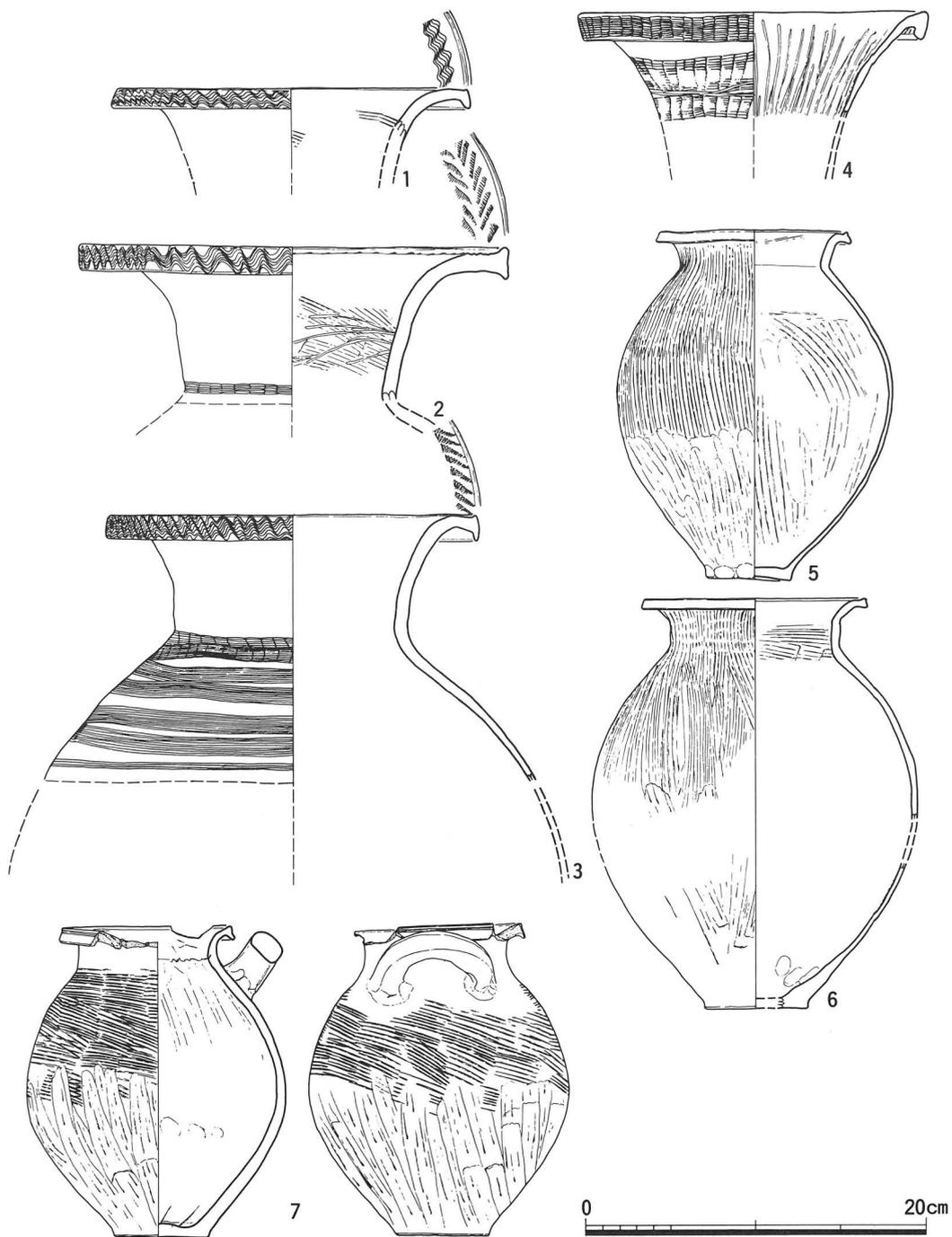
第20図 S K-102 出土土器 3 (S=1/4)

SK-105出土土器（第21～26図）

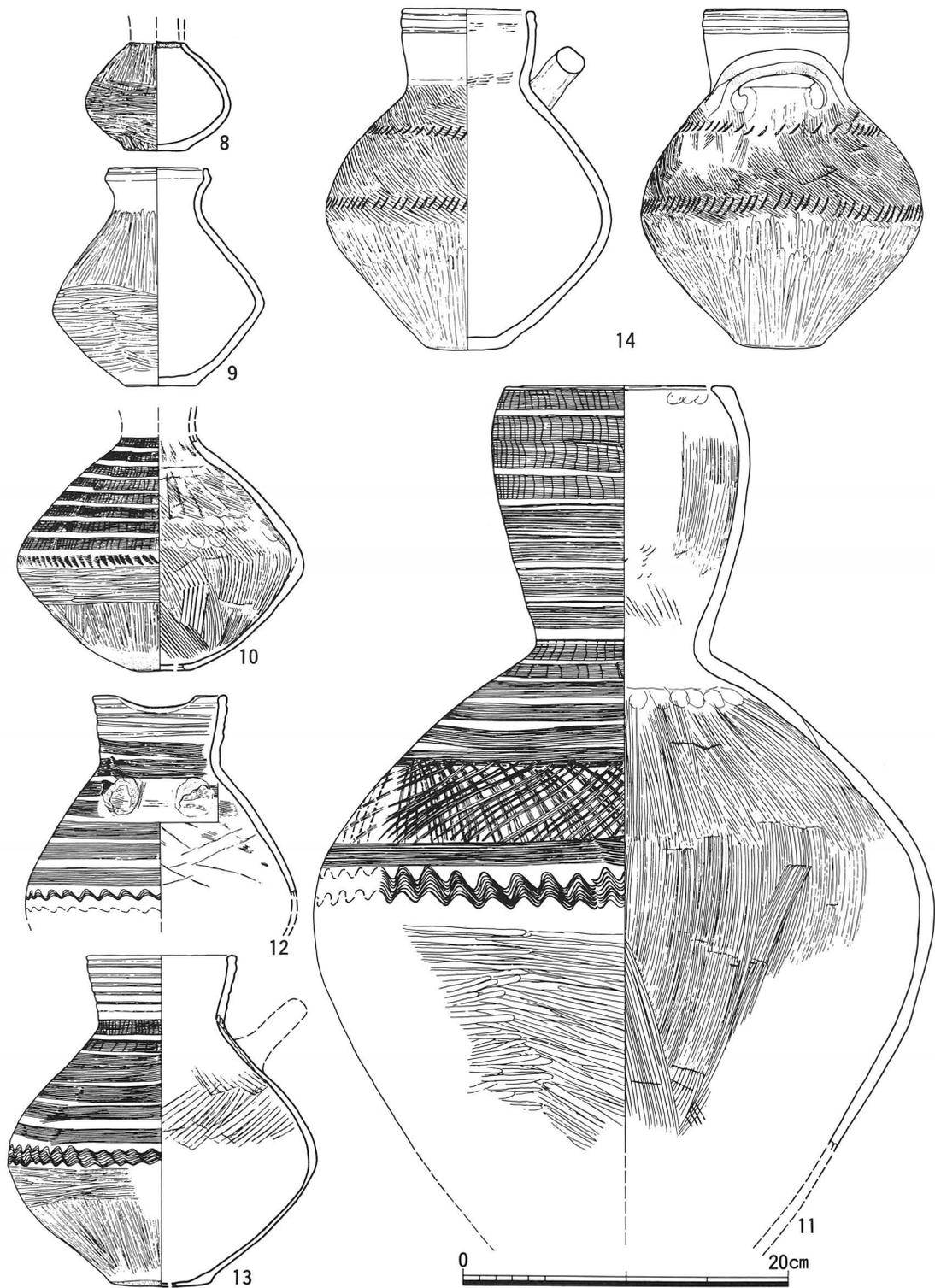
本土坑の2～4層にかけて大量の土器が出土した。土器は半完形品が多く、土器層を形成していた。4層では完形品（7・9・14）3点がまとまっていた。2・3層間で接合する土器が多く、中には2～5層まで接合する土器（6）もある。層を分けて取り上げをおこなったが、一時期の一括資料とおさえていい土器であろう。

壺・甕・鉢・高杯と各器種が揃っている。櫛描文を主体とする土器群であるが、水差形土器や鉢、高杯には凹線文がめぐらされている。ケズリは採用されているが、あまり発達していない。甕はタタキを残すものは少なく、大和型甕や大和・瀬戸内折衷型甕も存在している。小形の脚台付鉢がほとんど含まれていない。なお、器台は小形品で可能性のあるものが1点ある。以上のようなことから、第Ⅲ様式の末葉の土器群として把握できそうである。

壺 1～4は広口壺である。1～3は頸部と胴部の境が明瞭で、口縁部が大きく外反するものである。口縁部は上下に肥厚し、端部には櫛描波状文、口縁上面には波状文・扇形文が各々施されている。2・3は体部上端に簾状文、3の体部に直線文がみられる。4は頸胴部界が不明瞭になる壺と思われる。口縁部は下方へ肥厚している。外面には櫛描簾状文がめぐり、その間にはミガキが挿入されている。内面には縦位のミガキが粗く施されている。5～7は縦長の球形の体部に、短く外反する口頸部を有する壺である。5・6はほぼ同じ形態・手法を有する。口縁端部は上方へわずかに肥厚し、器壁は薄い。外面には縦位の粗いハケが施され、その後、下半よりケズリをおこっている。内面は丁寧なナデ調整である。7は把手付で、口縁部は下方へ肥厚する。口縁部はその一部が打ち欠かされている。外面には左上がりのタタキがあり、ケズリによってその一部が消されている。5・7の外面には煤の付着がみられる。8～11は細頸壺である。8は口頸部を欠くが体部は完存する。9は完形品である。8・9ともに文様はなく、ミガキによって仕上げられている。9の口縁部は浅い凹線を一条めぐらしている。10は算盤玉形の胴部を有する。胴部の屈曲部に扇形文、それより上には簾状文を施す。体部下半にはミガキが、内面は二種のハケによる調整がおこなわれている。11は大形品である。口頸部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は面をもち、内方へ肥厚する。口縁部から胴部上半に各種文様が施されている。上から櫛描直線文4帯、直線文4帯、簾状文2帯、直線文4帯、斜格子文、直線文・波状文各1帯で構成されている。胴部下半の横位のミガキ、内面には縦位のハケがみられる。12～14は水差形土器である。これらはほぼ同じ形態で、口縁部に凹線文をめぐらすものである。文様は12・13に櫛描直線文・簾状文・波状文が施されており、ともに把手を欠失している。14は完形品である。胴部上半には2帯の櫛描烈点文をめぐらしている。15は大形の短頸壺である。口縁部を欠くがほぼ完存するもので、縦長の球形の胴部に外反する頸部がつく。胴部下半はハケ後ケズリをおこない、最後にミガキで仕上げている。胴部上半と頸部はハケ後ナデ調整をおこなっている。頸胴部界には一帯の貼り付け突帯を付加し、ハケ原体による押圧をおこない、烈点風に似せる。



第21図 SK-105 出土土器1 (S=1/4)



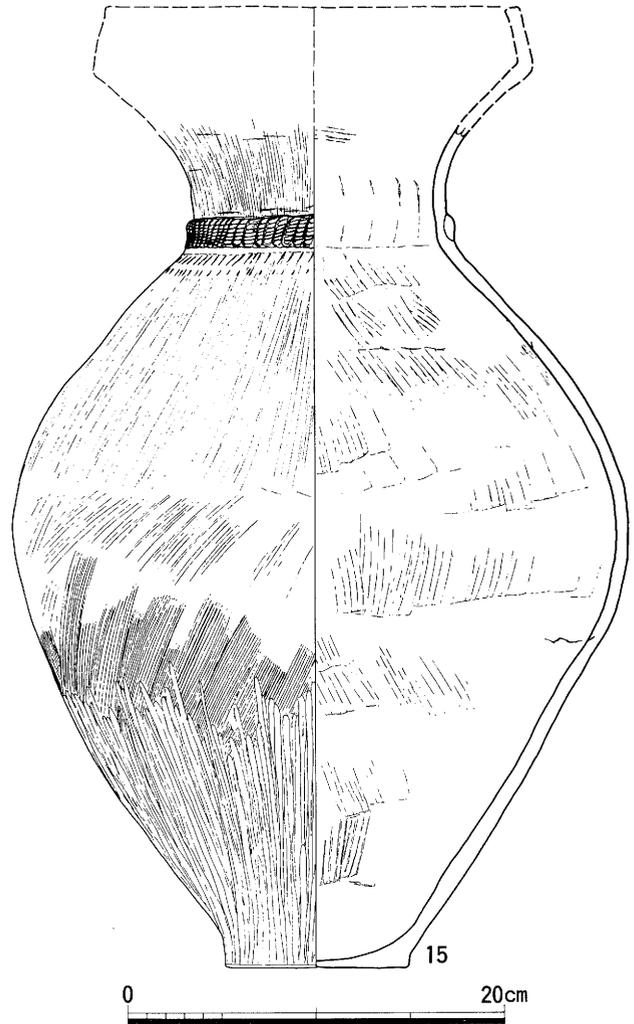
第22図 SK-105 出土土器 2 (S=1/4)

高杯 16は水平縁の高杯である。脚部の一部を欠くが、ほぼ完形である。内・外面は丁寧なミガキが施されている。杯部の外面や脚部内面にはケズリがみられる。17~21は高杯脚部である。17は裾部がゆるやかに広がる脚部で、外面は下から上方向へケズリをおこなったのちミガキをおこなう。内面も粗くケズリをおこなうが、上部にはしぼり痕を残す。18~21は柱状の脚部である。18の柱状部内面にはハケを残し 20は裾部内面を深く削った後、丁寧にナデている。19・21は小形の脚部で、端部に1条の凹線をめぐらす。19は裾部内面に、21は柱状部内面にそれぞれケズリをおこなう。

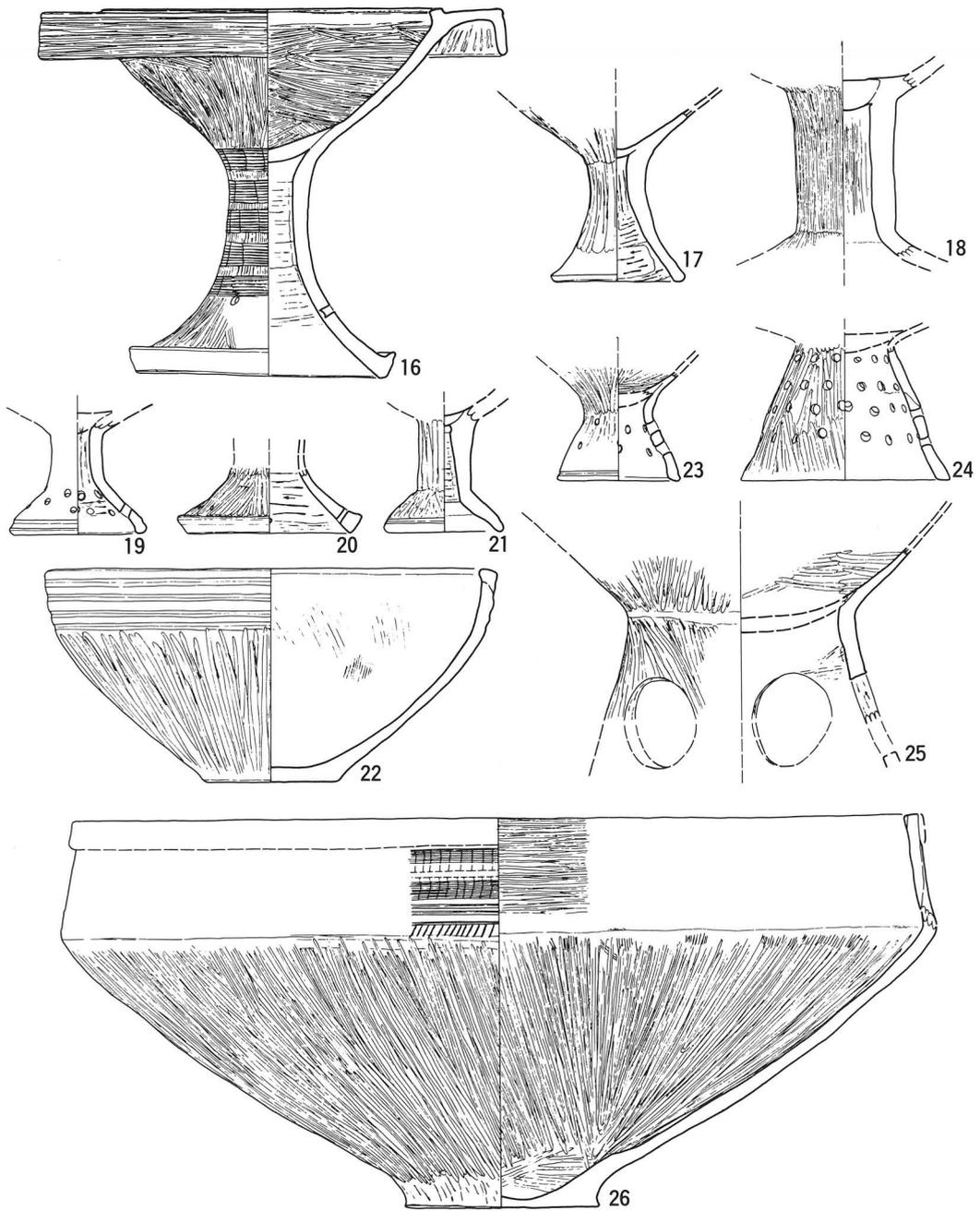
鉢 22は中形の鉢である。やや偏平な体部の鉢で、口縁部は内側に突出する。端部には4条の凹線をめぐらす。体部下半はケズリをおこなった後、太いミガキを施す。内面はハケ後に丁寧なナデ調整をおこなう。23~25は台付鉢の脚台部と思われる。23・24は脚台部に

小円孔を多数穿つ。23は脚台部端部に1条の凹線をめぐらす。外面にはケズリがわずかに残っているが、ナデ消されている。25は大形の脚台部片で、大きな円孔をケズリとっている。外面はケズリの後、ミガキをおこなっている。26は大形鉢である。やや内行する口縁部を有する。口縁端部は外側に粘土帯の貼り付けがあったが剥落している。この突帯の下側には2条の櫛描簾状文、3条の凹線文、1帯の櫛描烈点文と文様帯がつづく。内外面は細かいミガキによって仕上げられている。

甕蓋・甕 31は甕蓋である。つまみ部が突出し、指頭圧痕を明瞭に残す。甕は大きく三つに分類される。27・28はいわゆる大和型甕といわれるものである。口縁部の屈曲はゆるやかで、口縁

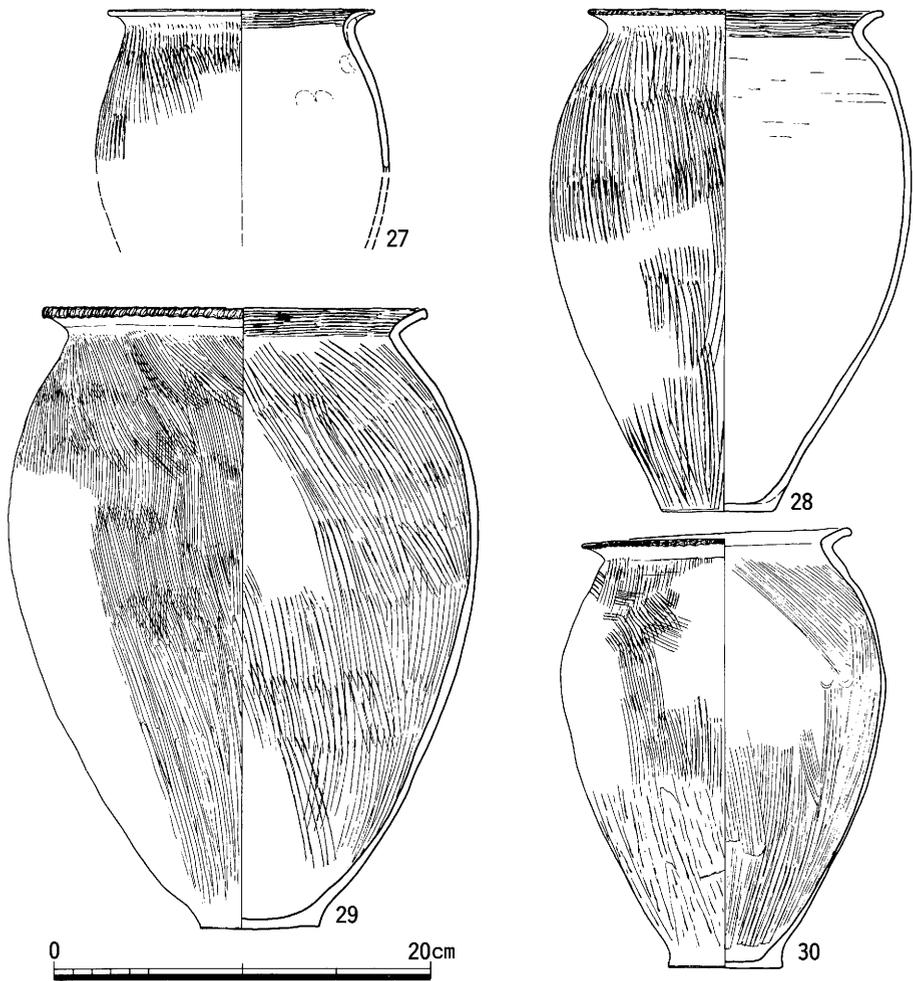


第23図 SK-105 出土土器3 (S=1/4)

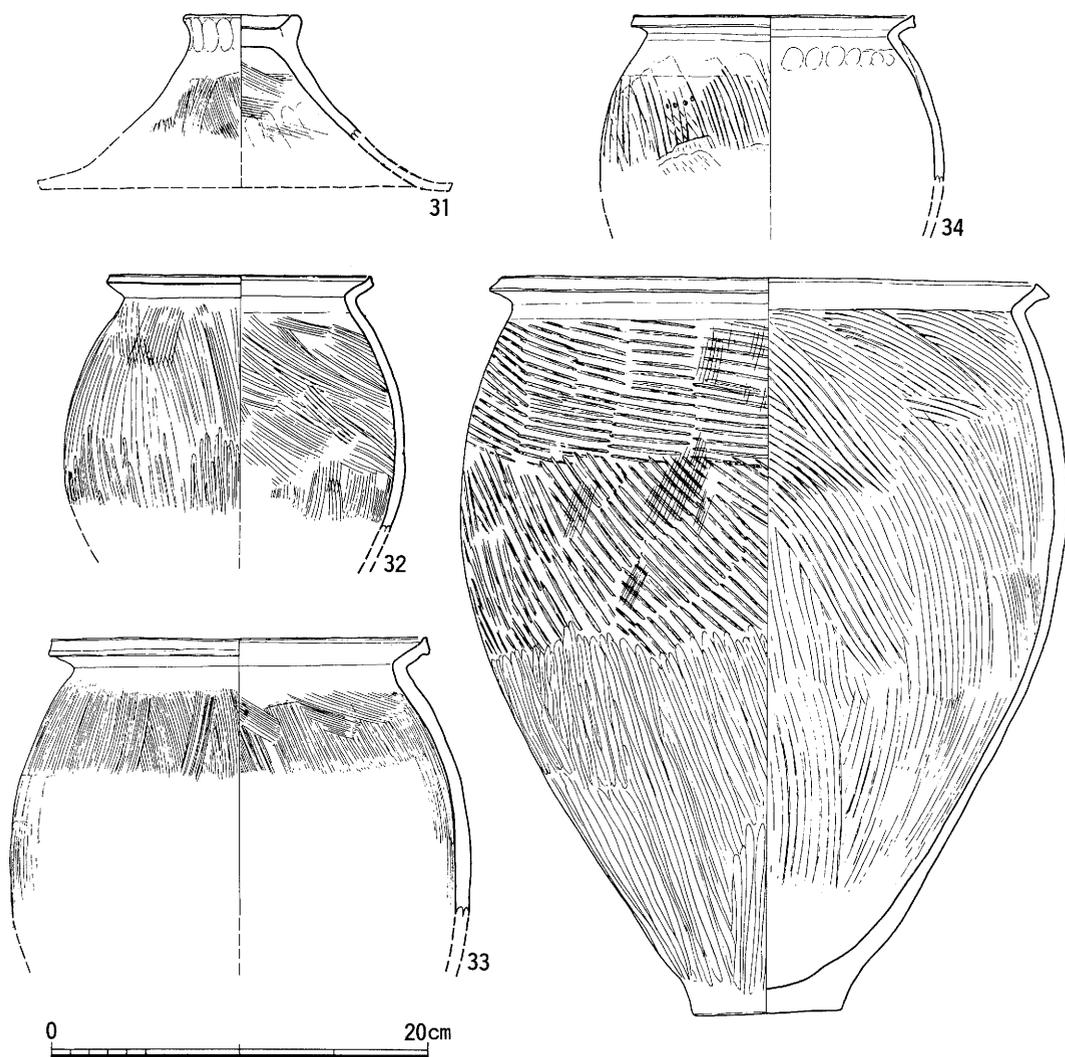


第24图 S K-105 出土土器 4 (S = 1/4)

端部は円頭状をなし、底部は突出しない。外面と口縁部内面には粗いハケを施す。内面は丁寧なナデ調整がみられるが、28の体部上半にはケズリらしきものが残っている。29・30は大和型甕に似せているが、形態や手法が異なる。口縁部は「く」の字状に屈出し、底部は突出する。内外面には粗いハケがみられるが、ハケの単位が把握できるものである。29の外面下半にはミガキ、30にはケズリが施されている。32～35の甕は形態的に29の甕にちかいが、口縁端部が強いヨコナデ手法によって上下に肥厚している。体部下半の外面の手法はバラエティに富んでいる。32・35はミガキ、33・34はケズリである。35は大形の甕で体部上半には左上がりのタタキを施している。



第25図 SK-105 出土土器 5 (S=1/4)

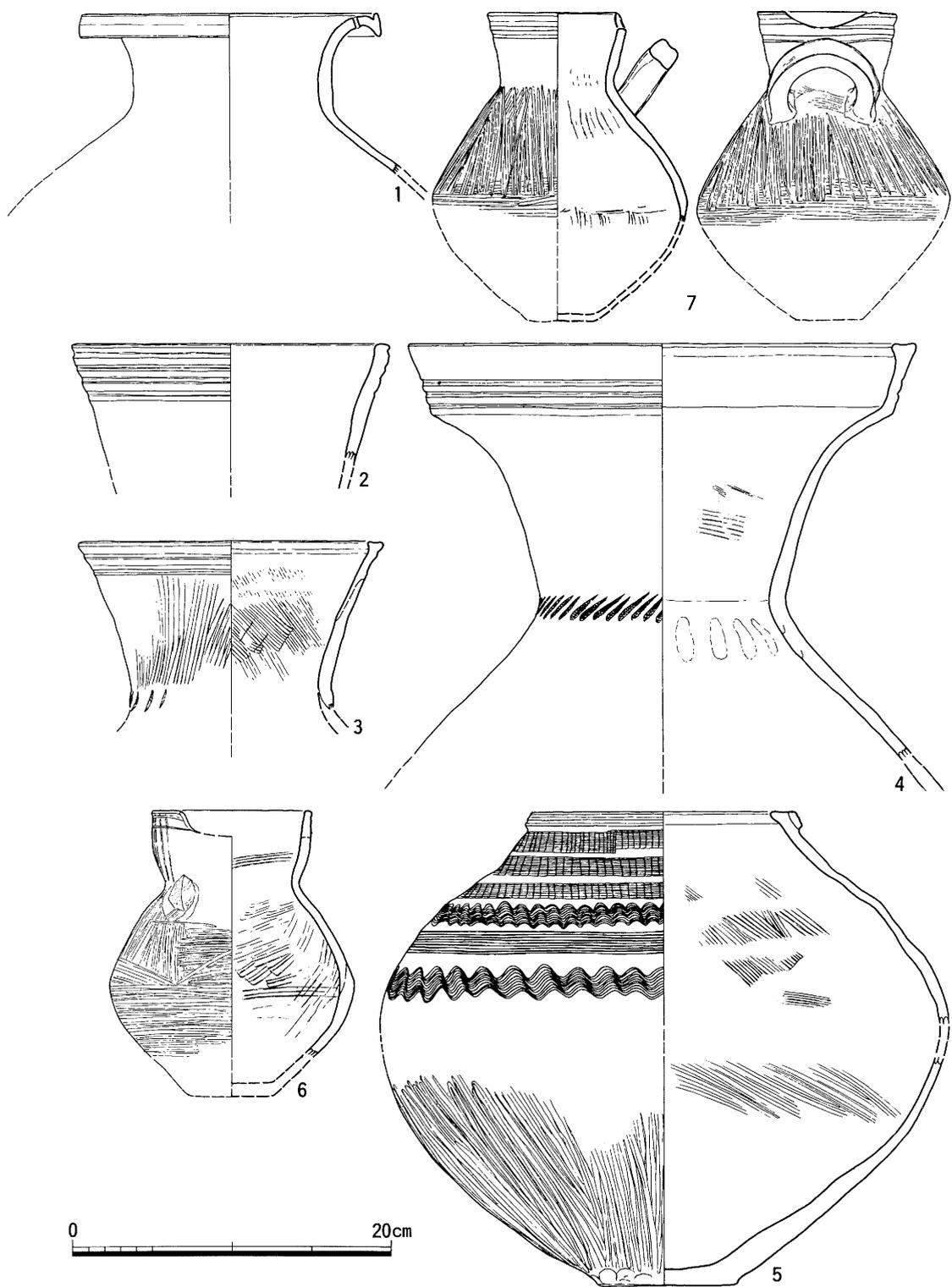


第26図 SK-105 出土土器 6 (S=1/4)

SK-101 出土土器 (第27~29図)

本土坑より出土した遺物は下層より出土したミニチュア土器4点(図版18-1~4)のほか、完形品はない。上層の土器は小破片が多い。中層から下層にかけては破片が大きくなる。土器の接合関係をみると、上層と下層の接合は2点(5・8)、中層と下層では2点(4・10)、上・中・下層の接合は1点(17)である。上層と下層が接合するのは土坑の西で両層が接しているためであろう。上層の土器は2点(11・14)、中層も2点(3・18)で、他はすべて下層出土土器である。

これらの土器群はほとんど櫛描文様をもたず、凹線文を伴うヨコナデ手法やケズリ手法の発達したものである。しかし、無頸壺のように大形品で、櫛描文様を多用するものもある。甕においては大和型甕やそれに類する甕(SK-105の第25図-29・30)が含まれていない。このような土器群は第IV様式の良好な資料となるものである。

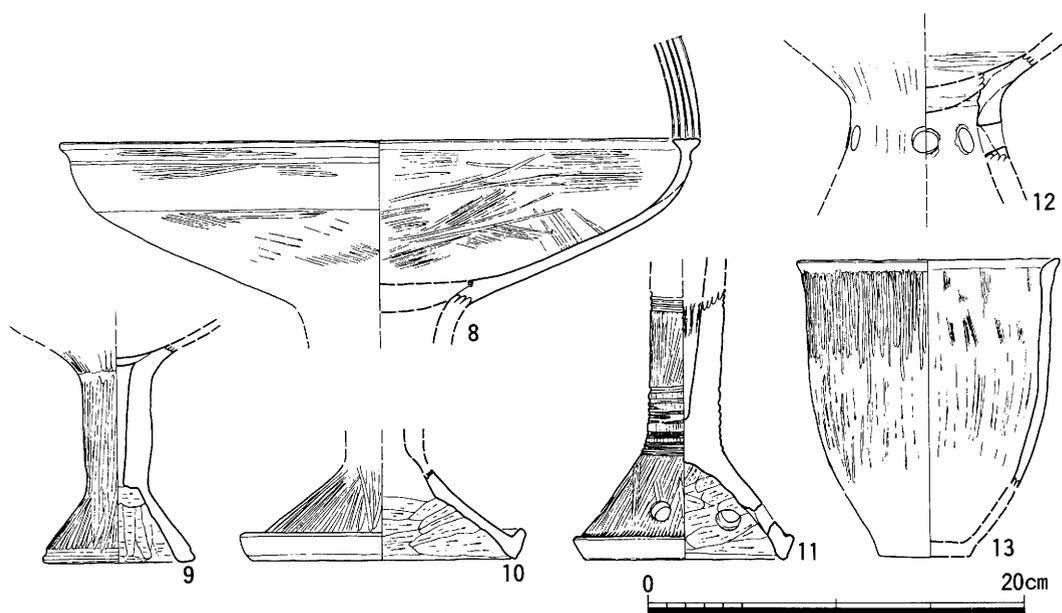


第27图 S K-101出土土器 1 (S=1/4)

壺 1は広口壺である。口縁部は上方へ鋭く突出し、上面には二孔一対の紐孔が穿たれている。全体に丁寧なナデ調整がおこなわれている。2～4は短頸壺である。2・3は口縁部が直口するもの、4は受部をもうけているものである。これらの口縁部には2条～4条の凹線文がめぐらされている。また、3・4の頸胴部界にはハケ原体による烈点文が施されている。5は大形の無頸壺である。体部中位が張るもので、口縁部には一帯の粘土帯を貼りつけ、2条の凹線をめぐらす。体部上半には3条の櫛描簾状文、波状文、直線文、波状文と構成されている。6・7は水差形土器である。6はやや器壁が厚く、口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部には浅く細い2条の凹線をめぐらす。把手は欠損している。7は体部下半を失うが、上半は完存している。口縁部には2条の太い凹線をめぐらす。

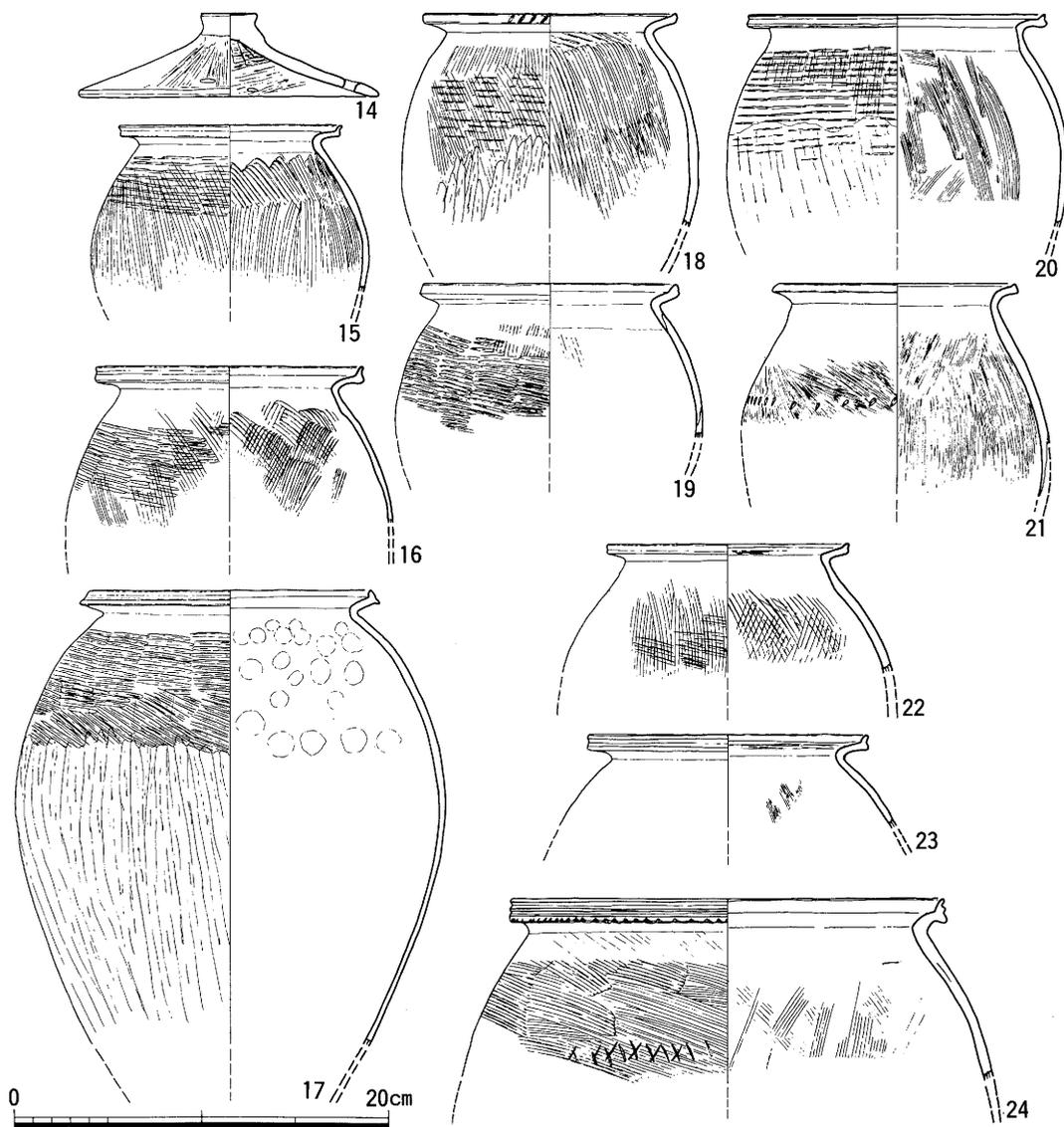
高杯 8は皿状の杯部を有する高杯である。口縁部は内・外方へ肥厚し、上端は幅1.5cmの面を有する。この上端には3条の擬凹線がめぐる。外面はケズリをおこなった後、ミガキを施す。9～11は高杯脚部である。いずれも柱状の脚部で、裾部内面は鋭くケズリをおこなっている。11は脚端部上端にヘラによる刺突文がめぐらされ、柱状部にはヘラによる沈線が2帯で構成されている。

鉢 12は台付鉢の脚台部である。全体に摩滅が激しく、残存状態がよくない。外面にはミガキが施されている。透孔は8カ所ほど穿たれたと思われる。13は縦長の体部を有する鉢で、口縁部はわずかに外方へ突出させている。外面はケズリ後にミガキ、内面はケズリ後にハケをおこなっている。

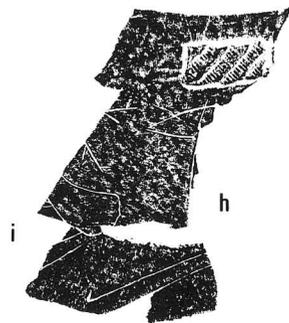
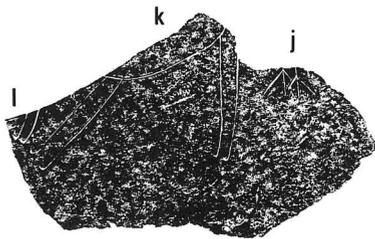
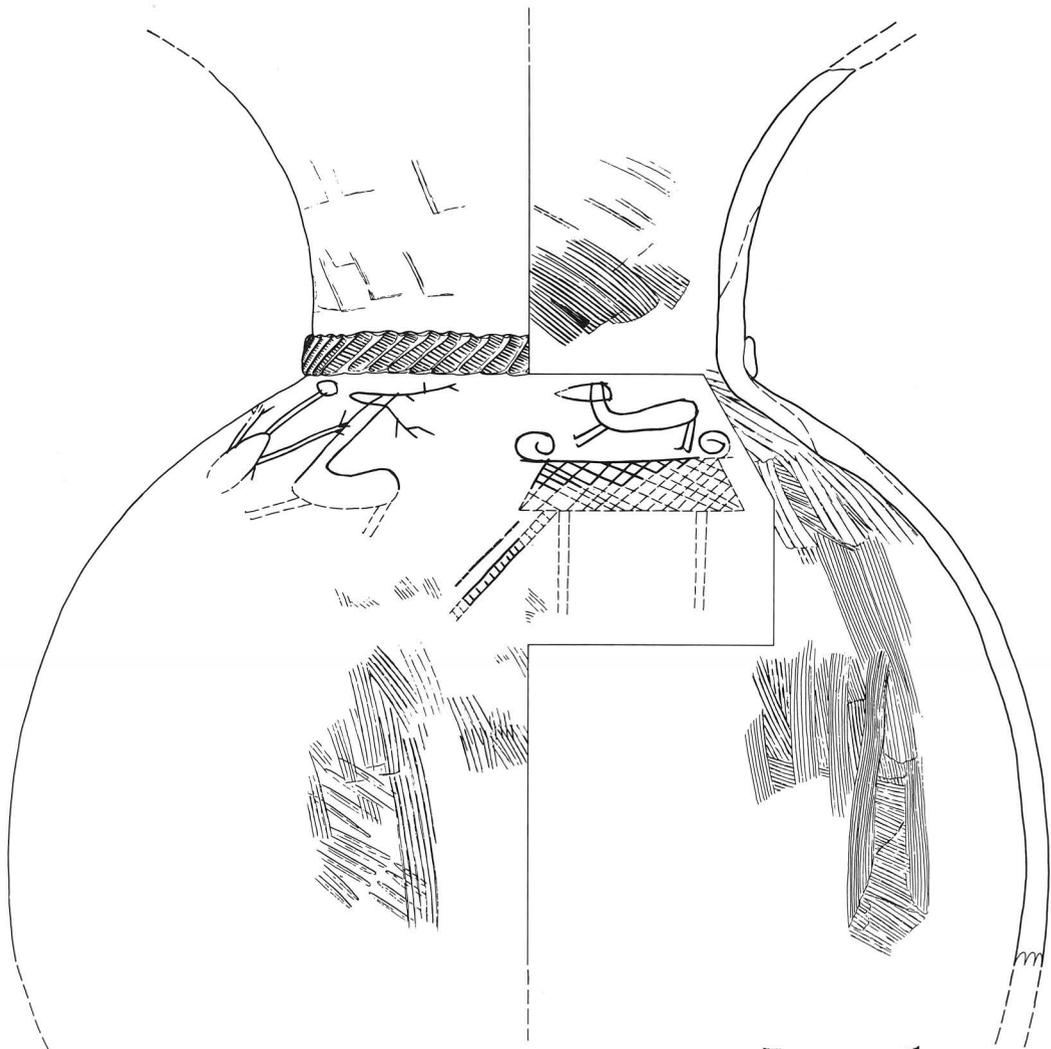


第28図 SK-101 出土土器2 (S=1/4)

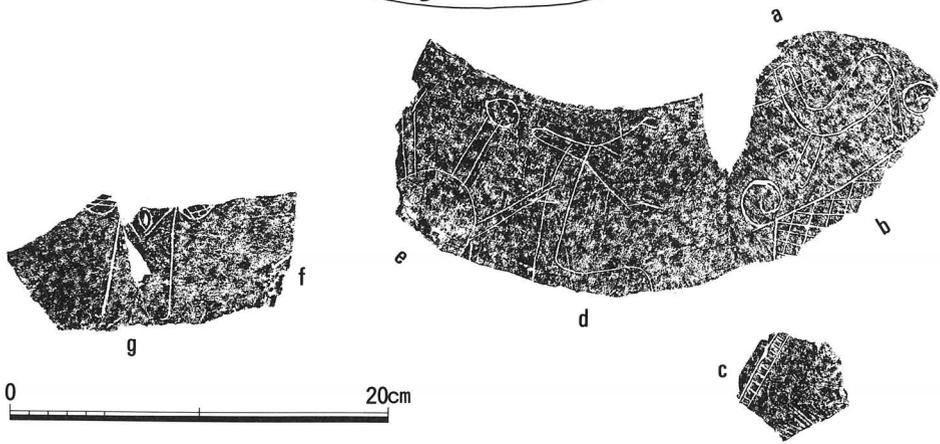
壺蓋・甕 14は壺蓋である。偏平な蓋で二孔一対の紐孔をもうけている。外面はミガキ、内面はケズリをおこなっているが、内面頂部付近は断継的なケズリ、裾部付近は粗く逆方向にケズリをおこなう。15~23は中形の甕、24は大形の甕である。いずれの甕においても口縁部には強いヨコナデが用いられ、口縁部は面をもつ。口縁部は上方へ鋭く突出するものが多い。体部は水平あるいは左上がりのタタキがおこなわれ、このタタキがハケで消されるもの(15・16・19・20)とケズリで消されるもの(17・18・20)がある。また、21・23のようにタタキのみえないものもある。21は体部にヘラによる刺突文が、24はハケ原体による烈点を交叉させたものが各々施されている。20は胎土から中河内産の土器であろう。



第29図 SK-101 出土土器3 (S=1/4)



第30図 絵画土器実測図及び拓影1 (S=1/4)



第31図 絵画土器実測図及び拓影2 (S=1/4)

絵画土器 (第30・31図)

大形短頸壺あるいは広口壺と思われる土器に描かれた絵画土器である。本土器は細片となり中世大溝など諸遺構・地区に散在していた。中世の削平時に散らばったものと思われるが総数27片を確認した。この内1片はS K-101の中層より出土している。また、第8次調査の第2トレンチより出土した破片とS K-101の破片が接合するため、15m ぐらい遺物が移動していることになる。これらの破片で、S K-101出土土器片以外が中世や包含層のものとなるため、本来、この絵画土器はS K-101に伴っていた土器であろう。

短頸壺は頸部から体部上半にかけての破片である。頸胴部界には1帯の粘土帯を貼付し、ハケ原体の押圧で烈点文としている。内面や体部中位外面には粗いハケを残す。体部上位の外面はナデ調整がおこなわれ、絵画が一周している。外面の下半にはタタキも一部残る。

絵画は人・鹿・家などで構成されている。各々の絵画土器片は接合するものが少ないため、その構成順序を正確におさえることはできない。土器の色調や調整、部位から絵画の構成の1例を考えてみる。仮に土器を上面からみて左回りに絵画をみていくことにする。絵画は大きく5つの場面で構成されている。

1. 渦巻状の屋根飾と梯子(c)のついた高床倉庫あるいは住居の屋根(b)。さらにその上位に雌鹿(a)。2. 人物(e)が両手を挙げ、左手で雄鹿(d)の首をつかまえている場面。3. 人物の足と思われる縦線2本とその上部両端に円形状のもの、さらに縦線の間にも木ノ葉状のものと斜線が描かれている(g)。この絵画の右には鹿の足状の線(f)がみられる。この3の構図は2の構図とその破片と絵画の位置関係から重ならない。4. 二頭の鹿で、右は雌雄不明(雌?)(h)、左は雄鹿(i)。5. これも二頭の鹿であるが、雌雄不明(k・l)。右の鹿の足元には鳥の足状の線(j)が二つ描かれている。

搬入土器 (第32図)

条痕文土器

第22次調査において多量の条痕文土器が出土した。しかし、本来の弥生時代の遺構に伴う土器は3点(18・25—S K-201、26—S K-1101)のみである。他は中世遺構に伴うもので二次的資料となる。しかし、中世遺構のS K-51からは17点(2~4、6~16、19、21、24)出土しており、これら土器の大半を占める。本土坑の遺物は第I様式末から第II様式にかけての土器が多く、また、独鈷石も出土している。出土状況から本土坑掘削時に破壊された弥生時代の遺構の一括遺物の可能性が高い。これらの土器群は中村友博氏のいう「内傾口縁土器」や厚口鉢注①で占められており、壺などが伴っていない点は注目されよう。

内傾口縁土器 1・2は長胴形を呈するもので、わずかに内傾するタイプである。口縁部の肥厚はないが、上面には面をもつ。接合部の内面は丁寧なナデがおこなわれているが、凹凸は残る。外面は条痕を留める。

5は前者より胴部が偏平になった形態である。これと同形態と思われるものは3～24までであるが、小片のため限定できず厚口鉢も含まれているかも知れない。5はほぼその全容のわかる土器で約半分残存している。1・2のような内傾口縁土器と厚口鉢の中間に位置するものであろう。体部の屈曲はゆるやかである。外面には条痕がみられるが、部分的にナデによって消されている。体部下半はナデ調整（無調整か）がおこなわれている。内面は明瞭な接合痕が残っている。本土器の口縁部は内側に面を有するが、この口縁端部外側（頂部）に圧痕がみられる。これは土器を逆さにして底部を調整したためについた圧痕であろう。6～9は口縁部である。いずれも粘土を貼り付けているため、口縁部は厚くなり、面をもつように成形している。7・8では条痕文をナデで消している。9はやや細い条痕で水平に施されている点から、他の土器とはやや異なる。これに類似するものとして14・15の胴部片（同一個体）がある。これには整った水平の条痕がみられ、さらに縦位の条痕も施している。これら9・14の土器は胎土・焼成も他の土器とは異なり、胎土は緻密で焼成は悪い。10～24は胴部の破片である。11～13は同一個体である。この土器の条痕文は禾本科による条痕と思われ、条痕の単位は明確でなく、フレキシブルである。14は胴部の屈曲部であるが、屈曲部の下側は接合のため、突出している。以上が内傾口縁土器であるが、全体的な傾向として、胎土は0.5mm前後の砂粒を多く混入し、粗雑な調整のため砂粒は器面に多く浮きでている。焼成は堅緻で、灰白色あるいは灰黄色を呈する。ただ、土器断面の中央は黒色を呈するものが多い。

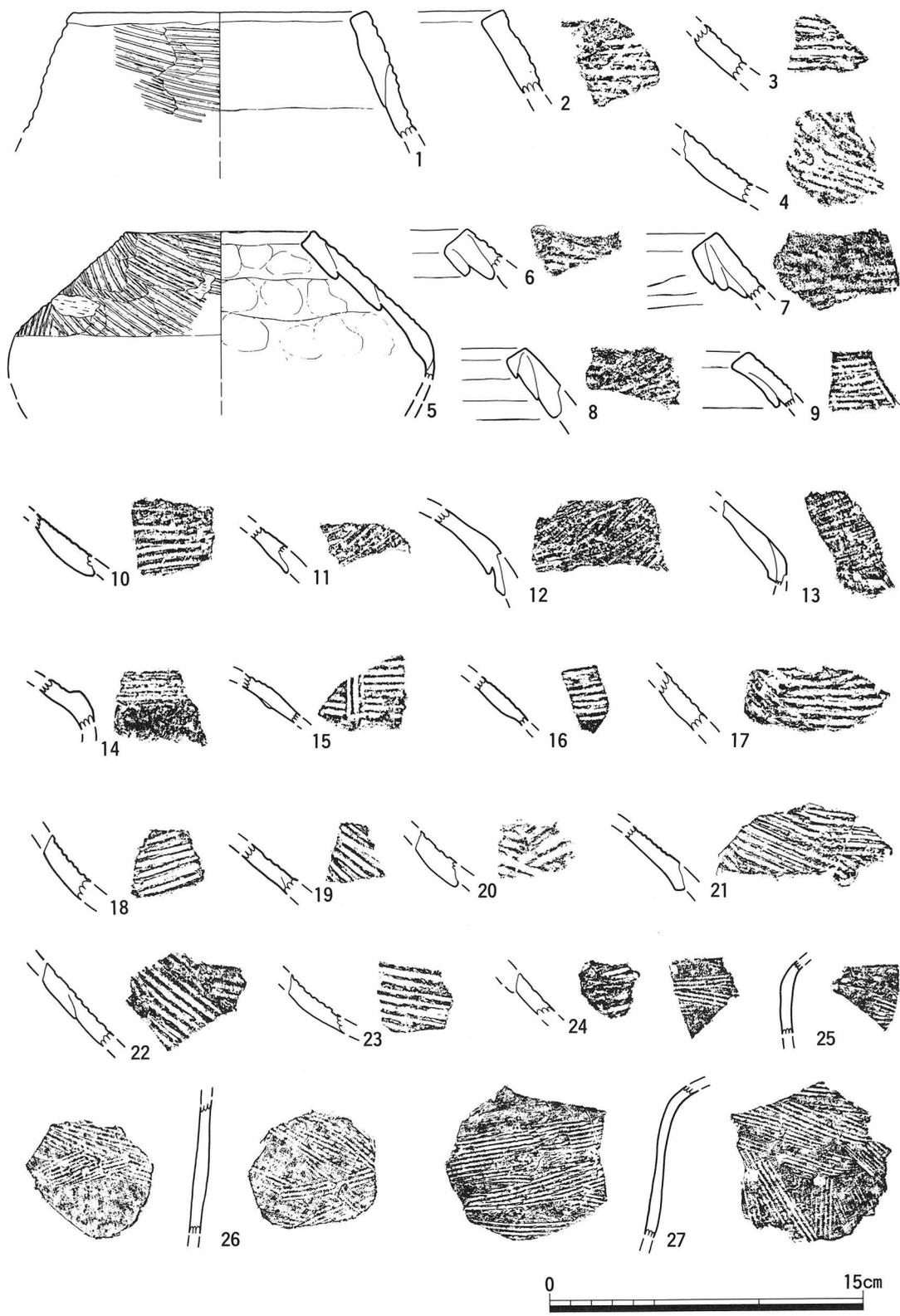
甕 25～27は甕の体部破片である。25・27は同一個体と思われる。26・27ともに同一形態・手法のものである。外面には貝殻と思われる条痕がみられるが、その条痕の下には細かいハケ目あるいはナデがうかがえる。内面も同様の条痕がみられる。色調は赤褐色を呈する。

その他の搬入土器として図版18-7にみられるような貝殻腹縁による木ノ葉を押捺した土器がある。また、2条の櫛描文の内部に縄文を充填したもの（図版18-6）がある。

（注）① 山口大学 中村友博先生より本形式の土器について多大な御教示を得た。記して感謝します。

中世土器（第33～36図）

今回の調査では多数の中世遺構を検出した。なかでも中世大溝はその規模や出土遺物量から今までの調査に比べ多い。しかし、これら中世遺構は弥生ベース層を削平している為、弥生土器も多数含んでいるが、比較的良好な資料を図化した。1～25は中世大溝南北溝の下層、26～41は同溝の最下層出土、42～49は第2トレンチ中世大溝東西溝下層・最下層出土である。50～57はS D-54の第3層及び最下層出土遺物、58～60はS K-52第1層出土土器、61は中世大溝南北溝出土である。中世大溝の遺物は南北溝と第2トレンチ東西溝で接合するものが3点ある（16、17、49）。また、中世大溝の下層と最下層で接合するものもあり、これら大溝出土遺物にはさほど時間的な隔たりはないようである。



第32図 搬入土器拓影及び実測図 (S=1/3)

土師皿 土師皿の形態として底部が浮き上がる「ヘソ皿」と呼ばれる形態と平底の二種がある。このヘソ皿には径8cm前後のもの（1・2・26～29など）と径11cm前後のもの（4・31・61）がある。平底のものには3・30・32・60があるが詳細な点では異なる点が多い。61は底部に小円孔を穿っている。

羽釜 羽釜には土師質と瓦質の二種がある。土師質の羽釜は形態的にバラエティに富んでいる。5～7・46は短く外反する口縁部を有するものである。5・6は口縁端部を折り返す。7・46は面をもつものである。46は体部中央に小さな鏝がつく。8～15・33・54～56は口縁部が内傾する羽釜である。大きさは小形が大形であるが16のように大形品も1点ある。口縁端部は折り返すもの（8・16・56）と円頭状に内行するもの（9・10など）の二種類があるが、後者の口縁部は細部において多様である。また、鏝も様々で同一形態をなすものはない。

瓦質の羽釜は17・48の小形品、18・47の大形品がある。これらは形態的に類似しており、内傾する口縁部に半球形の体部がつく。口縁部には数条の凹線をめぐらし、鏝は大きく突出している。外面にはケズリ痕を残す。

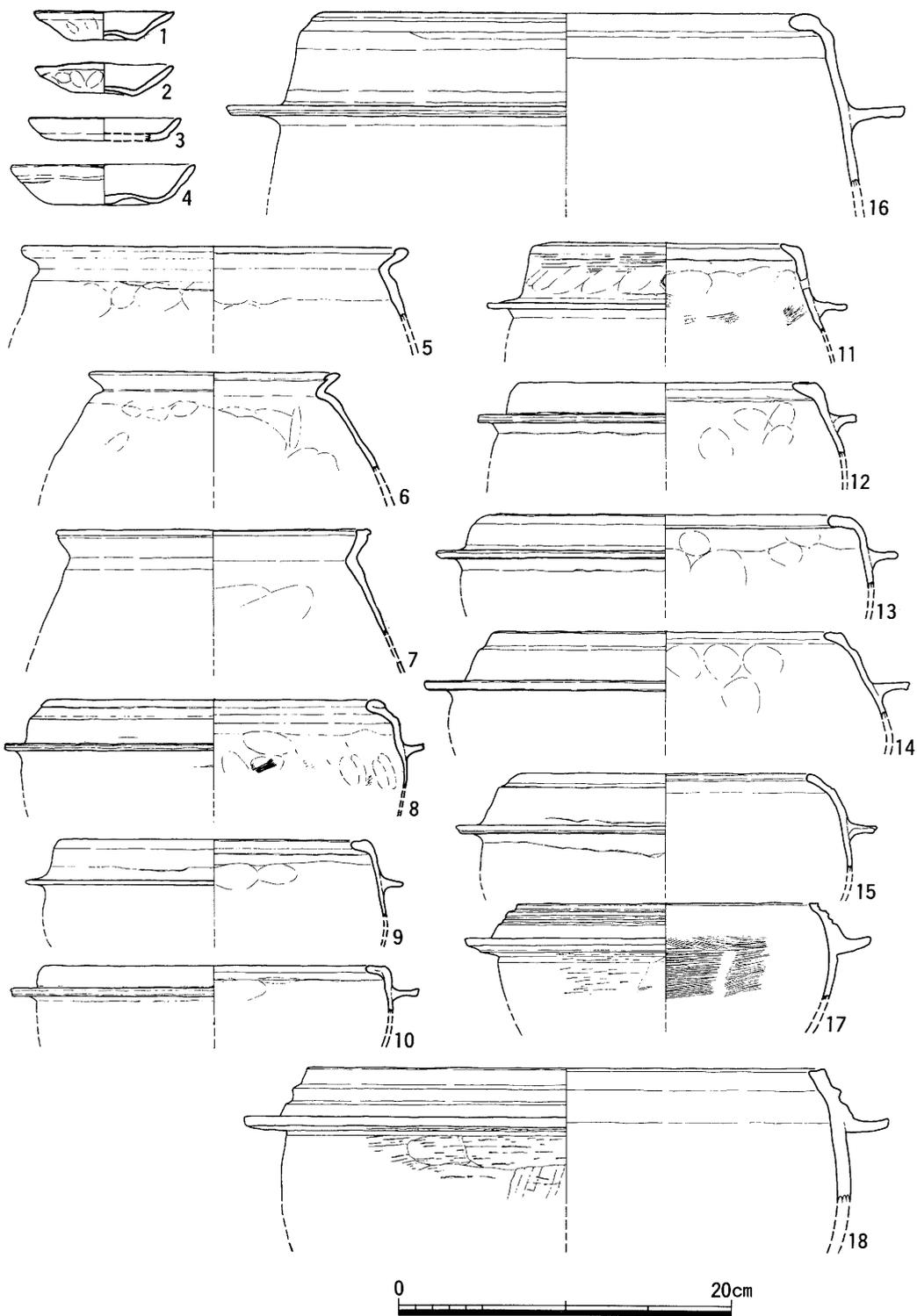
擂鉢 19～21、34～36、57は擂鉢である。口径30cm前後のものですべて瓦質土器である。19は摺り目がなく練鉢かも知れない。21・57には片口がつく。外面は粗いハケがみられるが、全体に指頭圧痕が多く残る。内面は使用のため、器面は荒れている。

火舎・土管 22は方形の浅い火舎である。四方に脚がつくが剥落している。23・38は円形の深い火舎、39は円形の浅い火舎である。23は口縁部下の突帯間に方画文が、38には円形の花文が押捺されている。

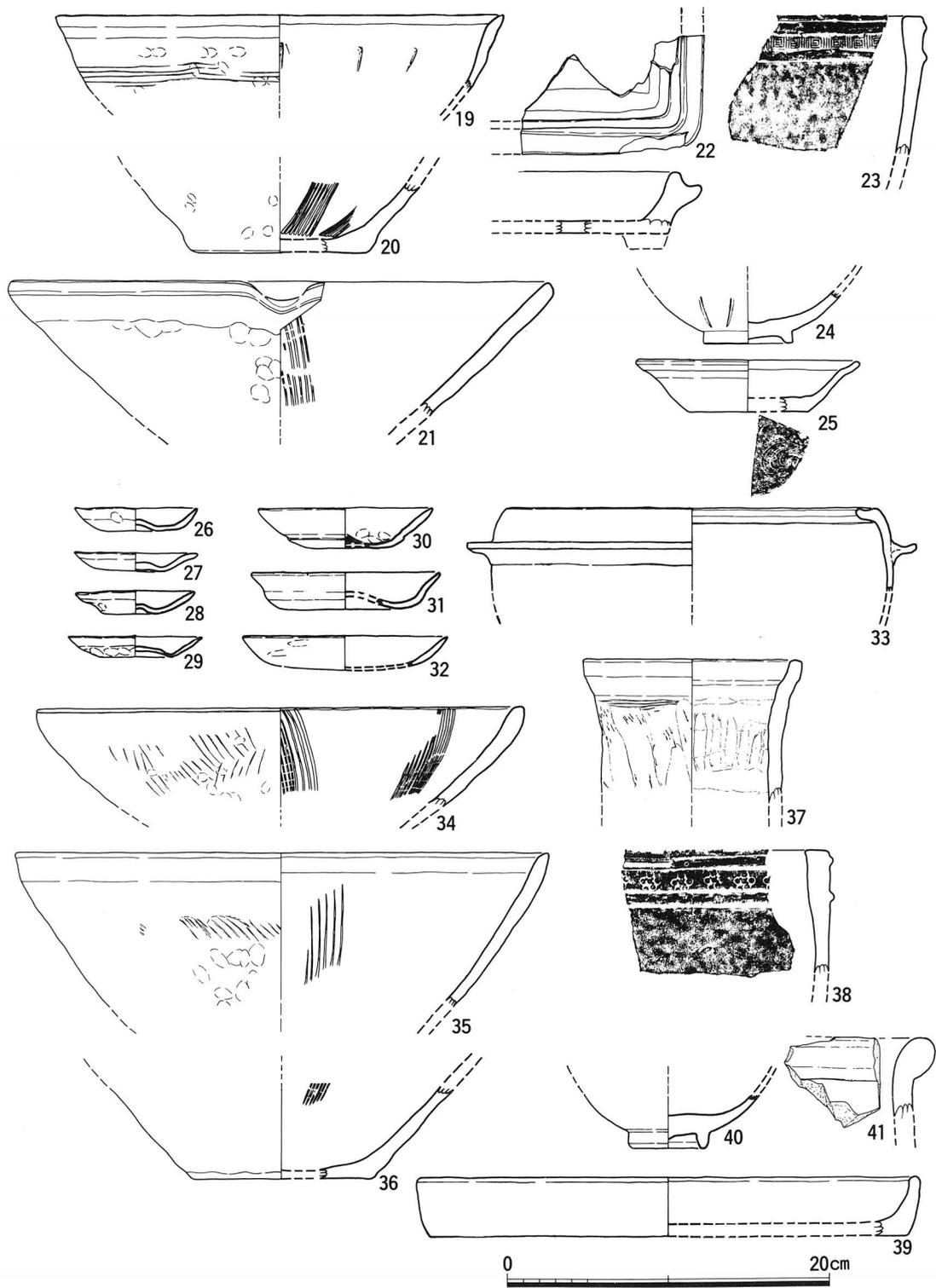
37は瓦質土管である。端部は内湾ぎみに広がる。外面には一部ハケがみられるが、縦方向の弱いケズリをおこなう。内面にはしぼり痕が残っている。

瓦器椀 52は半球形の小形椀である。底部は丸底となっている。口縁部内側には一条の段がつく。外面には指頭圧痕を残し、内面はナデ後に輪状の暗文を施す。53は硬質の瓦質椀である。半球形の形態で外面は丁寧にナデ調整がおこなわれている。内面は摩滅しており、光沢がみられる。乳鉢的な使用が考えられよう。

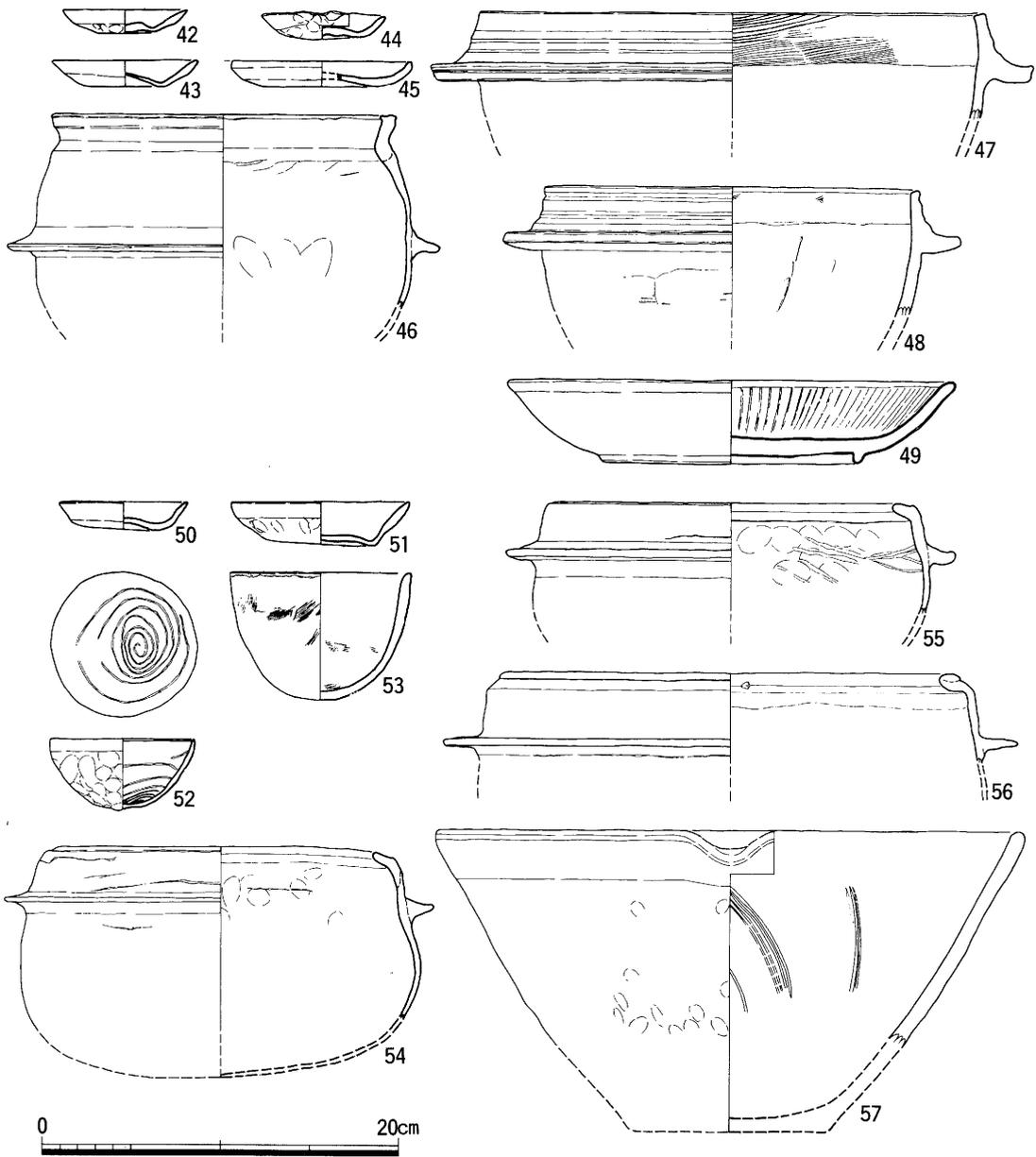
陶磁器 24・40は青磁茶碗である。ともに高台は削り出している。24には花卉状の縦線がみられる。25は瀬戸焼小皿と思われるものである。釉は内面全体と口縁部外面に及んでいる。底部には糸切の痕跡がみられる。41は備前焼の大壺口縁と思われる。49は竜泉窯系青磁の盤である。内・外面には暗黄緑色の釉が全面にかかっているが、高台の内側には輪状に釉のない部分があり、盤を浮かせていたのであろう。器面は嵌入が大きい。内面には型押の菊花文がめぐらされている。



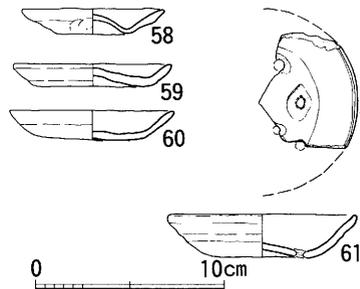
第33图 中世大溝出土土器 1 (S=1/4)



第34图 中世大溝出土土器 2 (S=1/4)



第35図 中世大溝及びS D-54 出土土器 (S=1/4)



第36図 S K-52及び中世大溝出土土器 (S=1/4)

(2). 石器

打製石器

打製石器の大半はサヌカイト製で、石核から製品までの過程を示す未成品や各種製品が出土している。しかし、中世遺構などから出土した石器もその半分を占めている。

図版21-1～7はSK-101から出土した**石鏃**である。各形態のものがあるが、1のように大形品は注目される。8～10は**石錐**である。8はSK-103、9はSK-101、10はSK-206出土である。すべて先端は折損している。11～13は**スクレイパー**である。11の刃部はつぶれている。SK-101出土である13の刃部は小剝離痕がみられる。弥生中期遺構面出土である。14～17はSK-201出土の石核及び剝片である。

図版22-1～16は**石剣・石槍**である。これらはその形態・大きさから二分される。1～6は大形で幅広の身を有するものである。2には両面に研磨がみられる。6の刃部は鋸歯状を呈している。7～16は小形の細身のもので、12・13には研磨がみられる。4はSK-103、10・11はSK-1101、14はSK-105出土で、他のものは中世遺構等より出土したものである。大形の石剣は弥生前期の可能性が高い。

磨製石器

石庖丁 石庖丁はその石材によって大きく二つに分類される。図版23-1～11は流紋岩、図版24-1～7は玄武岩質凝灰岩質片岩と思われる石庖丁と同未成品である。

図版23-1～9は流紋岩製石庖丁の未成品である。1～8は整形段階であるが、6～8は器厚が薄くなり、琢磨前の資料であろう。9は片面に琢磨痕が残る。10・11は外湾刃であるが、10の刃部には使用痕がみられる。流紋岩製品はすべて中世遺構等で二次的資料である。

図版24-1～5は石庖丁未成品で、整形段階の破片である。4・5はほとんど形態が整っている。5では片面に琢磨痕がみられる。1はSK-201上層、7はSK-105の第2層下部より出土した。他は中世遺構等出土で二次的資料である。

石斧 図版25-1～12は太型蛤刃石斧である。完存品は4のみで、他はすべて破損品である。弥生時代の遺構に伴うものは3点で、1：SK-206、5：SK-1101最下層、8：SK-201上層出土である。他の遺物は中世遺構等より出土しており、二次的資料である。太型蛤刃石斧はその長さや厚さによって二つに分かれる。1～3は全長15cmを越えるもの、4～12は全長10cm前後になるものである。

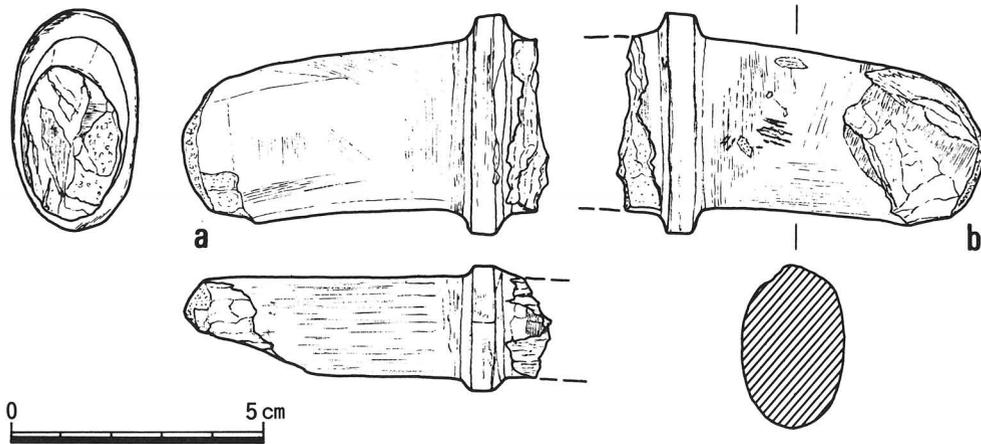
図版26-1・2は柱状片刃石斧である。1は全長8.2cm、2は全長2.95cmを測る。2は刃部幅0.6cmで極めて小さい。1は中世大溝、2はSK-105第3層出土である。

紡錘車他石製品 図版26-3、4は石製紡錘車である。4は石庖丁の破損品の転用で、SK-201出土。5は石錘である。自然石の転石を利用したもので、一端は欠損している。中央部は敲打による凹みをつくっている。SK-102出土。6は敲石であるが、石斧の転用かも知れない。両面、

両側面、先端部には敲打による凹みがみられる。7も円柱状を呈するもので敲石の可能性はある。6・7ともに中世大溝出土。8・9は砥石である。8は全面に研磨痕がみられる。9は片面の中央部にU字形の凹みをもつ。8はS K-105第3層、9はS K-1201第2層出土である。

独鈷石 第37図は独鈷石と思われる。中央部付近で折損しているため、その全容はわからないが、左右対称となり、やや湾曲し、節帯を有する形態となろう。節帯は上面幅が0.5cmで低い突帯となっているが、稜線が明瞭で丁寧に磨き出している。端部は敲打によるものか、面がつぶれその上にわずかに研磨がみられる。端部ちかくのb面には剝離痕がみられ、二次的な研磨がおこなわれている。節帯部には赤色塗彩が厚くなされているが、他の部分にも残っていることから、本来、全面に施されていたのであろう。石材は玄武岩質片岩である。中世遺構であるS K-51より出土した。^{(注)①}

(注) ① 刑部小学校教諭・榎原考古学研究所研究員奥田尚氏に鑑定して頂いた。



第37図 S K-51 出土石器実測図 (S = 3/8)

(3). 木製品

今回の調査では木製品は少ない。木製品にとって保存環境の良い土坑や溝がなかったためであろう。弥生前期の木製品としては、SD-1201より出土した**高杯杯部**(図版28-4)がある。水平縁の高杯で内外面には黒漆が残る。S K-205では**広楸の未成品**(図版28-1)がある。着柄隆起部を高く削り出した段階のものである。刃部や柄部側端部は切断痕が残っている。両側辺はやや内湾ぎみにつくっている。着柄隆起は中央よりにつくられている。他に前期の木製品としてはS K-201より出土した**板材**(図版28-2)などがある。

弥生時代中期の木製品としてはS K-103より比較的まとまって出土している。注目されるものとして**四脚容器**(図版30-1)がある。円形容器に短く突出した脚部が四本付く。口縁部は内側が小さく突出し、また、両側には耳部がつき、有蓋であることを想定できる。図版29-2・3は

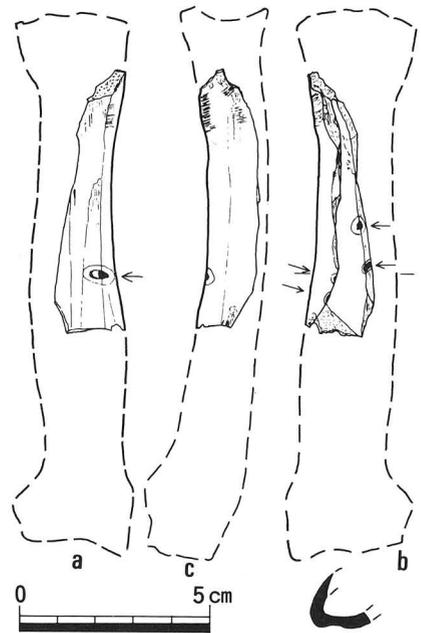
豎杵状の木製品であるが、用途はわからない。器面に加工痕が多く残り、製作途中かも知れない。3の先端部ちかくには楕円形の凹みが付けられている。2・3ともにS K-103出土。広鋏の製品はS K-1101から2点出土している(図版27-1・2)。S K-1101からは手斧の柄(図版27-3)や原材なども出土している。S K-101からは杓子(図版29-1)が出土している。

弥生後期の木製品はない。中世の木製品としては漆椀や曲物の底板、建具の部材(図版29-4~6)などが中世大溝より出土している。

(4). 祭祀遺物

祭祀遺物としてはト骨とイノシシの下顎を穿孔したものの二つがある。第38図のト骨はS K-209第1層より出土したもので弥生前期の資料である。イノシシ左側髁骨片と思われる小断片を使用したもので骨の残存状況は極めて良好である。焼灼は外面に3カ所、骨の内側からの焼灼が2カ所にみられる。いずれの焼灼も中心部は黒色を呈し、その色調の変化の範囲は小さい。関節ちかくの外面には鋭い切り込み痕がみられるが、解体時に伴うものかどうかは判断できない。

図版31-3はイノシシの下顎に円孔を穿ったものである。M₃が崩出し、咬耗が進んだもので、雄であろう。右側関節部は欠失しているが、円孔の一部は残っている為、両側に穿たれていたであろう。円孔は径2.5cm前後のものである。S D-1201より出土した。



第38図 S K-209 出土ト骨実測図
(S = 1/2)

(5). 獣骨・自然遺物

獣骨等は木製品同様少ない。また、大形動物の獣骨もめだたず、小片の骨が多い。未鑑定の為不明なものが多いが、その種類はイノシシ(図版31-2)やシカ(同-1)、スッポン、ウサギ、ネズミ、カエルなどがある。

S K-105の井戸では第3層以下すべての土をサンプリングし、1mmの篩にかけた。井戸内の堆積遺物を検討する上で良好な資料となろう。土器片、サヌカイト剥片を除く遺物の一部を図版32下段に示した。獣骨はすべて断片で、小形獣の骨では割れていないものもある。カエルなどではかなり部位がそろろう。また、魚骨も含まれている。魚骨の中には白く変色したものがあり、焼けた

ものであろう。さらに、魚鱗も確認している。さらに注目されるものとして結び目のもつ紐の断片も含まれてる。

4. まとめ

第22次調査地は遺跡の西部にあたる。この地区では既に第8・11・14・20次と多くの調査を重ね、各遺構の関係、変遷をうかがえるようになってきた。これまでの調査を含め、この地区の変遷をまとめてみたい。

(1). 遺構

1. 第22次調査における弥生前期の主要遺構は第Ⅰ様式の後半から末である。特に第Ⅰ様式末から第Ⅱ様式にかけての土坑が多い。この時期の遺構は本地より東方に広がるようである。これに対し、第Ⅰ様式前半の遺構は本地より西方の第11・14次調査地に広がるようである。前期の遺構は主に木器貯蔵用土坑であるが、第22次調査第1トレンチ南半では小土坑もありやや性格の異なる地区があるようである。また、第2トレンチで検出した大溝SD-1201は第20次調査のSD-201と並行し、区画溝としての性格が考えられよう。また、今回の調査では初めて弥生前期の高床建物を確認しえたことも大きな成果であろう。

2. 弥生時代中期の遺構の主要なものは井戸である。第2トレンチで検出したSK-1101の井戸は第Ⅱ様式のもので、本格的な井戸としては本遺跡では古い部類である。第20次・22次では第Ⅱ～Ⅳ様式の井戸を、第8次・14次調査では第Ⅴ様式の井戸を検出したことにより、各時期ごとに居住区が移動していることがうかがえる。特にSK-1101、SK-103、SK-105、SK-102、SK-101は同一旧河道上付近に立地しており、一つのグループの井戸の変遷としてとらえることができるかもしれない。

中期の井戸は第Ⅱ～Ⅲ様式と第Ⅲ～Ⅳ様式ではその形態が大きく異なる。前者の井戸はSK-1101にみるように二段掘りとなり、井戸の中位にテラスをもつ。これに対し、後者の井戸はSK-105のように円筒状を呈するものである。井戸掘削技術の進歩がみうけられる。

3. 今回の調査で最も成果があった一つとして中世遺構である。検出した中世大溝は館を取り囲む大環濠と内部を方形に区画する区画溝の二種であった。区画溝は第11次調査でその一辺を確認しており、今回の成果を合わせてその規模は一辺30m前後になることが判明した。この方形区画溝掘削後に、大環濠が前者の溝を意識しながら、東部に張り出すように掘削されたのであろう。また、その東辺の一面には橋があり、一つの出入口となっていたと思われる。内部の構造は井戸と小溝を確認しただけで、建物はわかっていない。しかし、別の区画では二棟の建物を第14次調査で検出している。一つの区画をおさえることができたことは中世館の構造を把握する上で重要な成果となった。

(2). 遺物

1. 土器の編年の基準となる良好な資料を得た。S'K-201はいわゆる第Ⅰ様式のヘラ描沈線文と第Ⅱ様式の櫛描文様が共存する土器群で構成されている。これらにはヘラ描と櫛描文の両者を同一個体に施文する土器が存在することや器種の構成とその割合から一つの型式として存立すると思われる。第Ⅰ様式末の様相が広口壺の長頸化に伴って無文様化あるいは幅広のヘラ描直線文の施文、甕の口縁の退化と無文様化などあげられるが、次の段階では櫛描文の出現、大和型甕の出現など一つの画期がみられる。しかし、ヘラ描文様や大形鉢の残存など古い要素も残しているのがこの時期の特徴であろう。

S K-102、S K-105の土器群も一括性の高いものである。特にS K-105は出土状況、量ともに極めて良好なものである。S K-102はS K-105とさほど時期差はないが、S K-102の方がわずかに古いようである。S K-105は第Ⅲ様式末の資料としてとらえている。全体的に第Ⅲ様式的な土器の様相を色濃く留めながら、器種では器台や大形鉢が出現し、小形台付鉢が減少する傾向がみられる。また、凹線文は水差や鉢に導入されており、これらが施文される初期の器形であろう。この段階においても大和型と大和・瀬戸内折衷型甕が存在していることは注目されよう。

S K-101は第Ⅳ様式の典型的な土器群として認識されよう。ケズリ手法やヨコナデ手法の発達が見られ、短頸壺が壺の中では主体となっている。広口壺では無文様化が進んでいる。

2. 土器では搬入土器も注目されよう。今回の調査では条痕文土器が多量に出土した。それも「内傾口縁土器」という器形が大半を占めており、この土器を中心に搬入されることにどのような意味があったのか、現時点では結論を導びけない。今回の資料が中世遺構などに伴うものが多かったため、時期は限定できないが第Ⅰ様末から第Ⅱ様式にかけてであろう。また、唐古・鍵遺跡の他の調査においても同様な傾向を示していることは、本調査地区のみでなく、唐古・鍵ムラ全体にいえることであり、大和地方あるいは近畿地方を含めた広い視野でこの条痕文土器の搬入問題を考える必要があるだろう。

3. 土器としてもう一つ注目すべきものとして絵画土器がある。この土器は細片となって調査区全体に散在して出土したため、その出土状況や残存状況は極めて悪い。しかし、その大形土器に描かれた大きな絵画群は類例のないものであろう。それは大胆なタッチで人物・鹿・家などを生き生きと描いている。絵画の全構成を把握できないのは残念であるが、鹿は二頭で一組となり、大小の表現でバランスをとっているのは注目されよう。また、家には屋根飾りがつき、寄せ棟の表現をとっているのは類例を知らない。高床の住居とも考えられよう。

4. 石製品として独鈷石が出土したことは本遺跡では初めてである。また、時期は限定できないが、弥生時代の所産となると全国的にも類例の少ない資料となる。現時点では石棒なども出土していることから縄文的要素の残存としてとらえておきたい。

5. 今回の調査においてもト骨を1点確認した。弥生前期のト骨は第20次調査に続くもので、2点となった。弥生中期のト骨は第20次調査で10点ちかく確認し、第20次から第22次調査地点の

範囲ちかくにト骨をおこなう行為者の居住地があったことがうかがえよう。このト骨を含め、この調査区付近は重要な遺物が多く出土し、ムラの一中心地であったことは確かである。

以上、簡単ではあるが、遺構・遺物を中心に課題を含め、まとめてきた。今後、詳細に遺構・遺物を検討し、報告したいと考えている。

Ⅱ. 第24次発掘調査の概要

1. 調査の全容

本調査地は遺跡の東部にあたり、唐古・鍵遺跡の調査としては初めて東限をおさえるための範囲確認調査となった。本地は遺跡推定の東端とはいかなかったが、ムラ内部から環濠付近にあたる。発掘調査では長さ約45.5m、幅 2.8mの南北に長いトレンチを設定した。水田耕土層・床土層を機械力をもって除去し、その後、人力による調査を進めた。

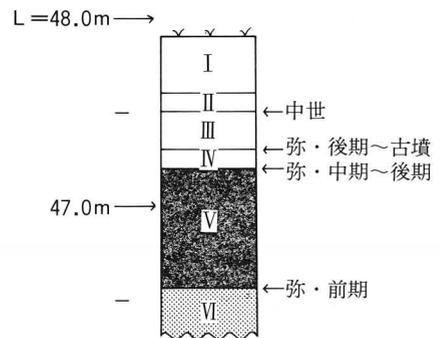
遺構はトレンチ全面で検出した。遺構面は3面確認した。第1遺構面は中世素掘溝、第2遺構面では弥生時代後期から古墳時代の遺構、第3遺構面では弥生時代中・後期の遺構をそれぞれ検出した。弥生時代中・後期面で検出した大溝や北方砂層は第1次調査や第18次・23次調査で検出した各遺構につながり、ムラの東部地区の様相が把握できるようになってきた。このようなことから、今回の調査は範囲確認調査としての成果が充分果せた。

2. 遺構

(1). 層序

遺跡は南東から北西方面に低く暖傾斜している。今回の調査地は遺跡の東部にあたり、比較的標高が他の調査地に比べ高くなっている。本地の基本的層序は第Ⅰ層：茶褐色粘質土層（水田耕土層）、第Ⅱ層：灰褐色粘質土層（水田床土層）、第Ⅲ・Ⅳ層は不均一で黒褐色土層や黒褐色砂質土層等で構成されている。第Ⅴ層は暗黄灰色粘質土層、第Ⅵ層は暗灰色粘質土層で形成されている。しかし、この基本的な層序はトレンチ南端において認められるもので、トレンチ全体を覆うものではない。トレンチ北半では幅の広い微凹地が検出されている為、これらの層序はない。

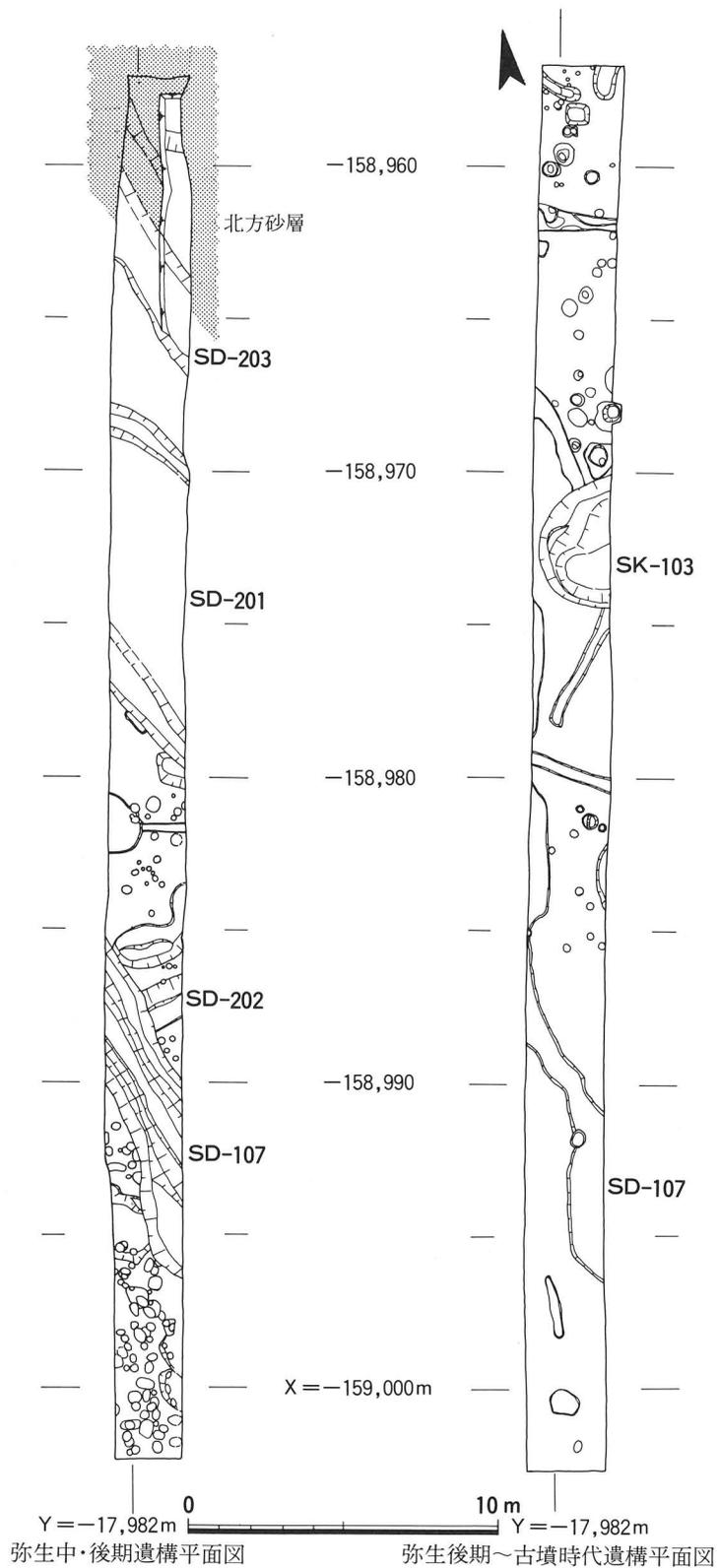
遺構は第Ⅲ層上面で中世素掘溝を、第Ⅳ層上面で弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構を、第Ⅴ層上面で弥生時代中・後期の遺構を検出した。弥生時代前期の遺構は確実なものも未検出であるが、第Ⅴ層中には前期の土器片を含んでいる為、第Ⅵ層上面で検出される可能性があったが、未調査である。弥生時代前期の遺構は本調査地から南側（第5次調査地）にかけて存在するようである。



第39図 第24次調査地基本土層柱状図

(2). 弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構としてはトレンチ南半で柱穴群、北半で溝二条と北方砂層を検出した。柱穴群の時期は定かでないが、他の遺構は中期後半のものである。



第40図 第24次調査遺構平面図

柱穴群

柱穴は主にトレンチ南端で約70基検出した。ここでは第Ⅴ層の安定した土層がみられ、微高地上に柱穴群が立地している。柱穴は径20cmから50cmの規模で、深さは20cmから100cmのものがあり、まちまちである。柱穴のなかには柱根の残るものも二、三基ある。

各々の柱穴の関係は調査面積が狭い為、把握できない。しかし、それらの並び方から、トレンチの西側に広がりそうで、二、三基の竪穴住居が想定できるかもしれない。

S D-201

S D-201はトレンチ中央部で検出した大溝である。本溝は南東から北西方向に軸をもつもので、推定幅約7mを有する。本溝の中央部には古墳時代の土坑が掘削されており、残存状況が悪い。微凹地の縁辺部であるため、ベース層や溝埋土が軟弱であり、トレンチ壁面の崩壊が大規模になり完掘することは不可能であった。このため、溝の深さや詳細については不明な点が多い。本溝は第Ⅲ様式項に掘削され、第Ⅳ様式の洪水堆積物によってほぼ埋没したようである。しかし、この砂層の上面には第Ⅴ様式初頭の遺物を出す黒色粘土層が形成されており、第13次・19次調査の大溝の例から第Ⅴ様式初頭の小規模な溝の再掘削が考えられよう。出土遺物には各層から多量の土器を検出している。また、骨製の紡錘車も下層から検出した。

本溝より南側では、弥生中期の柱穴や土坑が検出されていることから、ムラの最も内側になる溝で、環濠としての性格を有していたと思われる。

第3表 第24次調査主要溝等一覧表

溝番号	規模 (m)		溝底 標高	走行方向	継続時期 (弥生)					主要遺物	備考
	幅	深度			I	II	III	IV	V		
S D-201	推定 約 7	1.5 以上	—	南東 — 北西		←	→			骨製紡錘車	環濠 埋没後再掘削
S D-202	1.4	0.5	46.7	北東 — 南西			↔				区画溝
S D-203	2.0	0.6	46.4	南東 — 北西			↔				環濠
北方砂層	推定 約 15	1.3 以上	45.7	東南東—西北西			↔			完形土器・ 大形石庖丁	自然河道 南辺部のみ検出
S D-107	2.0	1.2	46.1	南南東—北北西					↔	完形土器群、槽	環濠・V字溝

S D-203

本溝はトレンチ北半部分で、S D-201の北2mで検出した溝で、ほぼ、S D-201に並行するように掘削されている。本溝の規模は幅約2m、深さ0.6mを測る。灰黒色粘土によって埋没しており、溝の上面は北方砂層の堆積の一部が覆っている。遺物は土器がわずかに出土しているのみである。時期は第Ⅲ様式で、S D-201とともに一時は開口していたのであろう。S D-201に並び、環濠としての性格を有していたと思われる。

北方砂層

トレンチの北端で検出した自然河道である。調査では河道の南側の肩を検出したのみで、本体はさらに北へと広がっている。北側の水田をボーリング調査した結果、推定幅約15m程のものであることがわかった。検出した範囲では深さ約 1.3m を測る。河道の堆積は大きく二分され、下層の粘土層と上層の砂層に分割できる。これらの堆積は安定した水平堆積である。下層の粘土層の形成は微凹地の堆積で、その後、この微凹地に砂層が堆積するような流れができたのであろう。砂層中では完形土器が点在して検出され、土器の摩耗が少ないことから、この河道ちかくで廃棄されたのであろう。

なお、この砂層を含む自然河道は第1次・18次・23次調査等で検出している北方砂層に、その規模や流路方向、時期などから対応すると考えられる。

(3). 弥生時代後期・古墳時代の遺構

弥生時代後期の遺構には大溝と小土坑、小溝があるが、それらの中で所属時期や性格が判断できるのはS D-107のみである。古墳時代の遺構としては大土坑S K-103がある。これらの遺構はトレンチ中央部を中心に検出した。

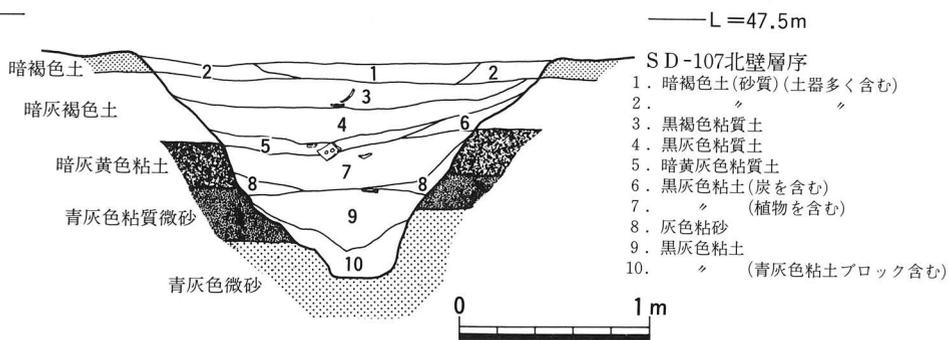
S D-107

本溝はトレンチ南端で検出した大溝である。南南東から北北西方向に走向し、幅約2m、深さ1.2mを測る。ほぼ、S D-201や北方砂層と同方向で、微高地の縁辺部に沿って走る溝である。溝の断面形態はV字形で、本遺跡では例のない形態である。溝内の堆積は10cmから20cm前後の粘土層や粘質土層で形成されている。

遺物は最上層から第V様式末の土器、中層から上層にかけて第V様式中葉から後葉の土器が出土した。中層からは近江産の甕や槽などを検出した。本溝の遺物量は今回の調査で最も多い。

S K-103

本土坑はトレンチのほぼ中央部で検出した古墳時代初頭の土坑である。S D-201が埋没した後掘削されたもので、推定径 4.3m、深さ 1.5m を測る不整形の土坑である。土坑はトレンチの東側まで及んでいるが、トレンチの壁面が崩壊し、土坑部分の埋土が崩れた形となった。この



第41図 S D-107 土層断面図

為、土坑の形態等については不明な点が多い。土坑の堆積は20～30cmの粘砂・粘土・砂質土等で構成されている。これらの堆積土は軟弱で土にしまりが無い。

土坑中位の灰黒色粘土層には多量の木製品が含まれていた。木製品の中には自然木も多いが、製品としては脚台付容器がある。他には有頭棒や用途不明木製品などがある。

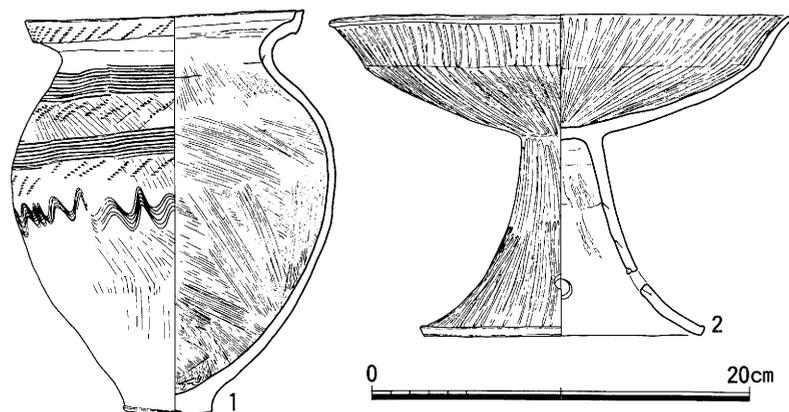
3. 出土遺物

第24次調査で出土した遺物はコンテナ110箱を数え、遺構密度の高い地域の中では比較的少ない。遺物の中では土器が最も多く、弥生後期溝であるSD-107の土器が大半を占める。土器以外では石器、木器、骨角製品などあるが点数は少ない。

土器

北方砂層より出土した一群の土器(図版39-8、40-1・2)がある。全体に器壁が厚く、シャープさの欠く土器である。外面には粗雑なケズリがみられるものが多い。焼成も堅緻さを欠くもので、低温焼成かもしれない。図版39-8は脚付鉢である。鉢は無頸壺の形態に類似するが、紐孔はない。脚部は柱状を呈すもので高杯の脚部と同じである。これらの土器群には第V様式にみられる円錐状にひろく高杯脚部も含まれている。また、皿状の高杯杯部は屈曲が強い受部を有するものもあり、第V様式直前の土器群であることを物語っている。

SD-107からは完形を含む多量の土器が出土している。第V様式中葉から後葉の資料(図版38、39-1～7)である。土器群は長頸壺が中・小形品(図版39-1～5)となる。壺では広口壺が主体をなす。また、これらの土器群では記号文を有するものも多い。甕は中形品が多く、外面にはタタキが施される。また、近江産の甕(第42図-1)もみられる。高杯は完形にちかいものが1点(第42図-2)ある。杯部は大きく、外反ぎみに短く立ち上がる。内外面は丁寧なミガキを施している。他に器台・小形鉢などがある。



第42図 SD-107 出土土器 (S=1/4)

石器・骨角器

石器の出土量は少ない。SD-107からは小形の石槍や石庖丁、柱状片刃石斧（図版40-4～8）が出土している。7の石槍には両面に研磨痕がみられる。石庖丁は流紋岩製と思われる。これらの石器類は上層より出土しており、混入品の可能性が高い。北方砂層からは大形の石庖丁（図版40-3）が出土しているが、刃部が欠損している為、形態や大きさはわからない。紐孔は1つで、背部の一部を突出させ、紐孔を設けている。

骨角器はさらに少ない。写真2-2は骨製の紡錘車である。直径5.0cm、中心孔0.75cmを測る。片面には骨の海綿体部分が全体にみられる。SD-201より出土した。第43図は鹿角製品であるが用途不明品である。右角の第2枝から第3枝の部分を利用したものである。末端は切り落とし、やや湾曲した部材に仕上げている。その外湾した面の中央部には17条の線刻を施している。全体に刀子痕を多く残すもので基部端には焼成痕がみられる。長野県生仁遺跡例に類例がみられる。SK-103より出土している。古墳時代前期の所産である。



第43図 SK-103出土鹿角製品（ $S = \frac{1}{3}$ ）

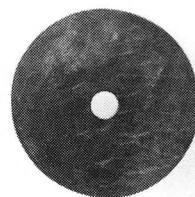


写真2 骨角製品（ $S = \frac{1}{2}$ ）

木 器

木器としては製品がわずかにある。S D-107からは槽（図版41-1）が出土した。全長88.5cmを測るが約半分を失う。この槽の側辺部には2.5～3cm前後の刻目が施されており、その用途はわからないが注意のひくものである。また、S K-103からは台付容器（図版41-2）が出土している。全長72.7cmを測る大形品であるが数片に割れている。各々の割れ面の縁辺には補修孔があり、サクラ樹皮状の紐が巻きつけてある。台部は細長く二脚に分かれ、各々の台の中央は透し状に抉り取っている。優品である。

（注）① 1969岩崎卓也・森島稔他『生仁』更埴市教育委員会

4. まとめ

今回の第24次調査は本遺跡の東端の範囲を把握するためにおこなった。調査ではその目的の一部を果たすことができた。今回検出した弥生中期の大溝S D-201は環濠と思われる。その規模や走行方向、ムラの中での位置などを総合して考えると、ムラの最も内側の環濠となろう。したがって、この地点より外側に100m前後の間では数条の環濠が配置されていると思われる。S D-201は第Ⅳ様式末の洪水層（北方砂層）によってその一部が埋没してしまう。これは唐古・鍵ムラにおいて第Ⅳ様式期に開口している環濠などにみうけられるものであり、ムラの大半を覆うような洪水の存在が考えられよう。

北方砂層は今回の調査地北側を西北西に流れるもので第23・1・18・12・17次と連続して検出しており、ほぼ、流路方向を確定することができた。砂層内には完形土器など多くの遺物が含まれており、磨耗もないことから出土地近辺で廃棄、あるいは流れ込んだものであろう。このようなことからさらに東側にも居住区があったことがうかがえる。時期は第Ⅳ様式末であり、居住区内の微凹地をやや切り込みながら流れていたのであろう。

トレンチ南半で検出した柱穴群では中期前半のものと思われるが、これらの中には柱根の残存するものもあった。しかし、住居の輪郭などは把握できていない。第5次調査や第23次調査においても同様の柱穴を検出していることから、唐古池南半の東側に一つの居住区を想定できるであろう。

弥生時代後期の環濠はS D-107である。第Ⅴ様式中葉から末にかけて使用されていた溝で、弥生中期の大溝S D-201埋没後に掘削されたのであろう。S D-107は従来、本遺跡で検出している後期の溝とはやや形態を異にする。本溝は幅2mと狭いが、その断面がV字形を呈し、急斜面を形成している。低地性での集落では注目されよう。

今回の調査では古墳時代前期の土坑も確認した。第1・5・23次において庄内～布留期の土坑が点在しており、密度は低いが古墳時代の集落があったと思われる。

以上、各時代の変遷をみてきたが、本地も集落内部の一端であった。今後、さらに東部地域の調査が必要であろう。

Ⅲ. 第25次発掘調査の概要

1. 調査の全容

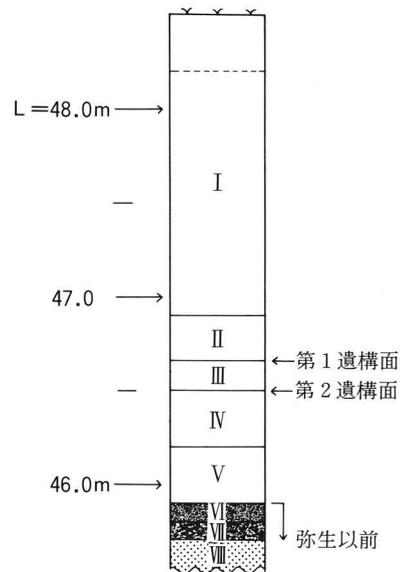
本調査地は遺跡の北東部にあたり、第24次調査地の北 100m 地点である。第1次調査地からは約50m離れているが、この1次調査の北東部では顕著な遺構が検出されていない。今回の調査はこのような状況の中で、遺跡の推定範囲を確定する目的でおこなわれた。

発掘調査地は自然堤防上に立地する畑地でおこなった。調査は長さ20m、幅 1.5mの南北に長いトレンチを設定した。自然堤防上に立地するため、畑地耕土層を含め、第1層の黄褐色土層は厚さ 1.6mに達する。この層を機械力で除去し、その後、人力をもって調査を開始した。調査面積が小さく、遺構面までが深いため、調査は困難を極めた。このため、最終的には遺構の規模確認とその所属時期、土層の形成などを中心に調査を進めることとなった。

2. 遺構と遺物

(1). 層 序

本調査地の基本的な層位な層序は次のとおりである。第Ⅰ層：黄褐色土層(微砂質土)、第Ⅱ層：茶褐色土層、第Ⅲ層：灰褐色粘質土層、第Ⅳ層：黒褐色粘質土層、第Ⅴ層：暗青灰色砂層、第Ⅵ層：青灰色粘土層、第Ⅶ層：黒色粘土層、第Ⅷ層：黒灰色砂層となる。第Ⅰ層は自然堤防形成時に形成された土層である。遺構は第Ⅲ層上面で弥生中期の遺構、第Ⅳ層上面で弥生前期の遺構を検出した。遺物は第Ⅳ層や第Ⅴ層まで含まれており、第Ⅰ様式期に形成されたものであろう。



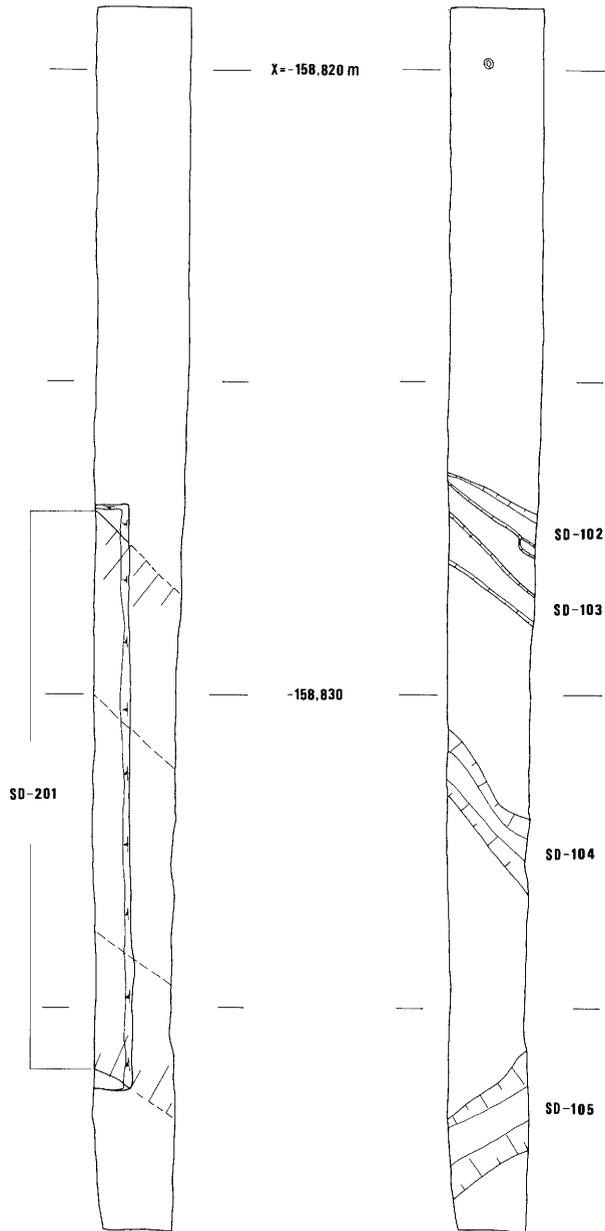
第44図 第25次調査地基本土層柱状図

(2). 遺構と遺物

本調査で検出した遺構には溝5条と落ち込み状遺構がある。落ち込み状遺構はトレンチ北半で検出したもので、基本土層の第Ⅳ層にあたる。

SD-102・SD-104・SD-105

SD-102・SD-104・SD-105はトレンチの中央部から南端にかけて検出した小溝である。SD-102・SD-104は南東から北西方向に走向する溝である。SD-102は幅 0.4m、深さ 0.2m、SD-104は幅 0.6m、深さ 0.3mを測る。これらの溝は黒褐色粘質土等の堆積で短時間で埋没したのであろう。遺物は弥生中期の土器片を数点含んでいた。



第2遺構面遺構平面図
Y=-18.032 m

第1遺構面遺構平面図
Y=-18.032 m



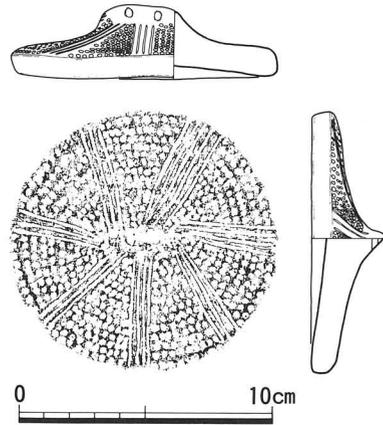
第45図 第25次調査遺構平面図

S D-105はトレンチ南端で検出した溝で、北東から南西方向に軸をもち、S D-102とは逆方向になる。溝幅 1.1m、深さ 0.3mを測る浅い小溝である。溝底には暗灰色砂層が堆積し、その上には黒褐色粘質土が覆っている。遺物はほとんど含んでいない。

S D-201

S D-201は第2遺構面（第Ⅳ層上面）で検出した大溝である。溝を確認した部分は小規模なため、不明な点が多い。溝幅推定 6mを測り、南東から北西方向に走向する大溝である。溝の調査はトレンチの壁面の崩壊によって断念したが、深さ 1mまで確認した。溝内の堆積は灰色砂層と黒色粘土層の互層になっている。黒色粘土層内には植物腐蝕物や木片を含んでいた。

遺物は第4層灰褐色砂質土層より第Ⅰ様式の壺蓋（第46図）と石剣（図版42-5）が出土した。壺蓋は笠形を呈するもので完形品である。蓋の中央部にはつまみ部を突出させ、紐孔を二つ穿つ。外面には3・4本の縦線を一組にして、分割する。内面には円形刺突文で充填する。石剣は切先をわずかに欠くが、現長11.5cmを測るものである。



第46図 S D-201出土土器（S = 1/3）

3. まとめ

第25次調査は本遺跡の北東部の範囲確認調査であった。ほぼ、遺跡の北東端と目される所で、第1次調査の状況から遺構の希薄なところとされていた。発掘では、弥生前期の大溝と思われるものを検出し、環濠になると考えられる。しかし、微凹地に掘削されていたためか、その後は安定したベース層も形成されていない。このようなことから、弥生前期に環濠が掘削されながらも、ムラはずれの様相が続くようである。弥生中期以降は主要な遺構もない。唐古ムラの前期遺構は、遺跡北部の調査（第1・12・17・21次調査）で多く確認しているが、小規模な遺構あるいは土器の単独出土などで密度は高くない。ムラはずれにあって微凹地部にムラ形成時の初期の遺構が存在することは注目されよう、また、中期以降に遺構が形成されないことから、前期と中期では環境の変化があったのかもしれない。今後、水田等も確認する必要から北部地区の環境を含めた調査をおこなわなければならない。

圖

版



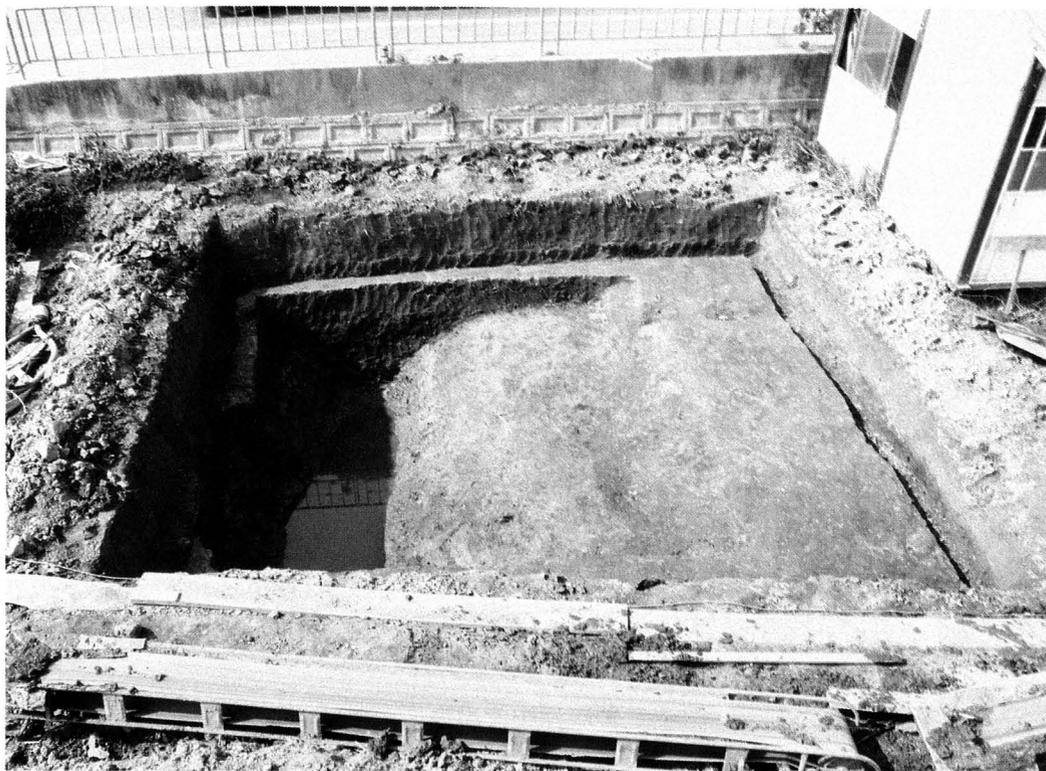
遺跡空中写真（上が北）



a. 調査地全景 (中世)(北から)



b. 調査地全景 (弥生)



a. 第2トレンチ 中世大溝



b. S K-51 柱根検出状況



a. S K-101 下層遺物出土状況



b. S K-101 最下層遺物出土状況



a. S K-105 第2層土器出土状況



b. S K-105 第4層土器出土状況



a. S K-102 遺物出土状況



b. S K-102 完掘状況



a. S K-103 鉢出土状況



b. S K-103 完掘状況



a. SK-1101 下層遺物出土状況



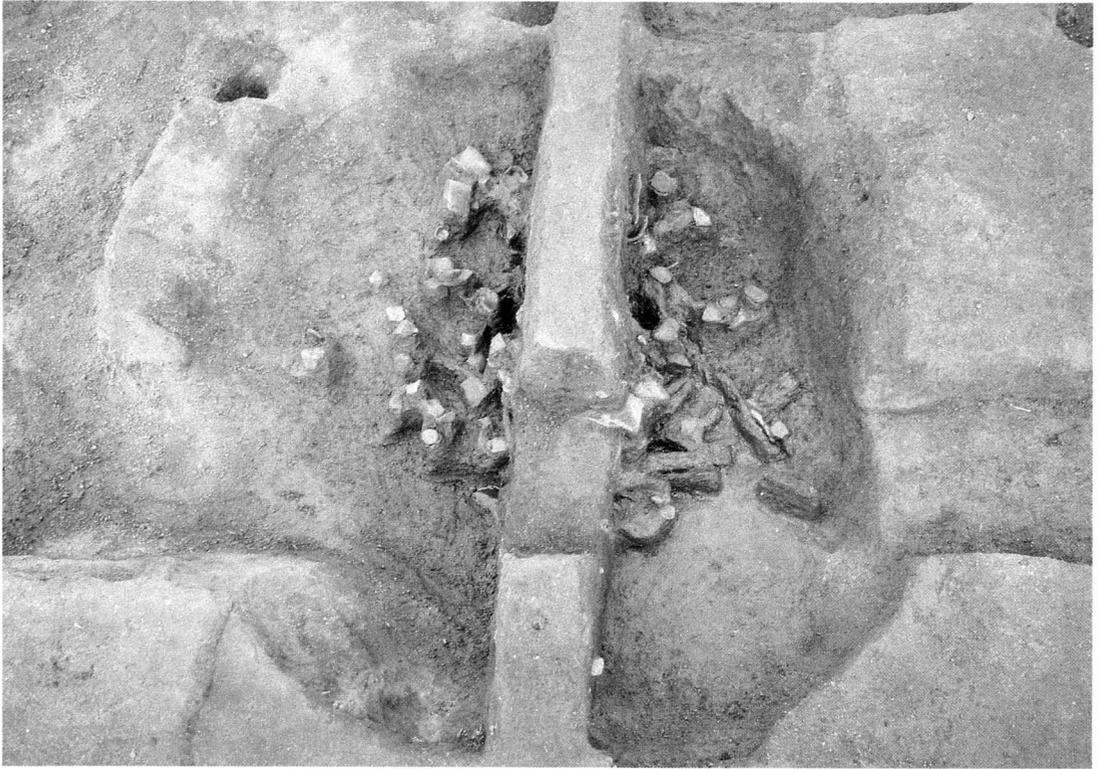
b. SK-1101 完掘状況



a. SK-1201 壺出土状況



b. SD-1201 完掘状況



a. SK-201 下層遺物出土状況



b. SK-201 完掘状況



a. SK-205 遺物出土状況



b. SK-210・211 完掘状況



a. 柱穴群（高床建物SB-201）



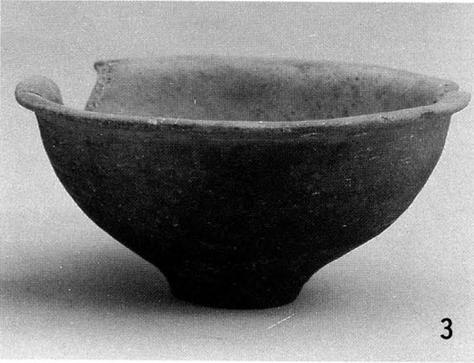
b. Pit-135 土器出土状況



c. Pit-135 最下層木材出土状況



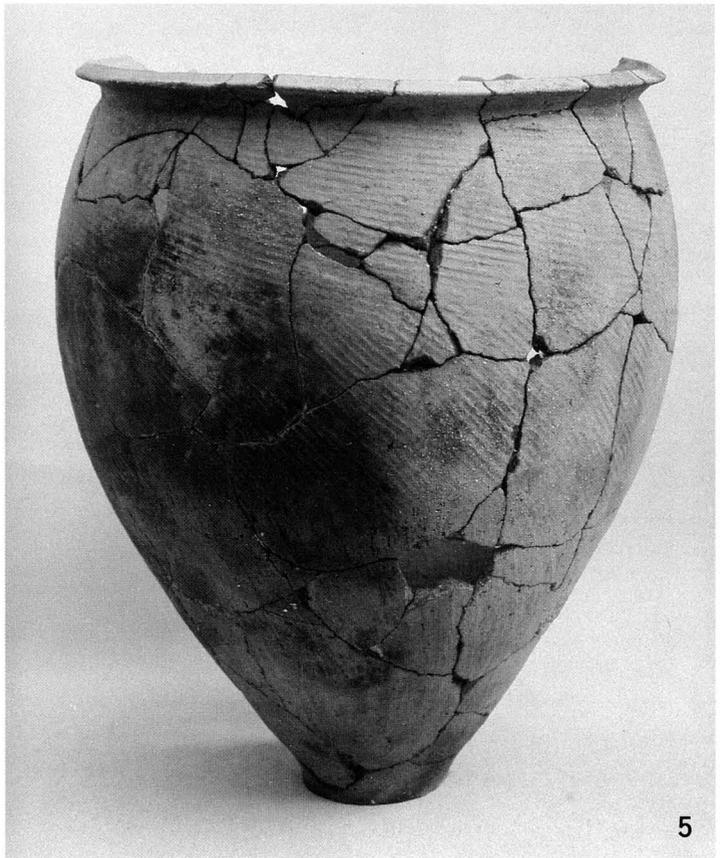
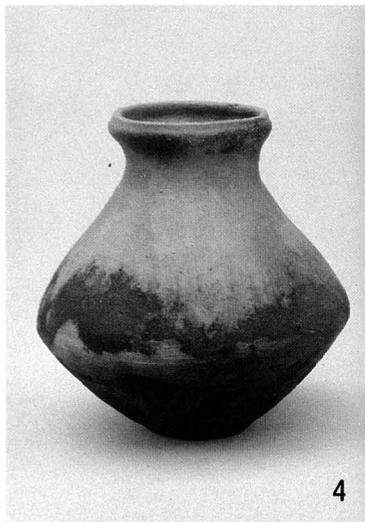
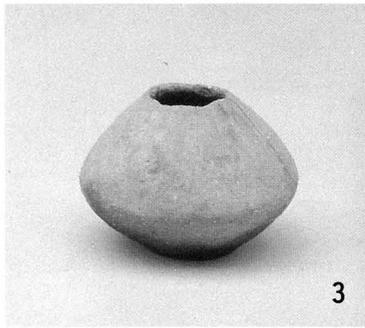
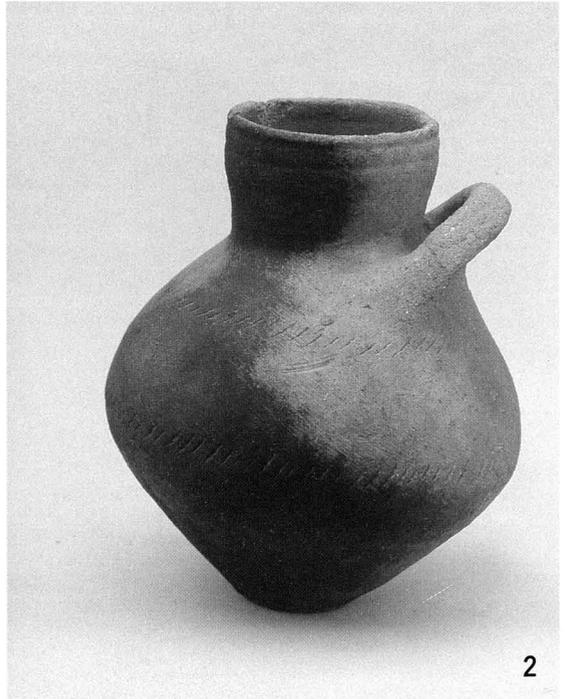
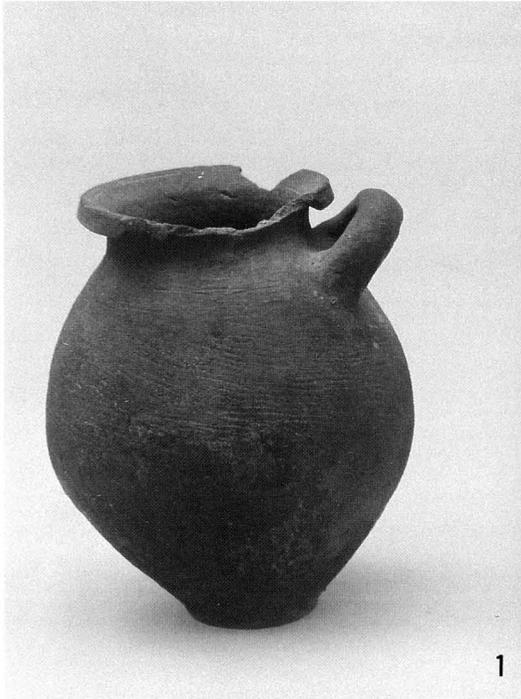
1 ~ 3 - S K - 1101出土土器 (S = 1/3)



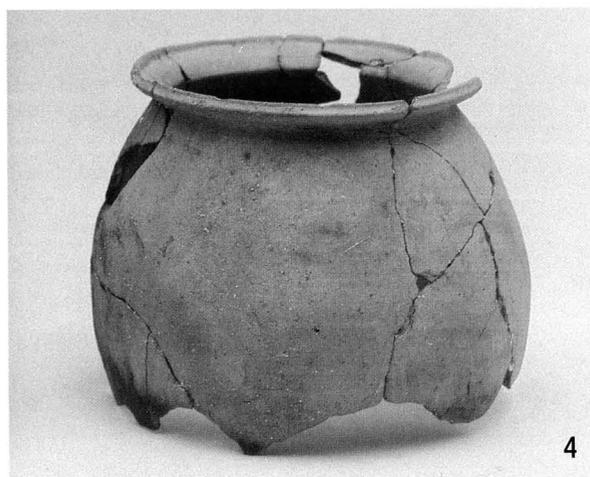
1 ~ 5 - S K - 1101出土土器 (S = 1/3)



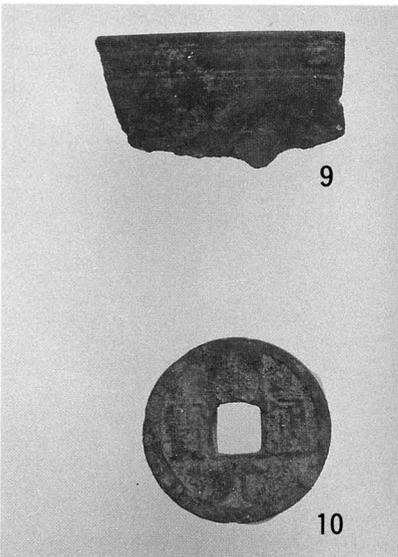
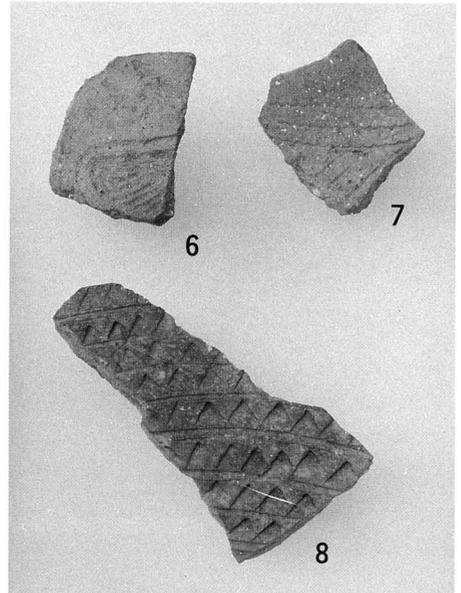
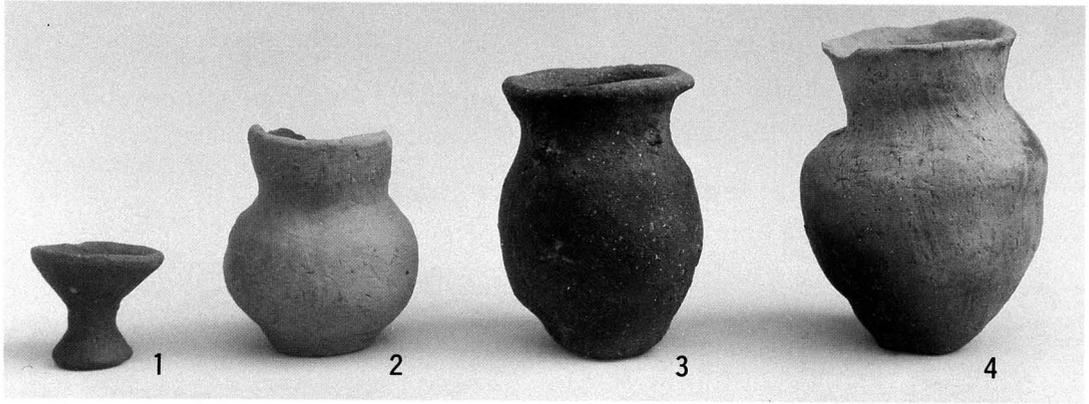
1 - S K - 1201出土土器、2 - S K - 103出土土器 (S = $\frac{1}{3}$)



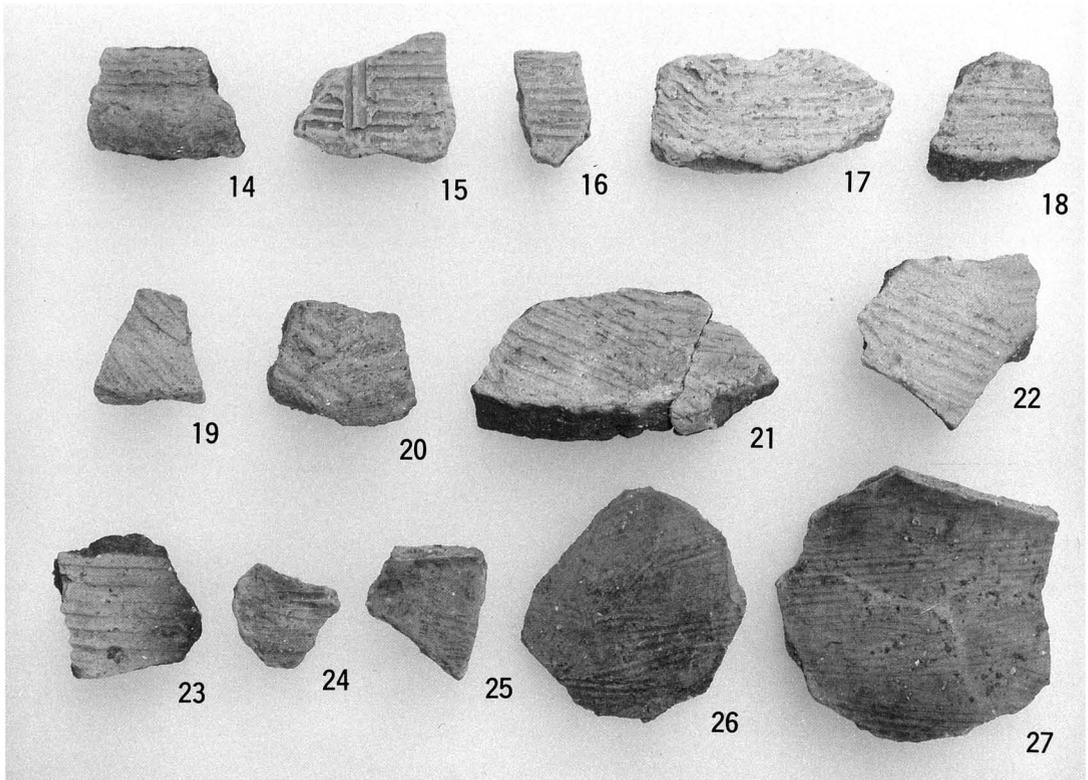
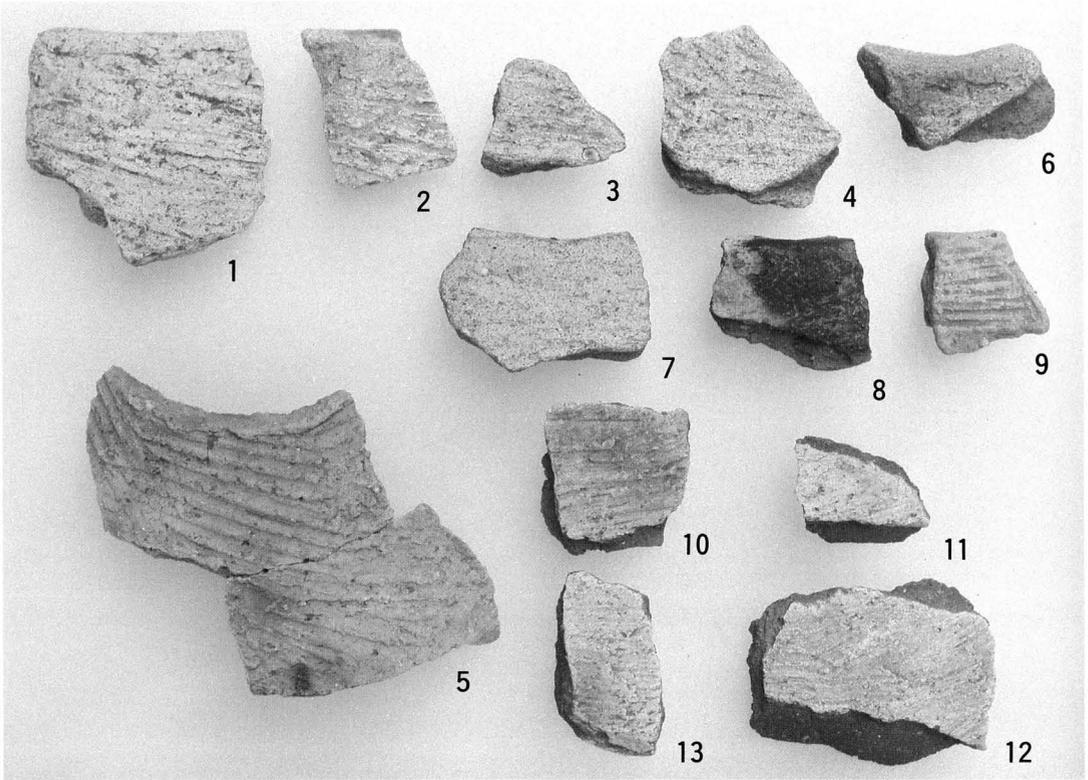
1 ~ 5 - S K - 105出土土器 (S = $\frac{1}{3}$)



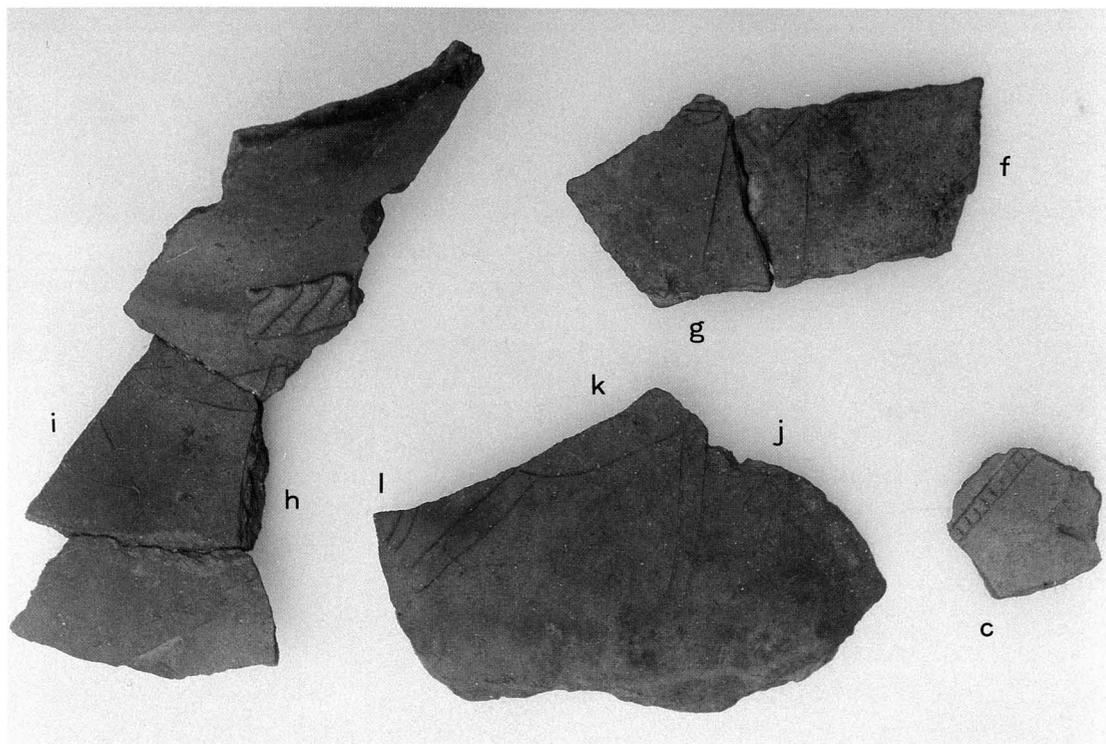
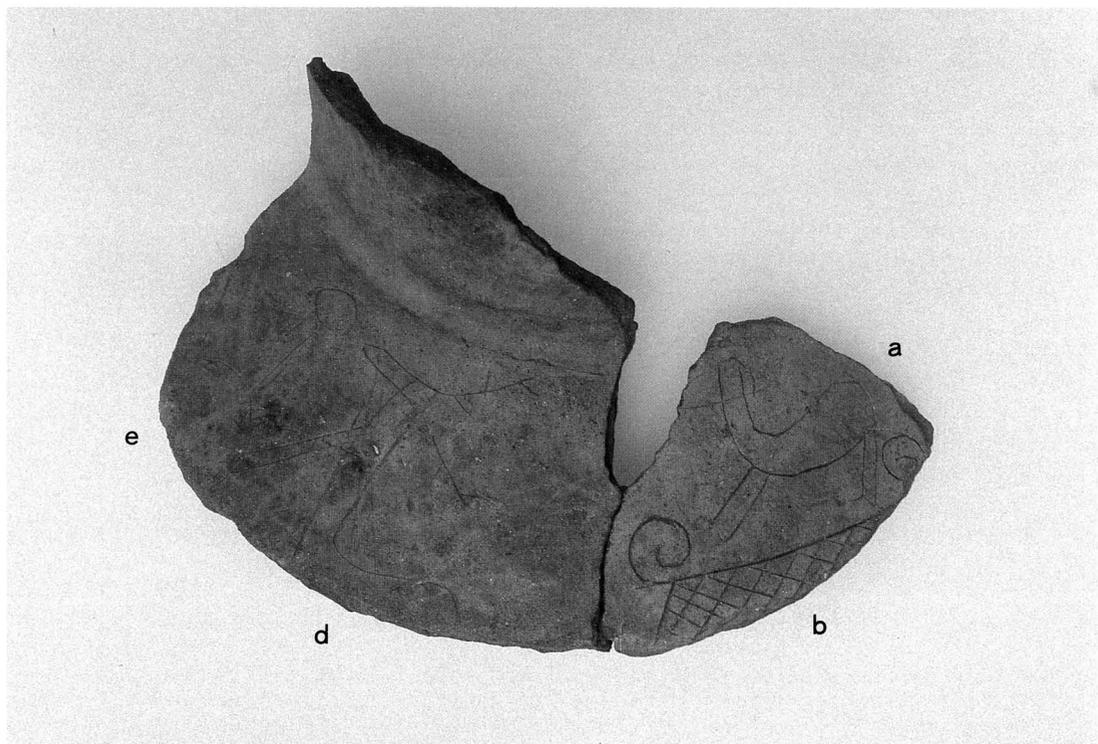
1 ~ 5 - S K - 105出土土器 (S = 1/3)



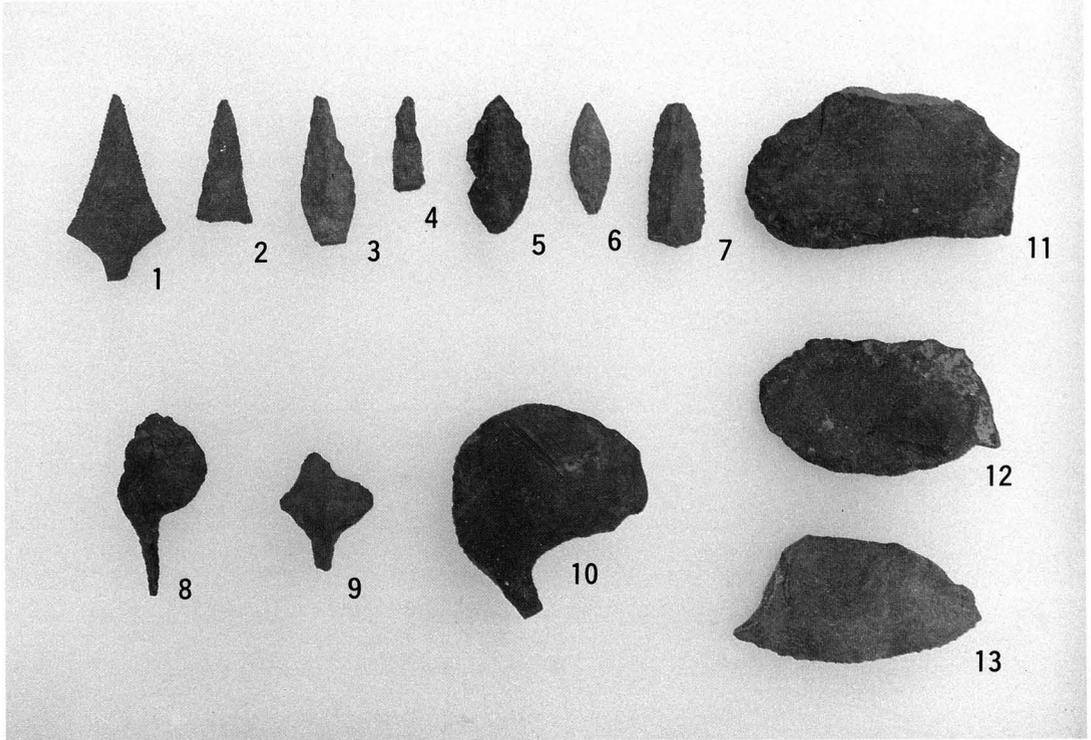
1～5-S K-101出土土器、6～8-搬入土器、9-銅椀、10-錢貨、11-独鈷石



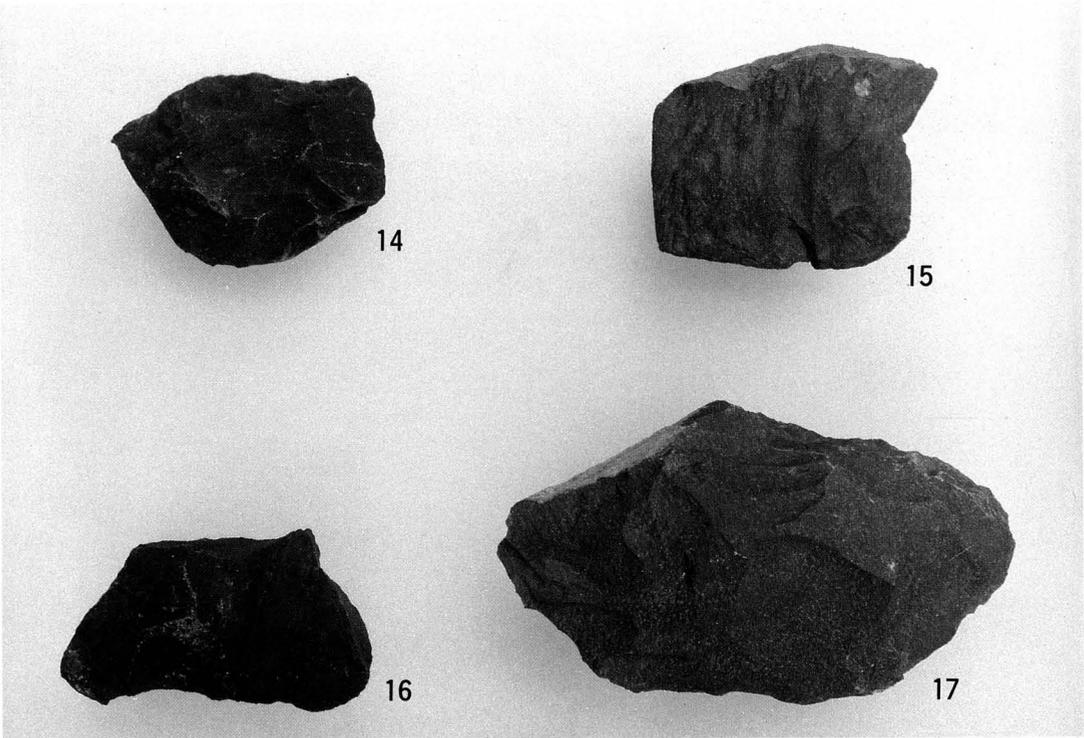
1～27一条痕文土器



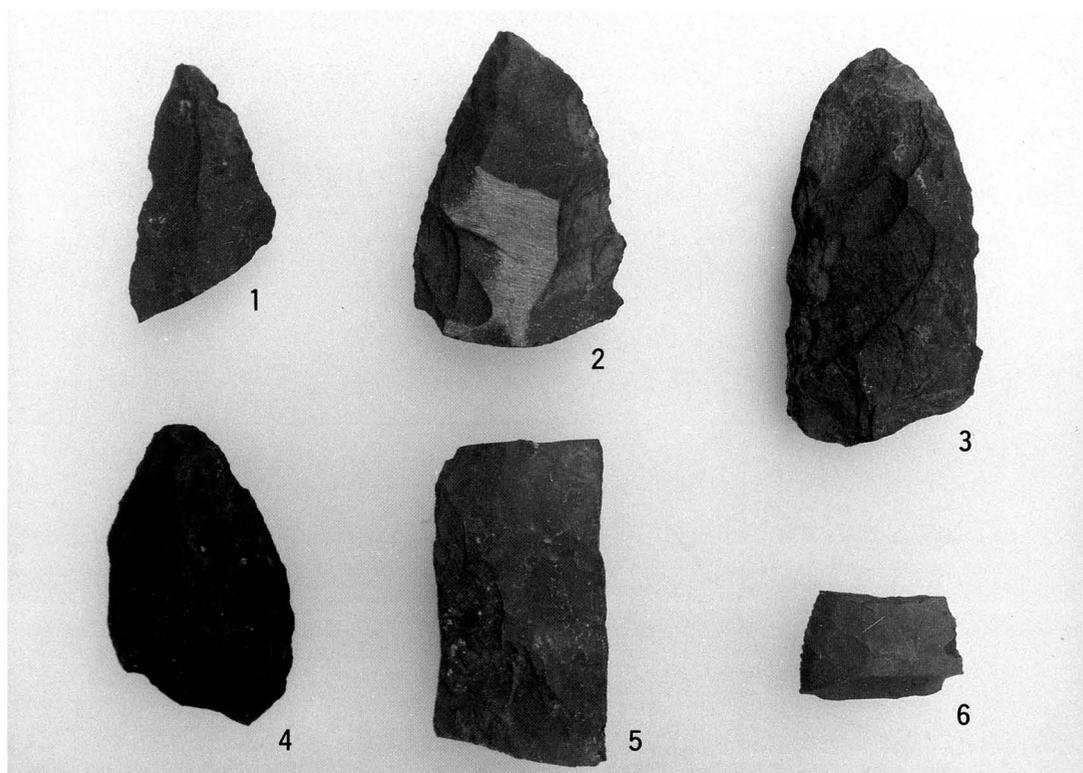
絵画土器 g-SK-101出土



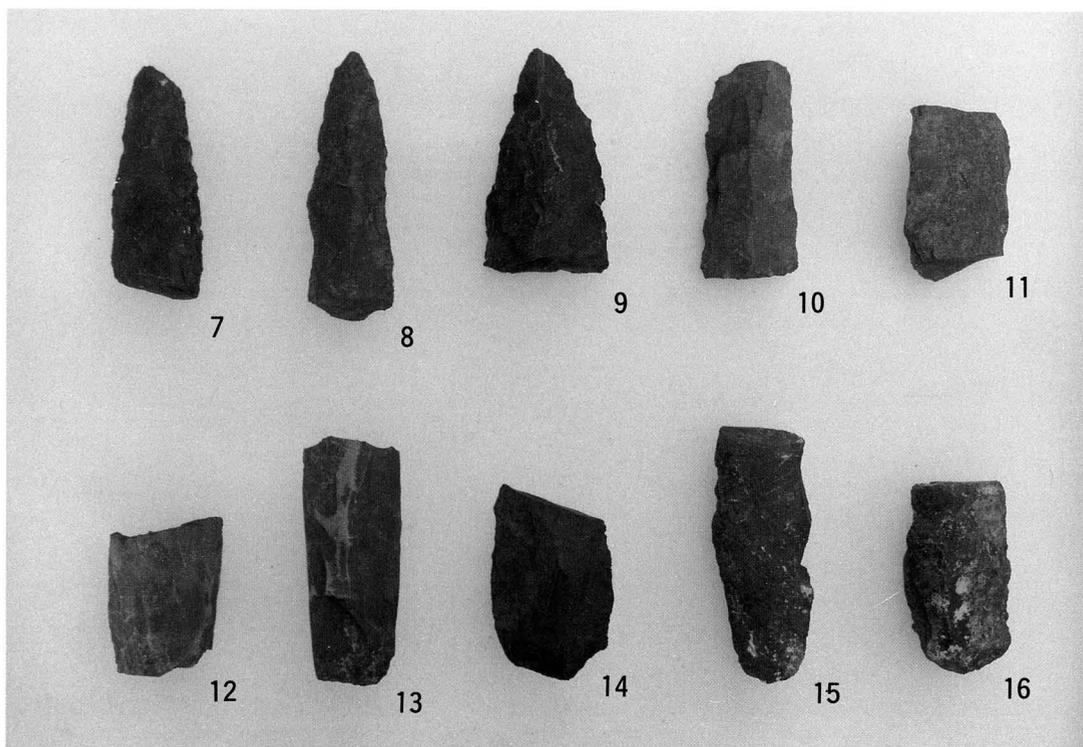
1～7—石鏃、8～10—石錐、11～13—スクレイパー
1～7・9・11—S K-101出土、8—S K-103出土、10—S K-206出土、12—S K-1101出土



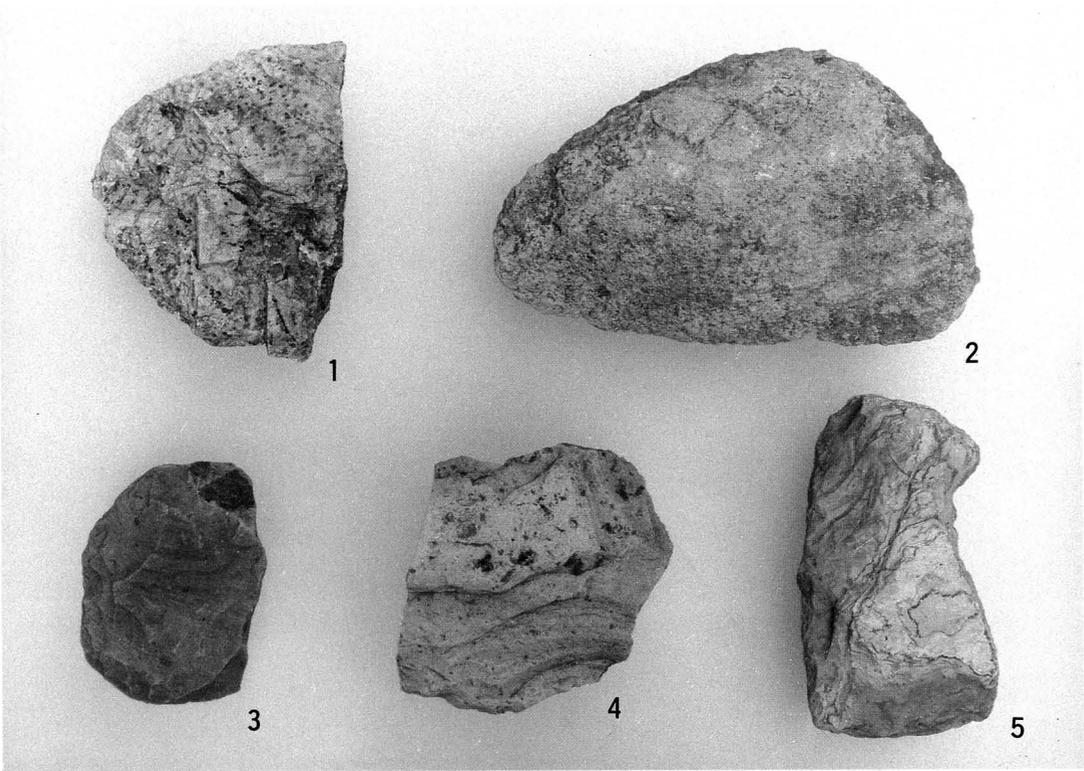
14～17—石核及び剥片 S K-201出土



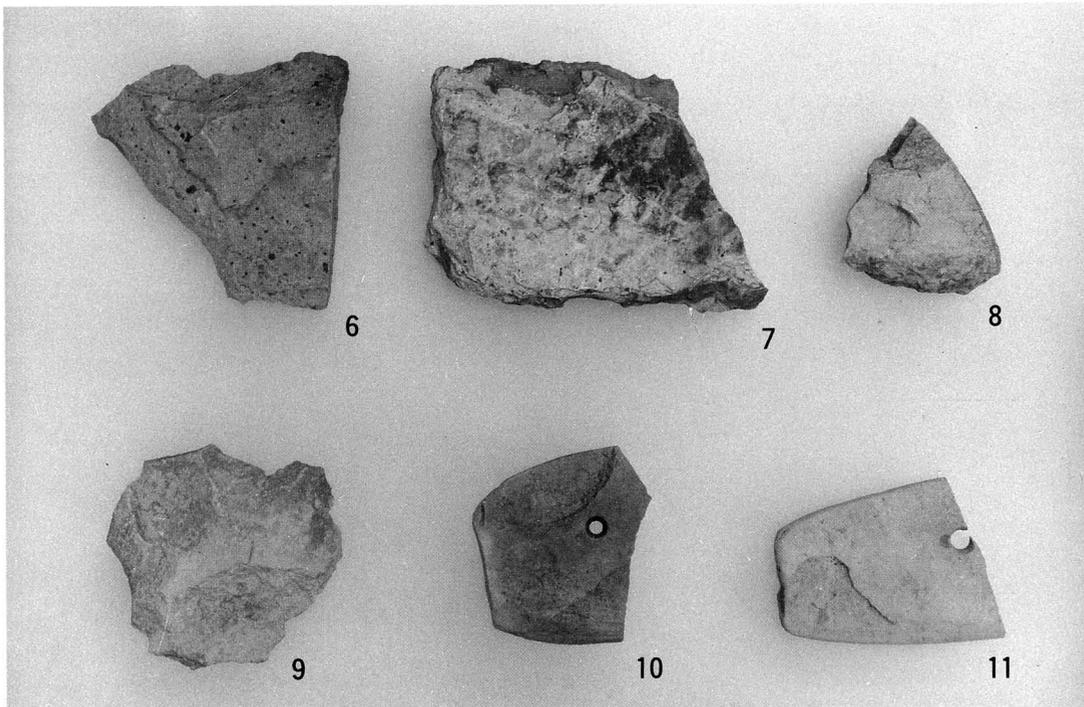
1～6—石剣・石槍
4—S K—103出土



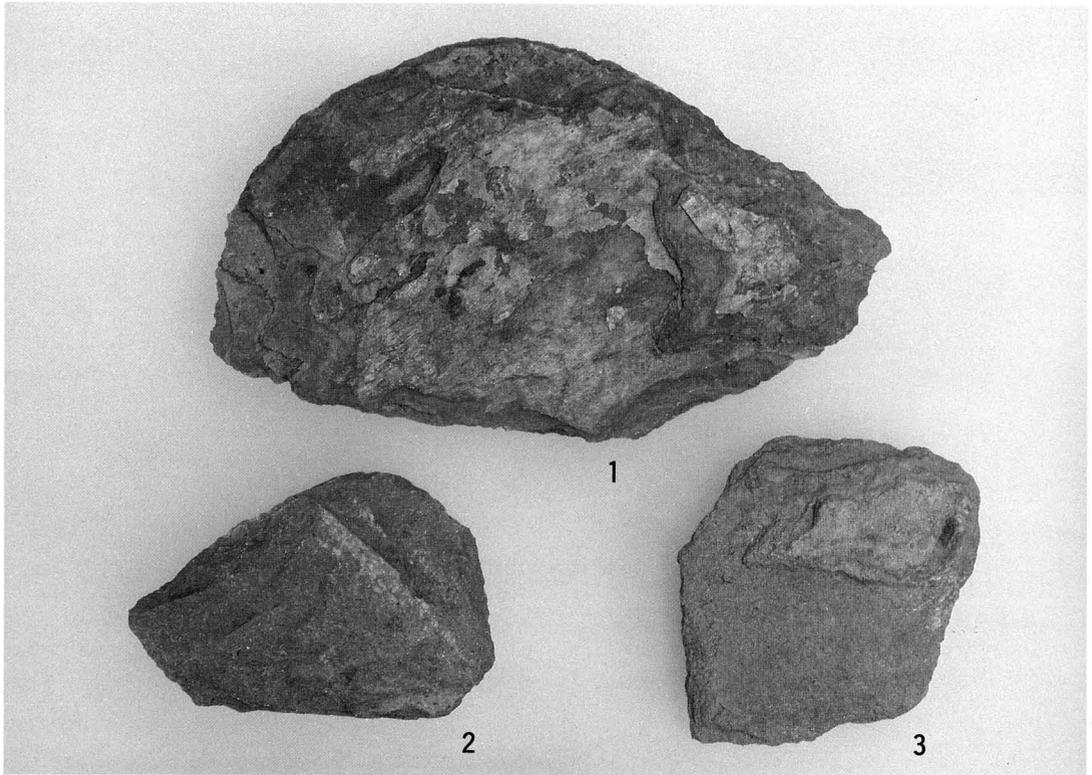
7～16—石剣・石槍
10・11—S K—1101出土、14—S K—105出土



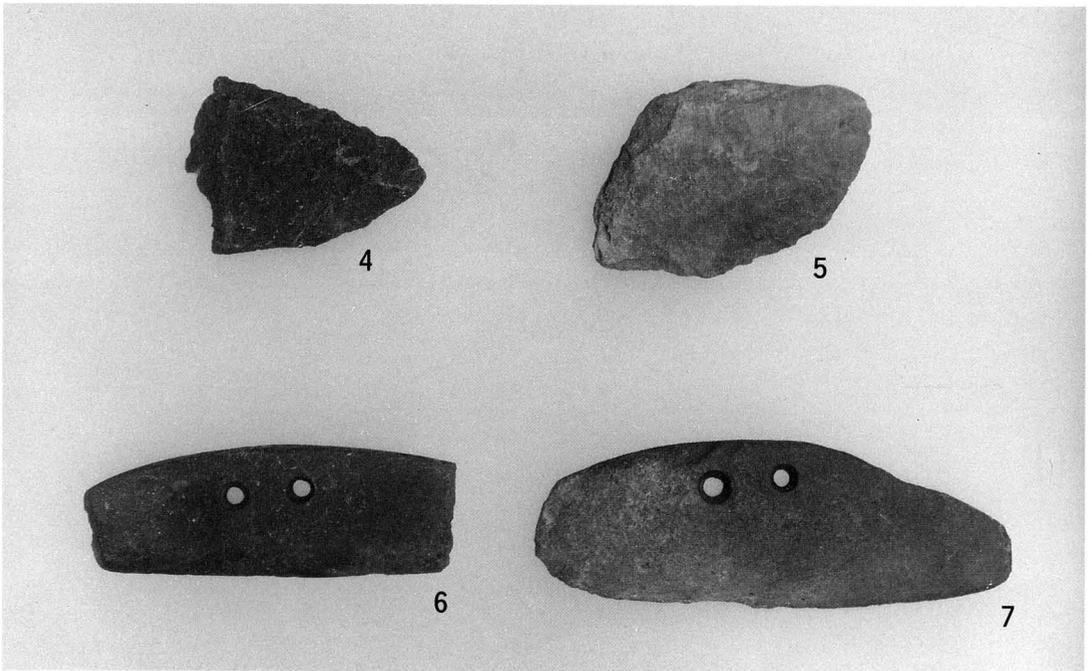
1～5一流紋岩製石庖丁未成品



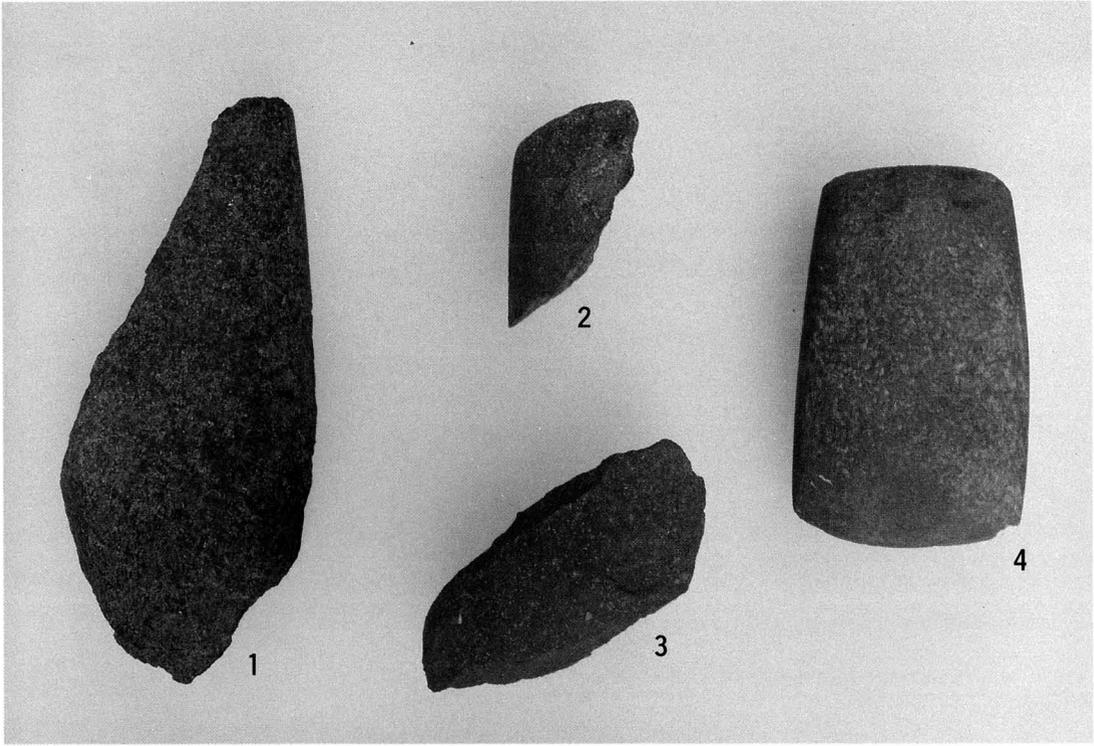
6～9一流紋岩製石庖丁未成品、10・11一同製品



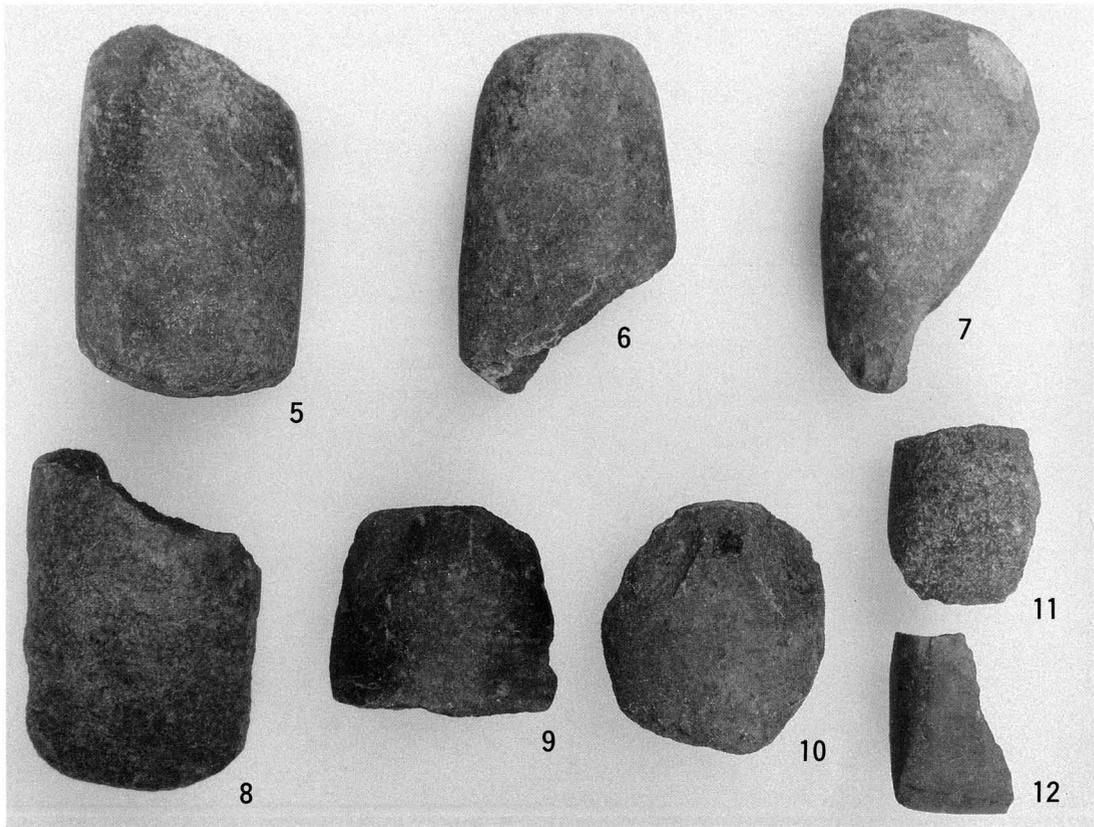
1～3 一玄武岩質凝灰岩質片岩製石庖丁未成品
1 - S K - 201 出土



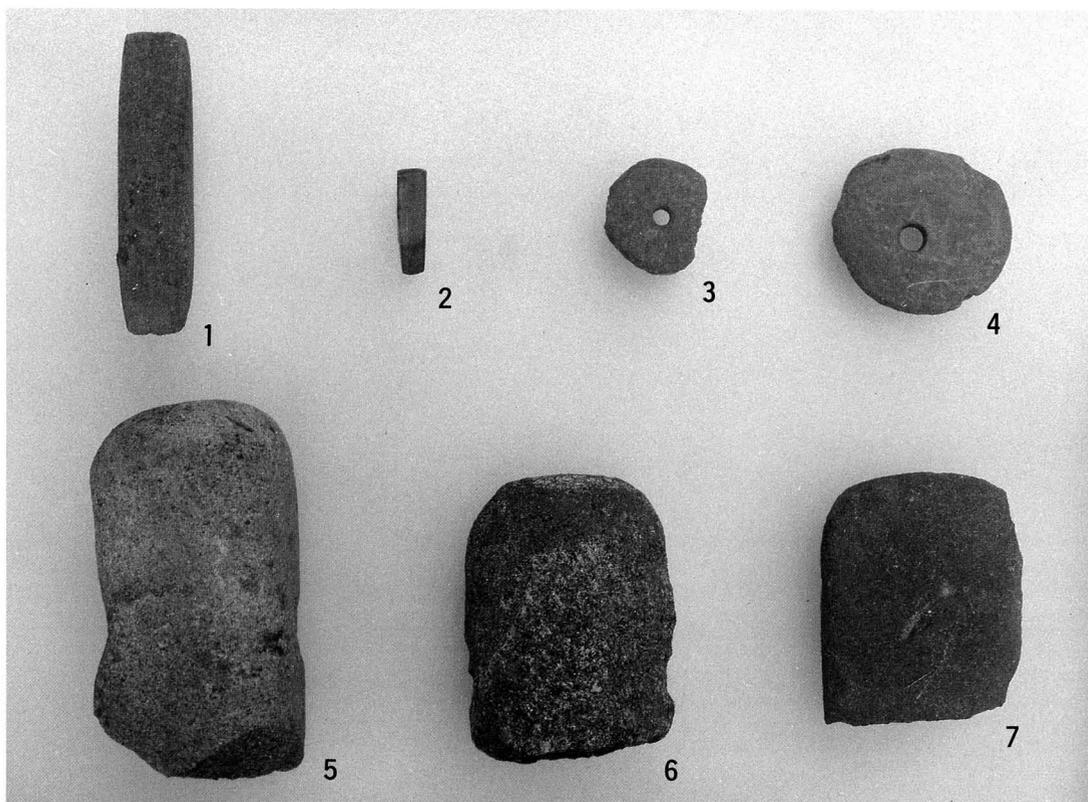
4～7 一同製石庖丁未成品及び製品
7 - S K - 105 出土



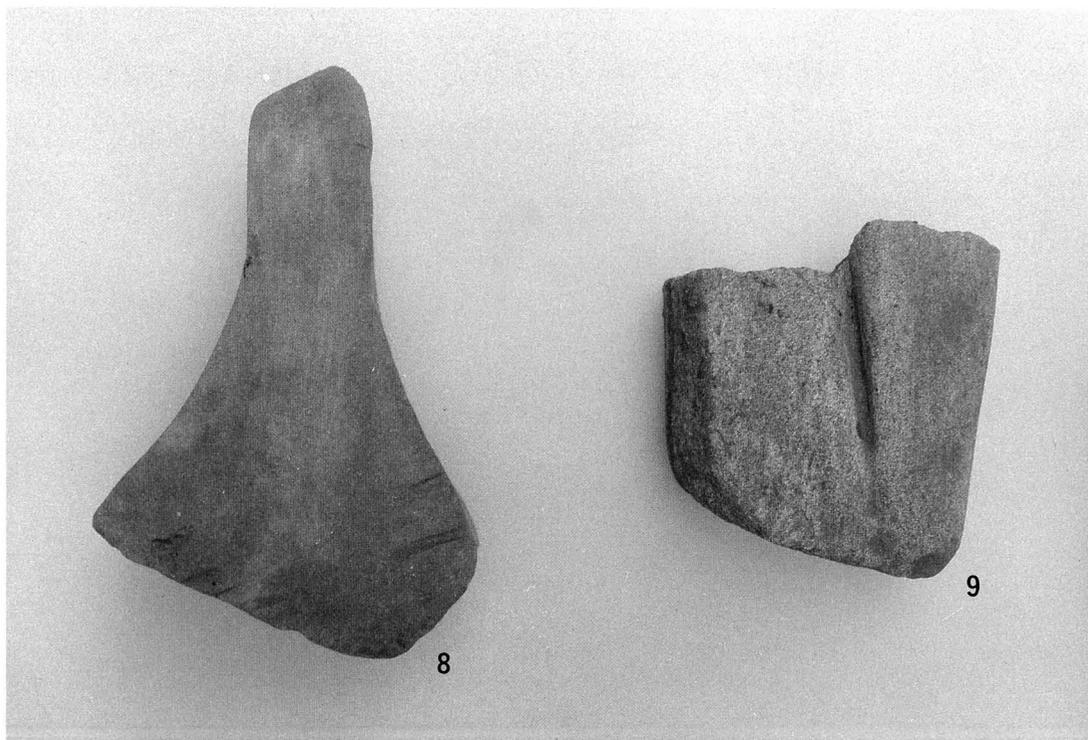
1～4—太型蛤刃石斧
1—S K—206出土



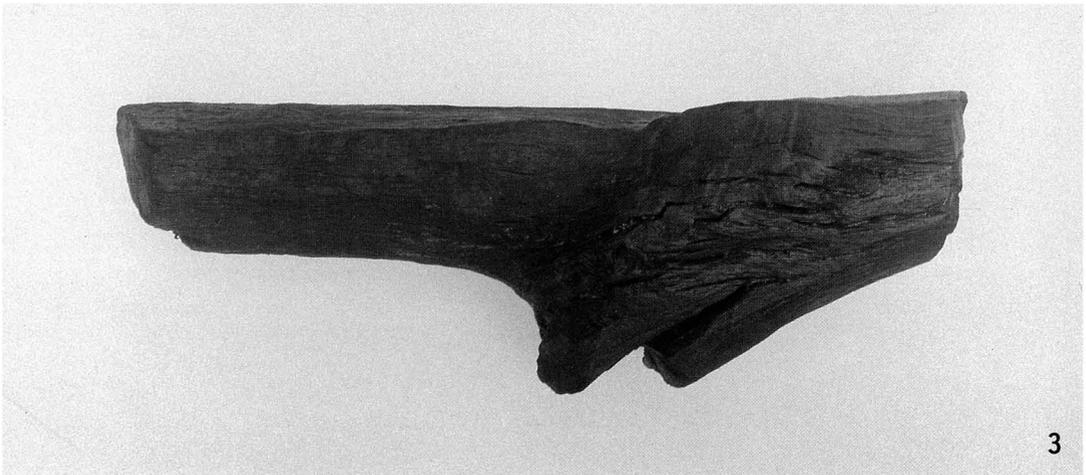
5～12—太型蛤刃石斧
5—S K—1101出土、8—S K—201出土



1・2—柱状片刃石斧、3・4—紡錘車、5—石錘、6・7—敲石
1・3・6・7—中世大溝出土、2—S K-105出土、4—S K-201出土、5—S K-102出土



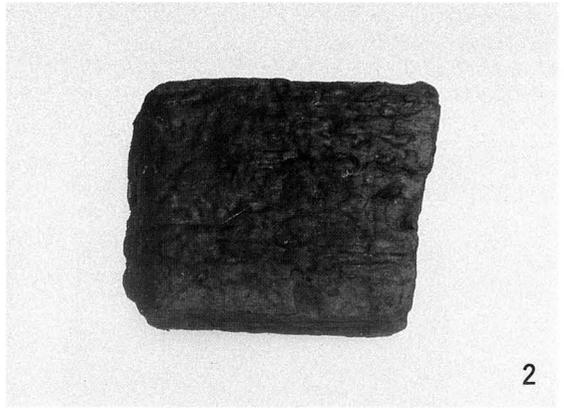
8・9—砥石
8—S K-105出土、9—S K-1201出土



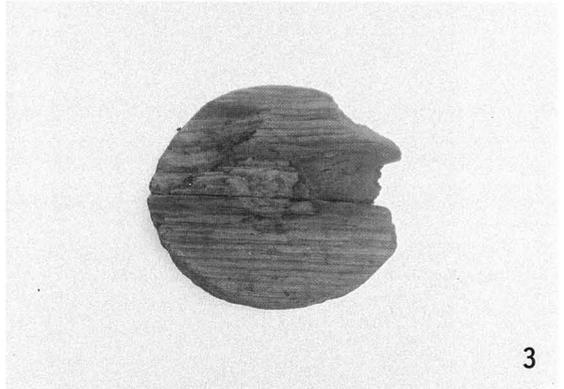
1・2—広楯製品、3—手斧未成品
1～3—S K—1101出土



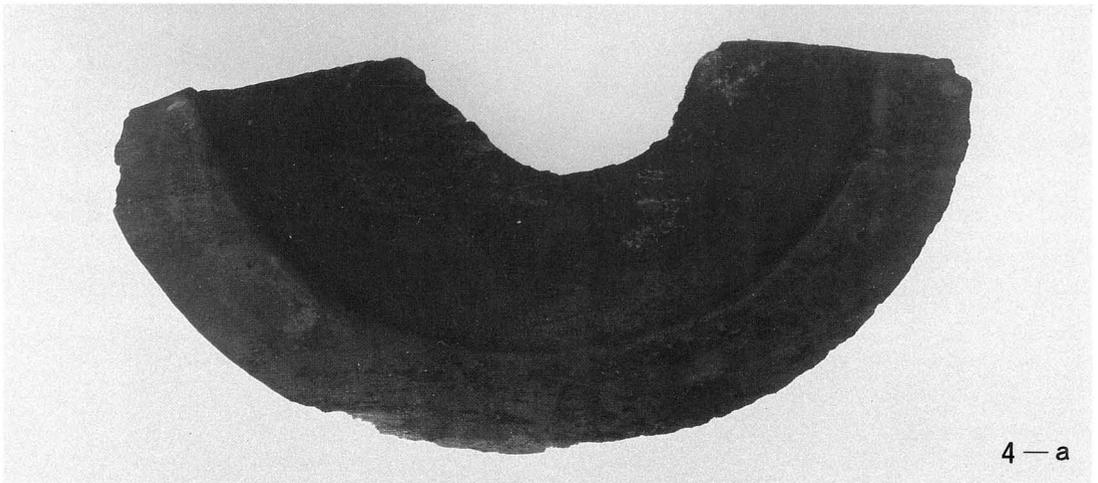
1



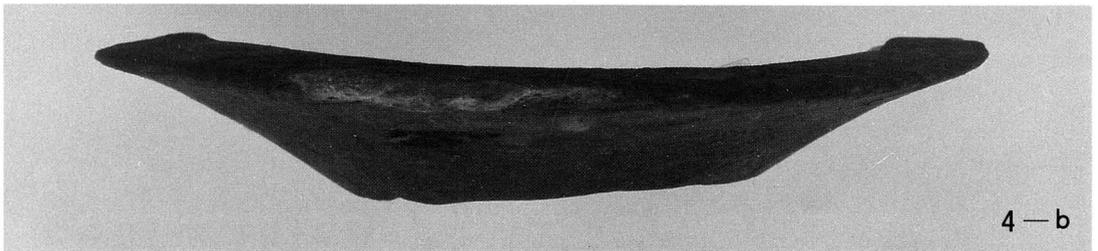
2



3

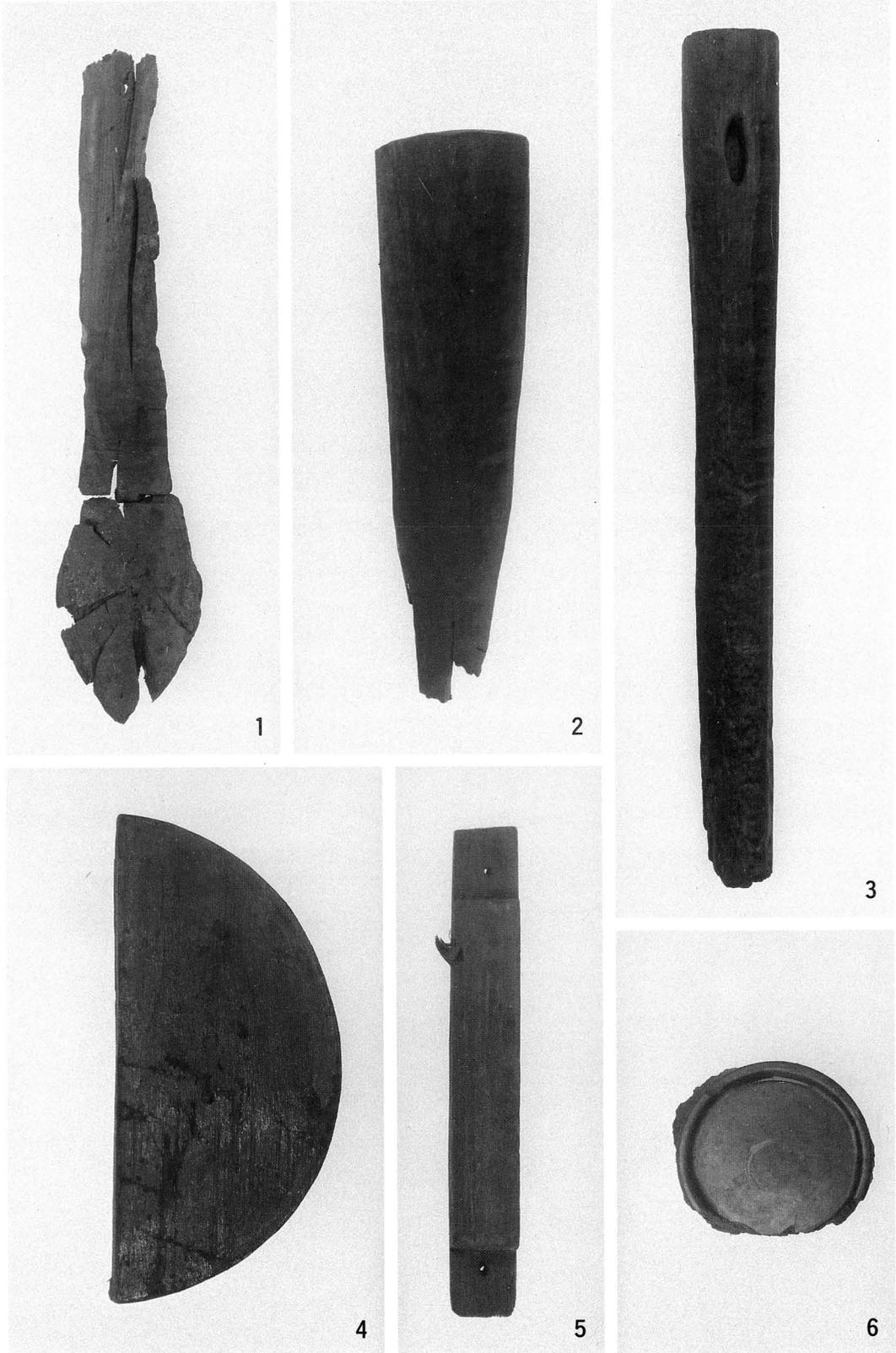


4-a



4-b

1—広楯未成品、2—板材、3—未成品、4—高杯
1—S K-205出土、2—S K-201出土、3—S K-103出土、4—S D-1201出土



1—杓子、2・3—竖杵状木製品、4—曲物底板、5—建具部材、6—漆椀
1—S K-101出土、2・3—S K-103出土、4～6—中世大溝出土

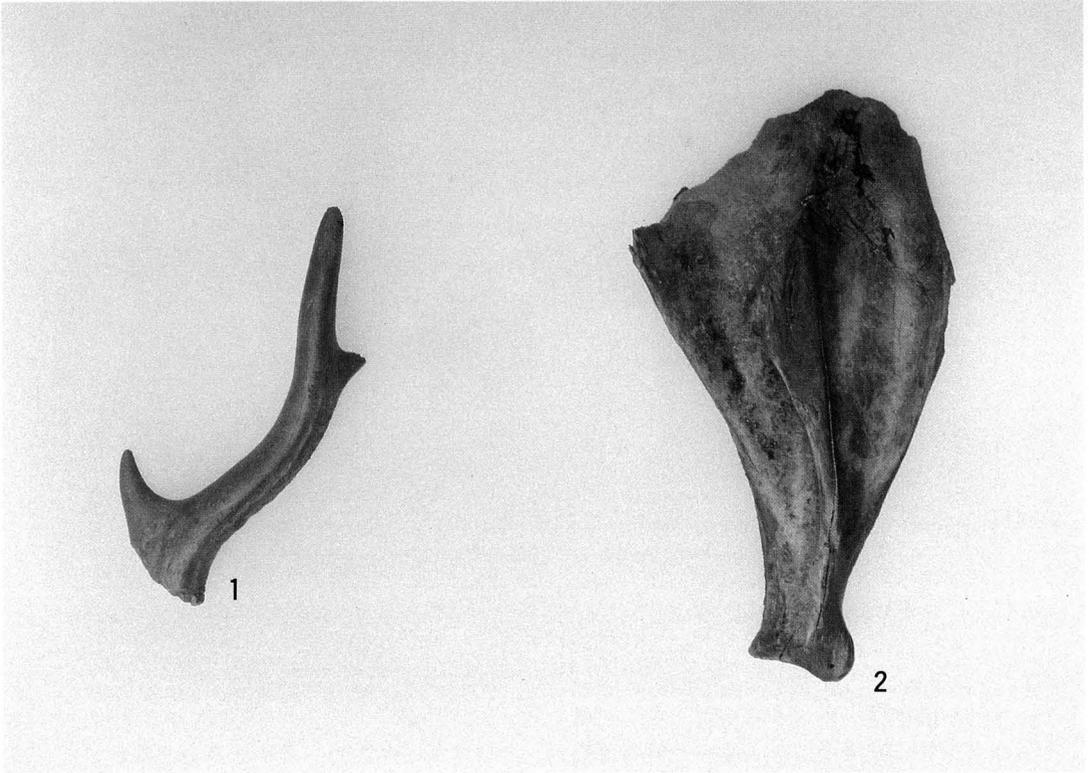


1-a



1-b

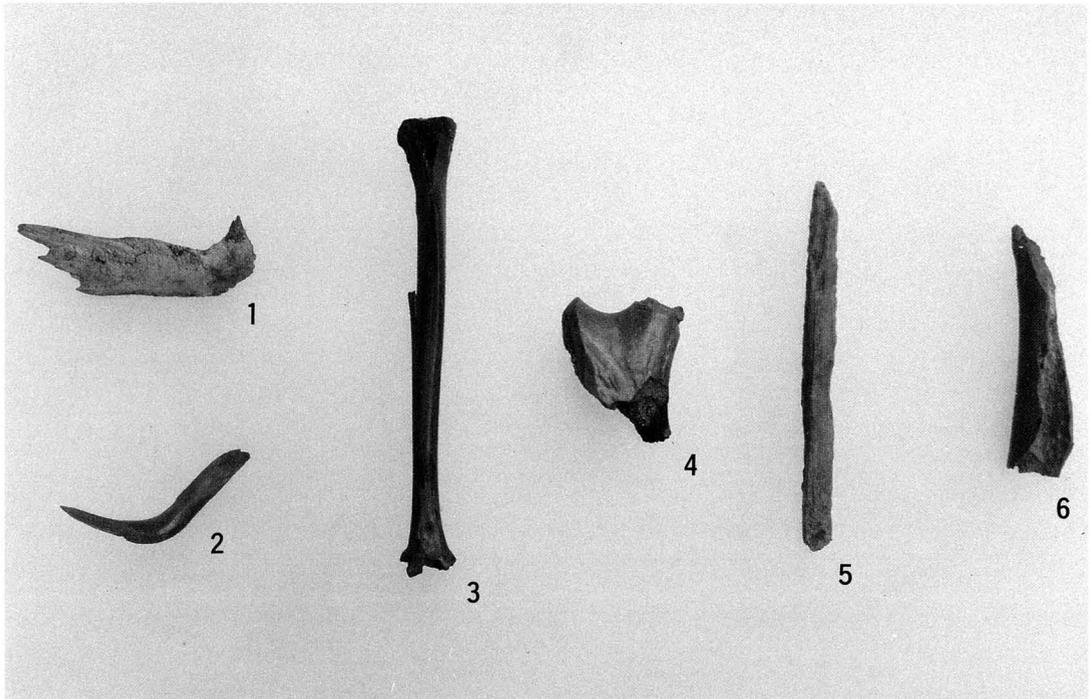
1-a · b 木製四脚容器 SK-103出土



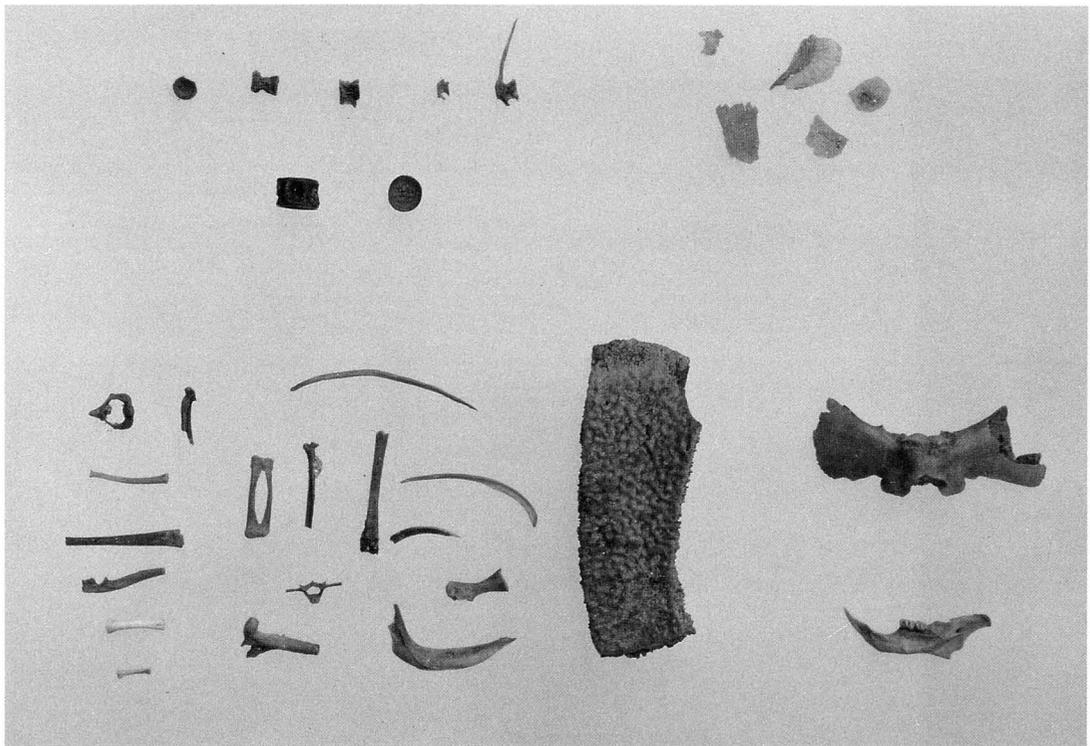
1—鹿角、2—イノシシ肩甲骨
1—S K—1101出土、2—S D—1201出土



3—イノシシ下顎骨 S D—1201出土



1～3—小動物骨、4・5—鹿角、6—卜骨
1・2—S K-209出土、3・4—S K-105出土、5—S K-204出土、6—S K-209出土



S K-105出土小動物骨



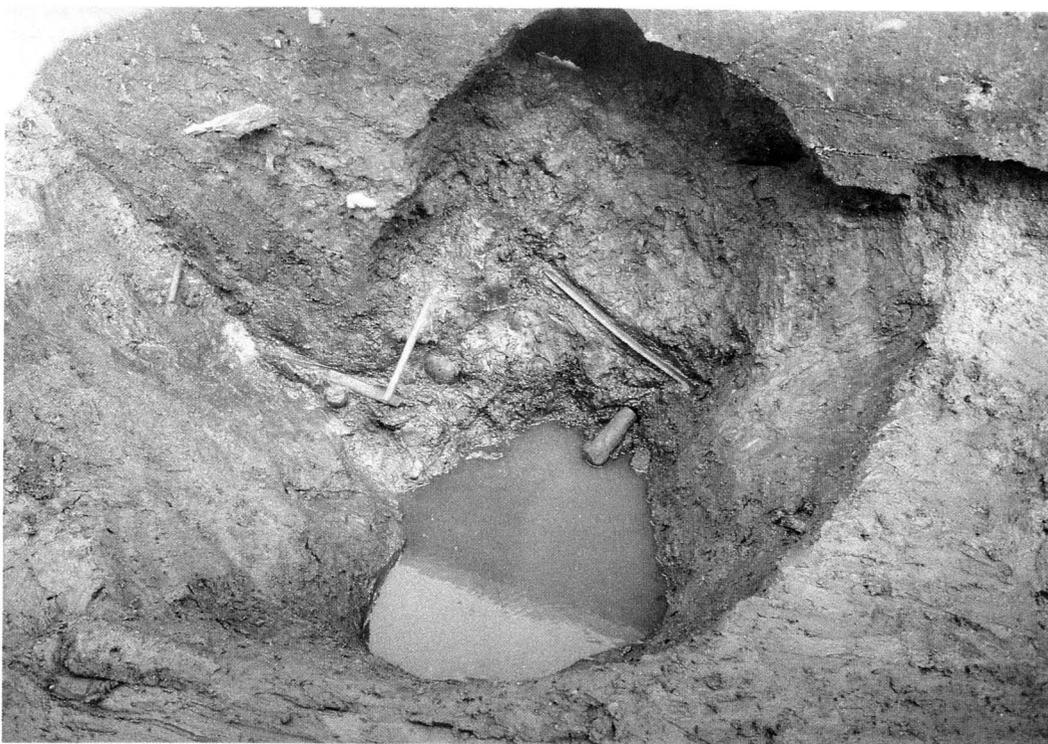
a. 遺跡空中写真（南から）



b. 調査地全景（南から）



a. 弥生後期～古墳時代の遺構全景



b. S K-103 完掘状況



a. 北方砂層土層堆積狀況



b. 北方砂層土器検出状況



a. 柱穴群検出状況



b. S D-107 完掘状況